昭和十一年八月下旋起草

南子雜組

九

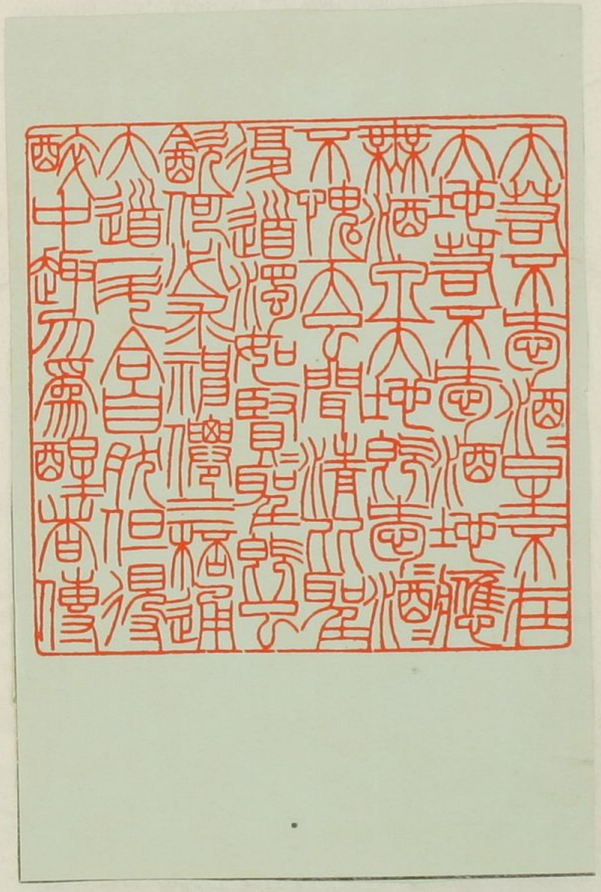
特別
14
1919
480

176745

雨子雑録九

昭和十一年八月下旬起筆

○和美山人の日誌が出版せられ佐野の手を煩はして佐野本が補注せられ出刊の中央公論に掲載されたのであるが、山人の歿ミ十四年七月二十九日から四五三十五年一月三十一日までの日誌である。山人の日誌は十千万里田舎の標記で明治四十六年石橋思案に由つて生涯を終れるまでである。思ふに明治三十四年一月元日から日露十月十日まで山人である、八九十が半世紀佐々木の得たのと童稚とのが校にいしいが佐々木の比較もてサーばかりの異日協減があるとをふてゐるが、マサカ



38- 9266

あるが、ただ二部ある筈なものがどうしたことか、自分の疑ひを生ずることを得るのが、恐らく余が十年万里の日誌と保存するところ一年間の日誌が連續したものを選んだ。

佐々木板垣の日誌を読んで見ると、自分のことが二三ヶ所に出て来るのを見つけた。丁度自分が新潟の客舎に咯血した頃、帰京の後数日経つて、保養したり、出て来たり、自分の病勢の一進一退を生ずるのを、自分の病勢の進退と共にしてゐる。自分の病中山人から見舞ひ状を送られたのを、山人の書き残した日誌を調べてゐることを知つて、それを見せられたいとの事である。どん

樣原製

なに喜ぶことと記してあるから、安決い御安心と共の板概を書くと思ひきりと言はれたことも、山人は文人が往年日誌を書き初めたことを、文人が往年日誌を書き初めたことを、多くの人が死去したことを、余の安決面目極めて安堵を記すと止まつてゐる。

つとらう。

山人の毎日の板概と書きれた欲念のことを決して漏らして

あるまい。どんな関心があつたのであらうか、

料理屋や人の駆逐するとを特るうまかつた献立

るどを知ることの山人のおき合者を知る思ひ

樣原製

いが、家庭で拵へる食物の就て大概毎日の記のあるのは、あの人の日活の特色とも云ふべきである。或る文士が山人の友人と湯に入つた時、其の寫真と其文の寫しが集雅堂で載せてあつたが、その記事は偽り自人の関係もあるが、自人は其の切り抜きを雨子雅堂に收めて置いたが、また山人を休めて柳橋の生日稲荷に飲んだ時、兼て山谷のハルる膳に飲んだ時の料理の献立を聞いて来て、市場と日体とを合せたものの記事もあるが、或は四日活の残闕かもしれない。山人は会ふと語れば活きて居ることを思はせる性癖があると感ずる。自分は山人の日活と古河で就て随筆を書いたことも

榛原製

あるが、此の活中の事を特に書き立てたのは毎日の記事は創作のことゝて俳諧の題材を選ぶことに満てゐる。飯程晩年にこんな設計をしたことは或る友人から陳情をいふと自分のビジネスだと考へたとあるが、なほ募集の俳句を選ぶ事は厚本を仕事で あるうれしい不思議な面倒かしらんやつてのけれど 思ふ。露四の祝宴中尉のビイツオキフに訪はんことの記事が九月十八日にあるが、その自分が寄せた随筆を出いた中尉が其雅堂の俳文と照合するから、山人の其後のことは知らない

十月夏葉子来牧して、霞子雅堂碓氷中尉ビイツオキフ氏切れ面人をとあるを読む乃ち

午前（午後の誤カ）二三時頃来れり（雷雨）故に午前二
時の大掃除を作して室を清うし、床に軸を掛
と挿し菊菊等と置き、午後濱沢氏同
道して勇治、五宮住来れり、文子後れて、房子一枝、丸
山多枝子根小元地（青梅）氷面鏡等を携へ
て大湯を飲む
と日暮れ、山人の接待振り窺かのうちに、中尉は日本文学
豪の家庭の食物なるものを食し、いと花やかに賑はし
旅行と載せられし
○英雄の興亡形勢と尾張及び英雄
の多く興つた国のうち、頼朝も足利も徳川も
も此地に興つて覇権を握り、豊臣と並つて丈極め

標原製

て遠い昔。尾張の熱田の神社に草薙の神剣を祀る所
であるから、此の神剣が権化して武士英雄となる
べと人が信じた位だが、これも謂はゆる「もしも」。豊臣は
織田の事業を大成した人のだが、実は頼朝も足利も
得なかつた覇業を就した人のである。豊臣の生涯も
永くもなく二世九歳人と続かなかつたが如何なる
時代といえども雄を切り拓く人、終に関白の
地位まで昇つた。英雄の事業へ富
士麓を但日やうなもの、輪うかしても行けば殿を大き
くする。英雄の事業を一城を抜き一国を奪んで美文
力がかゝり、其のかいつた力で、更らに日蓮（進）するから風
塵の勢をなすから、功の帰するかたちい所

全国統一の事業を成し遂げ終局の功を収め得た外国なら兵を進めて来たのは我邦に於て他に類例のない英雄事蹟である。豊臣の有力家臣は遂に殺んを固つて亡ぼされた。九州大名は彼の勢力に圧倒されて遂に対抗が出来なくなった。古来武臣で関白の位に就いたことの無い。あの階級のやうな卑しい門閥の尊まれた者が、革命から起る何人の門地も無い武人が一躍関白の地位を得たのは美しい驚ぶべきである。公家が多く領地つて門戸を閉ざしても力ある勝れたる関白の歴史的の家柄が極まりなければ豊公が関白となった時の近衛前久などの流れを平かにすることが出来ないから、神仏を祈へるお考へなども仕方が無つた。実に武門の人が皇室の

擁護の職を在つても、設令ひ武勇があっても非礼なる行ざまをしたんなら、公家は飽まで格式を固守した豊公が関白となっても御所のお入ることを許さなかつたのである。御所位の大事なる無論参列することが出来なかった。但し関白の母堂は北政所と豊公は共に参らずを関白にもされなかった。内証のなんの参らずに云ひて陣関白にもされなかった。豊公は公家の歓心を得る為め黄金を八切りであつた。当時皇室も武徳の公家も貧困を極めたから、豊公は公家の歓心を得る為め黄金を八万時いれ共言い三十六万石と云ふことである。大成人生の豊公の面目躍如たる事実である。大成人生の行幸を乱つてあるこんな武人なんの無いことは補足ひも飽る実例で正式の行幸であるのと云ひのであるから、北の政所の事も

どんな豪奢のようであったか、不思議なような挿話は伝えるが、いま、聖上奉仕と供奉の公家を勤めかしたる相違まで。北上年の天正十四年四月北上は、其妻和の北は一條から南の二條まで、東は鴨川から西は西の京までと云うが、およそ其の規模の大きさが想像される。相国の八幡造の大伽藍は焼けたまいしが、聚楽を築いた力を用いて造られた格式豪華は無論であるが、豊公の力に偉らかつたと共家は言うてもあるれど豊公が移住して来たころは、豊公の邸宅の跡は、僅かに佛閣の跡を以て大坂城を築き、桃山の御殿の大佛を心の代りの城を築き、芽を出すに至るまで。豊公も武

榛原製

く栖まるような方面の趣味もあったが、遠築法も特殊の技術も此時の為達し、所謂る桃山築を術とした。当時の遺構が、それを語っている。豊公も武并一方でもそれ程の勢もあったと云うて、天正末年から進んで全国の検地を行ったが、それまでは数度ひあつた土地を整理したのと、納税の基礎を初めて立て、こんな面から豊かな収穫を得ることが其の妙源であった。分倫寺院文化国家の属したのと所領を刷新したことも決して少くない。

豊公の時代にどんな黄金を鋳造したか作法の後山は其の時代に出来たとも云うが、豊公の軍用のため多くの黄金を大坂城に特別したことの事実である。豊公

時代の貴族が流行したのと、こんも住居の一生面を開いた、豊公の流出ぬさび家原と異って龍奢の氣風あつたが別に家しに拘ずもうつれの。全国を無視の荘園があつて、藤原家などが大いに喜んだのは考しめすべき、豊公の関白をうけられけんも荘園などを自ら配し

ル譯ではのうつた。

豊公の西方面の遠征と莫大の石材を要した大坂城の外壁の巨石を見る者は必ず驚く運搬されん苦労

位があるが、こんらの後政から犬崎ともこと石を得たとこのんでなる、京都の聚楽を造ひまつて大内京の礎石まもなく採り島戸の、ちがしの朱雀門の基石まもなく運び、之んを石狩と名つけ

複原製

石垣を築くに上手のことのうつた石垣の姓と名のらせれとこの説が残つた位である。

豊公が大きな威力をもつた裏面に悔恨を抱いたことがうつたりあつて、彼を覆さんと腐心したことの想像もあるが、豊公の義海をこの時日がうつかり守成の長もあれとの言ひうつた。況しも憤怒を含むものが常に胸内と密謀をしてうんかおれから、豊公も之を海つれ、まれに秀忠を殺したことがある。その原因を就てさまざまの説があるけれども、関関から家康に豊公の刺客に用心が足らなかつた関関を新しく豊公の刺客に用心が足らなかつたことのあいうの

豊公の正室北の政所の精懐の身であるが、山来史

家の研究に接すると、北の政所の母の義母を指つて呼
人に大略ひとしかつた。而して夫人（出来合つたのを、淺野家
繁して②ゐた婦が如き）取持つて配偶（妻）とされと云い
れをみる、此婦人ついに男子を生んでうれが賢夫人
であつたと云はんか、由来英雄の母を妻にと云ふ人豊
公も日吉の例と酷んず、蜂須賀家と戦ふもつた原因
も自豊公の意思の婦人が豊公を庇ふて蜂須賀家に向
しかからでもあるまい、而して蜂須賀家に妻と共に死も
敢て無品としてゐたのは、蜂須賀夫人が先失の問ひ生
人に女子をもつた、それが則ち淀君である。これが秀公の
寵を得て一子秀頼を奉げ、男傳りの大幹もあつた
と共に悪徳もあつたのは豊公の初根に愛る所じれこと

樋口蓮

ゐることが出来る。豊公の海内統一の媒妁の及ぼす所
いとが出来るであらう。多くの英雄の陰の寵の陰こんが
ある。
何んの間の格を以英雄の頭後に悲境を多いまの残
さんた切腹をもつて統一がつてゐる。互に排擯することが
お極り文句で、豊公頭後も家康を仕てやられこ
女切腹が一段を敢いたことである。天下の国を持と
云ひてゐる豊公の偉業も我と二代維持が出来
たのである。
○貧乏い公家の代名詞のあるが如く、公家のある
時代乱者の食糧に困窮した。ケ家のみならず皇
室まで恐んないもと困窮あるせられた時が長か

つぶし。保しあるいは時代を貴族の栄くれば衰もあつた。再
び立ちて藤原時代といふもあつた。今でも寺社などを調
べて見ると、貴族一家の建立に係るものが少なくない
こんなもの貴族が市場などを開くことを許すことがあ
る、寺社などでは大小はあつても多くは一年で容易に
出来ることのない。それが何人の所有のものなりとも
と、一年で武くつも建てたことが珍らしくない。且つも
それを維持するだけの土地などが寄進されること
と例とするつてゐた。貴族の財源の何んであつたかと
庄園が最も大きな財源であつた。此和名抄の荘園時代
に最も盛んに行はれて藤原氏の荘園の天下を満たす
とまでも証拠ひとつつた。庄園は無税地であつたから

橋原製

これ程有利な財産は無かつたから、其の全然私有に
帰してゐた関係上朝廷の役人も之んな手を入れる
ことが出来なかつた。又所有者の土地の事務を
司らしめるために程々の貴族の庄園の範囲を振
り拡げられて譯は、某貴族の庄園が近
んは租税を免かれ政府の手も入らないから、寺院
約束の下に己れの土地を保存することが行はれた。寺宮
多くの土地を寄進することも出来るから出来る
分会を寺や宮に出つくして寺社名義にして租を
免の手段であつた。庄園が多くなつたから僧兵なども出来
私兵を置くことも多かつた。僧兵なども出来一例である。
貴族が進で権力を得て主家の土地を横領するも

のこと。島津毛利などい九州の大名で有力者だが、実は両方共に元の名が後で所有者の姓となつたのである。過きるへ
藤原氏は茶道の方で庄園の所有者だから、支配
も工夫かつて譜代云いし藤原家の茶道と割拠して小王国
を形作つておれやうなものだ、落ちぶれて遂つて相続ひも
こんな獨立することが出来ないのだ、往々の契が起つた。
庄園を多くしたことが強くなる理由で、国家の収入が追々と
減じ、所有者の権力の相続を歴まるもの、国家も共
に人が立んを改めることの共同しなかつたのだ、容易ならざ
ることだろう。今家も斯の時代があつたのだ、二流の
風習を結構する時は、いつも庄園時代を
想れ藤原氏が隠岐所を立つることを思ひ出すべし

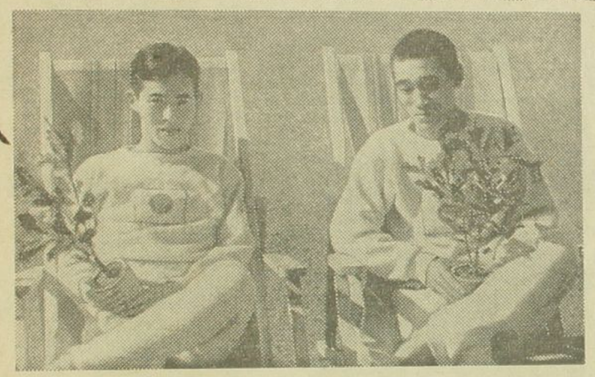
榛原製

忽ち他なることが突然出来たことを思ひ出す
ものと、貴族の公家の富を四の金にせと云ふか
過る因果と云ふか、茶枯縁が後ではハウキリなるのだ
寄かさんる位だ。庄園史とこの日本歴史中
最も大切な一つ面白味のあることを
付けかくて了る。

輝ける土産に『待つた』

他國の土は輸入罷成らぬ

農林省から注意



オリムピック大會の輝ける入賞者にはその國に神木檜の冠を乘せ、ベルリンでは特に世界一の榮冠を得た優勝者には「もつと伸びよ」の意を含めて槲の若木の植木を與へ、我が國にも陸上で三段跳田島、マラソン孫、水上で平泳葉室、千五百寺田、八百リレーチーム、更に女子で唯一人の平泳前畑孃がその槲の植木鉢を持ち歸るところ、この光榮の植木が果然稅關通過困難ではないかとの問題が起つて來た【寫眞は孫君と田島君の優勝を飾る槲の木の鉢】

そこで神戸到着の際のいざこざを豫め防ぐために三橋氏は陸上、水上兩聯盟にその旨注意をした上、これを持ち入れるためには、出迎へ人が日本の土を鉢に持つて行つて、船の中で稅關吏立會の上ドイツの土を拂ひ落し、日本の土に移植すれば大丈夫だらうと敦へたので、陸上、水上兩聯盟では榮譽ある槲の木が持込めないでは大變だとばかり、早速神戸稅關に便宜を計つて貰ふことになつてゐる

船中で日本の土に植替へよ

右につき農林省の三橋氏は語る植物檢査規則で外國の土は絶對に持込めないことになつてゐるので、槲の植木が日本に着いた時問題になつてはいけないと思つて、聯盟の方にお話しておきましたが日本の土を船に持つて行つてそれに植あてくれれば大丈夫と思ひます、稅關の方とは聯盟からよく諒解を求めることでせうし、內地に入れられないやうなことにはならないと考へます

オリムピック光榮の槲の鉢も頗いことになつてゐるので、このオリムピック大會の槲の植木を與へる困難といふわけ

この槲の木といふのは丁度日本人が常綠の松の木を愛するやうにドイツ國民が信仰的に愛槲と尊敬を持つてゐる木で花言葉では意氣壯麗を現すもの、十分に育ては周圍七メートル、高さ四十メートルに達ぶので、ベルリンでは特にオリムピック優勝者に「いよ〳〵伸びよ」と約六十センチの若木の鉢植を與へたわけである、我が體育協會でも次期大會を東京に控へて、此光榮の若木を個人に與へるべきか、あるひはまとめて神宮競技場付近に「槲の森」として移し植るようか等、早くも持ち歸つた時の用意をしてゐたところ、これが果然農林省から注意されたのである

農林省農產課に勤めてゐる三橋達郎氏は水上聯盟競技委員でウオーター・ポロの主任をしてゐるがこの三橋氏が職掌柄外國の植物を持ち込む困難にまで氣がついた、それは外國の植物が稅關の嚴重な檢査を受けるのはもちろんであるが

植物檢査規則によつて外國の土は絶對に內地には入れな

標原製

日活日活日活日活日活日活日活日活日活日活日活日活

大祭

演主　菊上　尾
郎太　るほか　野中

日活日活日活日活日活日活日活日活日活日活日活日活

九日より　20セン

戦争と恋と母

日本劇場　下谷河岸

日活

空明丸

日本劇場

9日より

巴里の屋根の下

20SEN

神田昌平橋
電・神3325

ネオパレス

S・Y・S・Y・S・Y・S・Y・S・Y・S・Y・S・Y

五人の子供

上特　現下時
映別

番組変更!!

後

害虫の輸入嫌つて 米國先づ禁止

何と日本からの植物が原因 但し上には上の虫

〝鉢の榊〟憂の目の理由

農林省からの注意で世界のナムバーワンとして喧へられたベルリンからの唯一のお土產榊の鉢植が個めしい植物檢査の網で入國が禁止されようとしてセンセーションを起した、これは種々の病菌或は害虫が土壤と一緒に持ちこまれるのを防ぐためなのであるが、檢疫當局は榊の病菌

○閣の乗れる二三の者デスレリーの傳を讀んでみる、就て思ひ出すのは荒かりし頃、英國の政治家で有名あるかんとのハグラストンで其の對立者デスレリーハ婦人であつた。自分ばかりでなく、日本の其の婦道が多かつた。自分がデスレリーを嫌ひであつたのハ深い理由があつたのでハなく、唯其の人が保守黨であるところから、權略家であることと、氣の合ハなかつたのと、そんなことからデスレリーの傳を讀んでしく感じたことも無つた。へらず讀んで見て公平なる觀察を下すと、政治家としての技倆ハグラストンの方が上である。ピットよりも以上である。政治家の世の歓迎を受けることハ世の境遇とハ

標原制

ゆ信ることが多く、是れ丈けでも其技能が與くめ、他の一般受けのする政治家を以ても立派な才一の政治家と判ることハ出来ぬ。巧みな世の風潮を乗つて游泳することハ成功の基ハ、どこまでもかうでなければ、先ハ早ち河世の政治家の範とへらるべき筈スレリーハ逆潮を泳ぎ通した政治家である。彼の或る年輩まで失敗亦失敗の人であつた。彼の他日の成功ハ失敗の經歷が先ハ之れ丈けである。彼の程の世の人ハ餘り無い。彼の程成し難きを成くる。政治家と彼の世の人ハ彼の世の人ハ彼の世の人ハ玉レツリンハこんでもある。どこまでも其者を以て政治家ハ多くある、日本でも決して少くないが、さて

んから玉城の人に多く生れたが、是は副業の賢かるいからでもあるが、風雲の機会がなかなか無いからもあらう。デスレリジエヤ家であるからこれが主身を邪魔をした。彼の自己独学で相当の学識があつたが、大学の清華生で毎つた。彼は投機をやつて負債を生じ、まんが為め長く困しめられた。彼は新聞を起さんとして失敗した。彼は日露戦争を今日迄四回つゝけて首尾した。彼の半生は栄枯と失敗繰返しであつた。係し彼の美貌の特主で、社交に巧みで、朱子学に長し、義理人情に通じ、著述もゲーテを愛慕した。彼は多くの熱心あつて、武士道の政治家の決闘を申込んで対手を瞞着したりした。彼は議会で愛嬌演説をやつて

つて必ず喜を受けたが彼は決して屈せず、二三年間から彼の演説を聞くべく皆静聴する者であつた。彼は小説家として成功する人であつたが、断然政治家たらんとして迷あ所が自無つた。彼は高尚なる人格を多分に有つて、つも英雄なんぞ誇称の志を知らんやの態度で一向氣さかけなかつた。彼は数十万の負債があつて執達吏さけき煙いたれが幸に未熟であつた。彼は何故か彼は奇服を着し人の視聞を奇動した。彼は多くの借金を捻いて奇策を弄した。彼は家政の貴族流がうく、政治家たらんとする家政を無かる事が大切とあつて、先づ十二才長する婦人を妻とした。此の婦人は金銭の足らざる

榛原製

に（が）ありしかは、家庭婦人としての（デスレリーの）注意と、性格の
なる北婦人が夫婦の性質の七種を経たるものなるを
見る極るに、デスレリーの政治家なる性格がよく分るかと
二三を摘記すれば、沙翁の詩を解し、英人の
と悲憤に堪へず、決して苦心せざること、英雄方をえて
が如しく、屋を心とせざること、京都方をえて
小唯々として、流れを順のやうに解らるべし、意思
小貧無比が、自惚が強く、自愛心が強く、彼の金言
小政治と切者の集中したるとあるが、恐らくデスレリー
をえんを迫切の解剖し、[illegible]を得たること
あるまじ。彼が政治家としての所以の北の
大局眼、あつ[illegible]の相違[illegible]。彼の[illegible]に就ては[illegible]

レッセンルの性格[illegible]
の井ケトリヤ女王が寶冠十七で即位されて英国も廣武
一新の面目、天地とともに北時の宇内へ[illegible]
なる[illegible]の保守[illegible]の勢力が[illegible]新皇ト深く信も
[illegible]る日[illegible]力があつたのに[illegible]を無視する行
動があつたのに、デスレリーは英国人、ビーンを相手に[illegible]
的演説をなつたが、[illegible]が撫揄的演説の巧妙
を極めたのに、彼の名演説家の名を傷するとれば、[illegible]
ビーン日の行動を曲義[illegible]
しりの[illegible]雲い志を達する[illegible]
ち給[illegible]ビーン日志の僧志所とするのも
[illegible]女皇も[illegible]

蹉跌後、後継内閣に入ることが出来ようとは、ここは
デスレリーの真面目があるともいくさのに、若し内閣に入
つて政柄を握ることもあらんを恐れて、自国の怨仇
を買いず、宮廷を媚びても其志を達せんとするのが才
幹あるゆえに抵抗するこゝにあるのに、デスレリー
は斯る人でありそうれ。彼れは才幹の人であり機略の人で
あるけれども、政治家の資格を飽まで具備
せざるけれども志の達成の満足しうるつれらしく思の
んる。

彼れが初内閣に入つたのは四十八歳の時であつた其時は
ち得れ持ちあり彼れの右得手為相の位置であつた彼れ
練の為る彼れは殆ど其の後れを取ら

ざるを得なかつた内閣が始まつて其後二三回の内閣を組
織し更に入閣した時は其為相であつた彼れは
十四年間一度の首領であつて、実際の彼れの地位は内
閣を作した英雄の如き国柄では、先輩政治家を
追跡するに無いは入閣が出来ず、久しく閣員の外に
辞職の数があつた。彼れは閣員として演説するグラ
ッドストンと和見くらべもあつた。彼れは自分の位
置を二葉ゴロウ[illegible]と自重して[illegible]
しかが彼れを忘しうるに[illegible]。彼れとグラとは全然性格
が異なる其の演説で互いに敵の状の真の就度
相持つの性質が其の[illegible]
[illegible]人同じ流の[illegible]
[illegible]人の[illegible]

あらう。

彼れが大宰相の印綬を得る前、大切な一幕があつた。

を三代目の[illegible]と云ふ時代である、北時政

年朱侍[illegible]北条義時の[illegible]信り提[illegible]

丸北北内の[illegible]の海外交特の少数[illegible]

加何目的を達成を侵して[illegible]エンナ時[illegible]北の大問題を

決ちんとする怪人が[illegible]桂を見[illegible]

しまの成の年[illegible]彼れの目的は後[illegible]

と終に勝利を得た。北時政デスレリーを[illegible]

南面の敵のグランドストーンであつた。流れデス

しりーを敵に得ることこれが北人が首相の位に

昇るの動機となつた。

榛原製

彼れが首相となつたのは六十四歳の時であつた、彼れの終生

の目的は北北位を[illegible]

を目的[illegible]成[illegible]

ことを形容して油を塗つた棒を撫でつるかのようと云ふが

全く其通りである。彼れは首相となつて女王の位を得た、

その位を得た所以[illegible]傳へられたる様に女王の配

偶アルバートが[illegible]の[illegible]、女王が悲哀

を抱くその時、[illegible]デスレリーが[illegible]説をなつ

たのが[illegible]女王の[illegible]動を惜

しむが如く女王の心を掴んだ一因であると云ふのである。彼れ

の首相となつた以後の政[illegible]

待ちかねたる夫人の幸福[illegible]

[illegible]を抱いた、左

世にあつた。皆打ちうつたから、彼の功績は餘りに大きかつた。
のるから、特に、こゝに記さるべし。
デスレリーは身体の羸弱の人であつたのに、よくも七十も
齢を保ち得た。政治上の氣象は長き仕事であることハ、
英国の政界に隊を感得さるゝが、デスレリーはよ
くも辛抱が續いたものである。デスレリーは敵を
撃破する人でいつも機会を捕へて進さうつ
た。政事家として最も大切な資質である。グラツ
ドストーンと此人はいろ〳〵の點で性格が異なり、グラツ
トストーンハ一直線を萬進するのであるが、此人は行路
の所の個性と顧み、其の言論も宏并ハグラツドス
トーンを凌ぐとも、敵の肺肝を衝くのは此人の

標原製

もグラツドストーンの上を出でやうの思ひ、後分のデベ
ートルとしてハデスレリーに優ること遠くの、此
點も亦デスレリーを学ぶべきなり。（八月三十日記）
デスレリーは若名を政界に五七あるが、彼の小説家として
も決して人後を落ちるものでない。政治家が小
説をよくするものハ、あの英国人の誇り愛ひが
よくさうつたれ。保し彼の手にの小説も自分の政
治論をも寓してゐる。彼の四大家族育を表
はしたるのハ、彼の父の大り淡も家で花也も満
ちてゐたので、彼の世の人々ならも者抱を多
く海外しに、若何もの少しも修めた。まと年時
代の二年間就りをしてのパレスタインや土耳

共ならぬ迄人に相面不平を唱へ
彼んが為に時代遅れの服を着用せしが遂に大名
となりたるの人金銭豪奢服を飾し星服の人と
絶交なる仲となりたる彼れ山氣がありなる彼れ
の行動を見るまんへ誤解が生じたるの種服の者
めてあるれども。志ある人格を持ちあることを不考のこ
とへ百さうるうつれやうれ。飽まむ迄古間態なるを
失いず、敵を攻撃するまで徳を迫らず、上品の
言葉を失ひたることいろ〳〵而る常ならざる
機鋒のがあつた。
彼れの姉は長身大切な場の良人を失つて絶生寡婦になつた。彼れ

の夫婦は最後まで愛を良人に捧げた。いつも馬車
に乗物を入れて良人を訪ねて迎へに行つたがいくら
おそくても馬車の待つて、常つて訪ねる入り良
人の斎間を祝賀することの無つた。何故と尋ねた
人に答へて曰く。或
る時夫人は馬車の命を持を捧めたことがある
が良人は氣を揉ませまいと苦痛を思へとも
種詰もある、北野人の胃癌を病んだが、それとも
良人に隠し、苦さまで良人と同伴して家庭を例
しれとこのんでゐる
英を利する例のごとくに女王がナスレリーを接待
の為め法のあつた時、毒を盛ることを奏

話して行くと、ビーコンスヒールドの妻が死んでから
デスレリーがまた結婚したのである。
デスレリー伯爵夫人が死んだ時は七十の年輩の人
であり、二人の姉妹を愛人とした。こんは極めて
純潔の志ひあつたが、彼女の一の心を愛する異性
が無くて、活きようの人間であつた。保し彼女
は異性との関係が社会から老の指環と考へ
るやうなことの無つたこんは政敵グラットストー
ンもそんを許したであつた。
デスレリーはグラットストーンとの異性を嫌ひ
全くおもしろい性格の持主ひあつて、後者の異性
を嫌ひ、前者の異性と

原製

結婚した。女皇もグラットストーンの宰
相の時の彼女の始終の乾燥無味なる愛想
をつくそんとそ〳〵デスレリーが毎日政務を
報告申上げるも彼女の文才を以て如何
ろくこいとのび女皇のそんを投見するのとなる
の楽みとさそんとこれ、七十を越えたる老
宰相を女優まるでやかやこいとあるから
色男ぶりつたのだ。
大勢の女優が集まつて、デスレリーをとり
ラッドストンの何と結婚やんとすると、話し
合つた時すぐも前者とこの一緒したが、二人
後者とこのあつたが、女王の附けかく

と言ふ人の、グと後悔するけれども、直くるデと駆寄
をする、其時グがどんな顔をするかを見ればと思
笑

○高貴人出業錠」と云ふ書に
大黒天の福の神を、格格うえ作るかす、之は
人の足の下を住む心を、身を持ちて、かゝ物
ぶらず、頭中は上を押くるん、上まぶれを
厚く作るは、下をえ上を見ぬ、米二俵を
でい持ちぬは足のるを持ちこうに、にこくと笑ふ
八人養数の心、分限なる如あめ、こくも
かくんみのかくん、こんを自分で、人をえ世やうん

模原製

慎み、僧上の心なく、里米飯を食しを奢をなし
なる、村出のふ槌は油断なる手をはれとうせ
特もなし、他を持ちなるを片時も放さ
ず用心とおもひて信すべし。

附今の世なる治極的所業の家訣を巧みな設へ
ひとまなびある。治極を主とし此経済法を於て、儲ける
ものも出ふると教へて冒険を戒め、上を見るなと
云ふて分限の守るべきを教へ、初へ八分目とこゝろて
按へ目を説き、鑵持ハやりを使ハぬと云ふて金持
●金ハをつゝの如の表を定し、賊賓ハ上中の理義
し人をいらまる、人公見ならば蛙なるん、自分の又の金
と見るん祈つれも、居る或時代の政治

の教である。心学者の流は仁義道徳を教ると共に町人の
住宅法も説いた。
北著の教訓を信ずるあまり勤忍函を作り、金を使用する
時は一割位辛抱して此の箱へ投じて他の用を節
約。或る人の子孫の遺言に曰く漫りに借りそいるな
が、時代は借りて早速返済すべきなり。絶対に借りるべし
いざ借り時期が来ると、人の破産と合致するとの云ふ。
嫁の成長後は育てられ子を忍べ、此の世
こそ苦労を切り抜けるとの云ふ。皆経験から
捻出したものである。（以上一八番地の表店の次郎の陰業を
後の人々の指導である）
八月三十一日迄

○内村氏が保しに伊藤公の立説を読んで見れば其
味を感じたので陸奥山焼打一件で井上の疎放の性格
が分るのが珍で面白い。
御殿山を公使館に当てられたとき外国使臣を
迎へ入れるとき、いろいろ時がある、今迄の焼き捨へた
ら、唯あし外人に情誠するとあるとう。幕府の不
面目のいろいろ、外交の光を国辱を極む
る、捜索の志士の奮起する。幕府の
欲望を満足の為に役を捨て行せる
べからざるを覚悟を極めて行せる
高杉晋作、久坂玄瑞、有志熊次郎、大和弥八
郎、吉嶺内花太、白井小助、来福軒之丞

堀真四郎、福原乙三郎、山尾庸三、矢野から井
上馨多と全（伊藤伝）と陸奥十二人で、御殿山の
公使館を焼き拂つた。
今でこそいゝようなものゝ、其時は生命がけの
大仕事であつた。
先づ謀略の為めに、まづ相模を定めた。そこで井上の馴染び伊
藤の出身地相模と定めた。其時分は藤氏名
いめがあつた。名をお里といつた。其時分は藤氏名
を用ゐずに実名を通つてゐた。このお里の家
屋を謀議所とした。
いよ〳〵焼打を実行しようと、まづ第一歩として。
元治元年十二月十二日で寒い時分だから、

横原制

五月雨傘を着せた。若し敵と遇つた時に用ゐず
をやつてはとうとう、時庵のもとに刺る目
標をつけ様にとのこと。といつて始めから、誰でも同じ
といふことが判つていゝから。そこで相模の裏と白
木綿の長さ五寸巾の手拭を幅二寸許りのきれを
縫ひつけた。イザとゝふ時へ、ずれの縁を重
ねべーし着て、これの白の目標をすること
いよ〳〵出て、
焼打する焔硝が必要であつた。ところが人もあらうに
そこつゝい井上がえんを引受けてくれた。余は
（伊藤）如何からうまくやんがよいかと心配した。
いよ〳〵当夜まで、井上出来ぬとのこと。

「按用があるか」と尋ねて手拭の右端を宅へ入れ丸いまゝ
右方の袖から出して見た。焙碗の炭団である。
上方来れば一かしまゞ出来るが大分早い。といって身
体へつけてあれば危険だと注意すると、是丈の事
だと云って、此の二個の危険物をとっとお里の部
屋の隅へかくした。こんで大丈夫といのだが、是
から元気のを付けやうと一回び飲み始めた無論
お里の部屋に隠して置つたのである。
京橋久次井上らが時間をつぶす為に新橋飲
放題の真最中に余(中略)の悪りをした。
公使館のまたあるから内国の防禦が甚重れば
らう。こんな所る用意が肝腎だと思つた。

榛原製

ここで又人夫の飲んでゐる間に、ちらつと品川の夜見
世をひやうろうろ行うとすると、丁度手ごろ
な一張の鍬があつた。値の二朱だといのかくまえを
買って帰って来た。土花相模の入口に天秤棒があつ
たのを、ここの鍬のをあの中へかくして、なくなる
鍬をみんなで一緒に飲んだ。
ここで花更に人数をまとめて今の一時頃
時分いよいよと一回打揃って土花相模を
出た。この時に平八人動かず、最前かくした鍬を天秤
棒から取出して腕を差し込んだのである。
いよいよ御殿山の公使館を焼くこと、まの用意いた

きこり丸太の柵が立てあるとも生来ぬ、上から飛びこすことをいうらしい。いつも敵を後ろ合せる者或の殺ひめる。誰一人、この関つを破ることを気がつかぬ。かうゐとの残念心と久物かりあ、

ところで手（伊藤）い「拵吉斯くあるべき者」と脇から鋭利な鋭い

この利器を用意しもきこれ。北時（日の敵）の敵ひへ殺ひやうもなきまで。丸太

拵き出した。

の根元を拵き如何。物のよ時かいつれとう。二本

ばかりはづすと一人つ、這入んる。

本線と通つくと者人かあれ「何者だ」とあある。「云

々の天下の志士だ、瑞岡のなる妖気を拵はん公為

めの来れ」といふと、何をすると「関の、焼打をするの

だとは云くるる、えへへ〜〜この拵さめ」といふやうな表

情を立人する者ひ居る。高杉の止めを得ず太刀

を振いて、峰打を喰はせられた。丸太

さすが高家氣の者人も逃げたまうれ

家の中へ這入ると、ろくろ大きな。よひ居る。戸隙

ふと はかりしてこれと二ケ所の穴よる。井上は「婦人

の裏口も出た」といふと、しまつて、お里の新屋

の数の二重くかくれの中へ生して来るのを忘れ

ルとこそ。

果して金の心配が実現、今更仕方がないから

さらんこの二個所の戸隙子を四方を多けれ

を蹴けれど、木が汚しいから燃え付きやらが悪くて、家の中一から火をつけれのだから、なかなか大変なりたれ、サア逃げようとしたのでもあるが駆け出しえの拙いこと、と思ったとしても引上げた。右の井上の逃げる時に、濠のや一番けに入んで泥にはまれんとうに。あいたのであった。

狂人四郎まで来ると人の手に蓋と縛られて、一日えん天に張る。もう消防夫がどしどしと働き出す。一日えんもうあれと思のて快ぶとは人びのであるの日あれ離れ〳〵に酒樽と飲人にあるある、金に別れるのつれ。

さて御里の新宅に遣しに焼有の山家図がとうろうに心配に振られる。里が井上を逃がれ土蔵相模に出ようけれ。あんまるこまが幕末のようなこと

這入つたら、是も徳川の御旗とうるから、早くかくさかべうるめ。お里の留守を家つて、をつと敵の意をさくるとしてうるあるべき筆の山家図がないい。さあ大変、一大事だ、もうズキかまれつれのか、平生大臆な井上の顔もちくうろうに、なる面に御里がやつて来た。

井上の姿と花つき掛つて、「お里実は仕方ない」

つらん岩図を敵の意表にかくしたが、誰か目付けたらこうのと尋ねると、「貴様方に実は乱暴ないつらをさせる。分所ら出て蛇岩通のやつ、入れたところで、一の火鉢をつきませう」

と火箸をはさんで、仕方の中、入んようとする。

横原制

井上も余程困りました。まず一つを以て人命が亦長一寸の人命の悪く形容さんなんでゐるもの。

井上は用事もお互の手を押くと思ひます「何を馬鹿する」と叫人なるお里は平氣なるものゞ山犬同を火鉢へ入れる何か馬鹿です」「えゝ此の炭屋の焼おい貴君炭屋とやるの」「えゝ此の時屋の焼おい貴君がるさつれのゞ」「えゝなるほどいこと」いこえをんゝ思ひあるまいまいこゝ牧で性急なる井上は思ひます刀を手もあけれのお里は仕方ーとなるといはぬ許りに答を改めてさていあるの

「貴方も天下の志士なること、戦場なること、既りとなくはお氣かかさい。如何ことをもの、和共も

同じ御国の人は御存知の通り一度落ちる他人との思ひきりもんの、何で貴方方のはんなるものことをいつ切ーしまいそう。扨あの大抵わかつてをりもの。そこから親の意のは只の炭屋ではあるまいと思へばこゝをお頼の油断さるもの。やうれと、意外けを待たず意の後沈めます。ここまあるのの真実面倒の只の炭屋ではす、今以真物の小薬屋を家の中へ置くはず和尚思物物あるもの。余熱けの大まもとなるこの肝腎の原因をおこんなるこのやうれい、行方が無いんとなるまもの。こんへ飛到な悪まんは、お氣のあさんなるもの。よき時

して不さうまも」

井上いこの苦言を又いて羞かしいやら辱けないやら

男勝りの御里の威勢と豪膽にいとく感服し

なやうにおもふた

幕末の大抵手著田志の仕業ひあるを田星をつけ

たれ居るものが西郷のきいのと、或らこき長藩の奏

力に逃寄したるを又こそ、深く追究せうんかから

田志中一人もこれが為に或ひは受けれこまの

ようなる

大事敢行の大衆を犯してる刑を免れたるもい

まだ幾の縛を張が陰謀の未要得るも実の

榛原製

を得さる幕末の形勢こんるるもあつて

（すべて原文のまま）

伊藤公の立派の由一二逸話を録すること、公もよろこぶこと

吹ひなる。余の去る記ていたるの

金をもて余りまをなんへ、一個與ふの妙漢るるきる

い、云し殺ぬも学問が足ひの式ひの金れ金ひる

であるこ、或いの金をも浪費ものこと

と等原君）其、記ていたく

等原君）其の、ものこと乱の乱の金が等も

の一點振るもあるさる小事もあるる。若し金ムもも

バ需とをつて、時宜ものこと文部を勧めすもあら

彼の大言壯語の一寸狂氣じみたこともある。

公は花りめき大言壯語しながら、勤王思想を山陽から得れ
と自白してゐる。公の嘆んじた日本改造論を後の、日本を脱出して
外國へ出られた時、地球を抱くべしと云ふこともあるし、化する能
こゝろの所がもつとも云へるであらう。あまりに見識が低い性格がある
の、

公が横井先生であつたことは高杉晋作の前項にも
ちゝてゐる。晋作は横井の日本を育つたといふ、一九世紀の
横井を心酔されたものは立)関係がある。脱亞論も英國の
り海軍の兵術を見て驚ろきてゐる内、外國の連合艦
艦隊が来て、西を砲撃するとき、流石の勝海舟も生

榛原製

来う程井上とれる為きの金)と就き横井の死を
唱へた、外國の砲撃と見た人と輪廻れ彼は史実
誠の祥まべきが、横井の右可うる位は外國を目撃
とも氣がつきそうなものだ、切成つた後故人を見ると
あるもひも道)真ひる人を及ばずとするのは、実へ仕業
のから威張りを見たんぬ

公は伝流の人間味があり、愛嬌を自ゐしもある。吉木
用義を就て云く、彼の男は外國人をあるものだ、
世色の聚通が利かず、品位方正を自称して、金を女色を
戒のれこともあるが、彼の男の表は頃、方寸を馬小屋
と流あて義の小りし場。彼を表芸者が横柳を撤して
弱られこと、彼は忘れ、彼人の忘れもあるとて笑つてゐる。

公は大分詩が得意であつたが自分は多く見て居るが、左の如き
八傑作である。

寒烟千里沒平原　蒼茫涼雲々村漢魂
蘆花秋赤老　汝元雁影月黃昏

公は西郷南洲を推して創業の人とし守成の人として、亦政務
を重んじ人物を重んじ、育材を務とすることがいやしくも天下
を一新し人心を一新し、遂に西南の変となる。吉村寅太郎も
西郷の如く創業の人で勇猛であるが守成の人ではない
と評してゐる。前田侯爵は西郷と伯爵を較べて前者
は英傑と言ふから、
英傑である。藤山は卓識の人物であるとある。横井
氏は新しきを求めんとする。

横原製

田松陰も亦論ずる例を挙げて論ずるに、横井論ずるに
つれることが多い。或る者は伊藤を推し、松陰が長
州のために、[illegible]。松陰もまた論ずる。
を政府を固しめて外に[illegible]ふとある。
幕末に於ては殊に幕府を妨げる長藩である。
幕府の長州征伐の経緯をいひ外交と就
いて馬関砲撃のことも[illegible]。
剣舞を推されたる。[illegible]
吉雄の[illegible]の大切の部分を上げ
めてある。伊藤公は北海を活躍し北一人である。
話は最も大切と信ずる。保し立憲の自覚は
とうとう自家擁護と信ずるのである。

の割引のことを得ることがあるから（九月四の巻）

日庭園は観賞を目的として家に添つてゐるものゝ外に思

いんるけれども、之を知らず観賞を目的とするものゝ八分

日のやうな洋式のアパートのやうな建築が盛んに起へ

つてくること、家の地位と庭がなくなり、火災なども起へ

所がなく、ようやく市街を公園が起る。

[illegible]

[illegible]

附帯して無くてはならぬものの感じを家を建てゝも

庭園は一体を建てるものが出来ないから生じ

たものである。西風のなる実情を通ずる為めに地を要

するようなる。農作物をいふ事を要する家に

附帯して無ものの感じを要する。ムリゲの垣根をなら

少しは今の為を細かく移して植へても、一寸庭の格好と

なるが、観賞の為めにするなら実用の為人の為めが

観賞の用となる事一歩を進めて大きな

建物例へば宮殿や寺院などに儀式を行ふなら

庭園に相応しい。新建の御儀式に庭を行ふ

ん比例がある。寺院七日祭や或の胡麻

を焚いて踏舞をやつたりする庭が必要であつた。

北等の歓賞が目的であるから、目を楽しきるために煙つて樹
石をも入れるのである。
[illegible]池を夜まることの実用から生じたのであるが、そ
んがいろいろの変化を生ずるに寺院[illegible]の思索
上寺内を極楽を象徴する枯山水工風をやはりそれの
も自然の教ではある。池みな蓮業を植えるのも其の一端
である。庭中を盛り砂をやるのも、西域の沙漠を
擬したと云へば云へるが、大徳寺などの人々が
庭一杯を白砂が盛られてある。金閣寺などの円形
の盛砂をえる。
僧侶を戒しめの意味であつた時代に諸懇を絶ちもるため
葷酒の山門に入るを禁じ、人家と隔絶する生活を

企図したるものである。寺の境内を深山幽谷からの象徴
やり、樹枝を交へて重畳尚侍し、[illegible]歩く苔
を踏あやさん特に陰樹●本位の母性を[illegible]
も、山林生活を擬したるものが、後世新覚本位の庭の
起つたのも源をこゝに求むべきである。西京の金閣銀閣
を始め名園が枯山水を多くもつてゐるのも無数の洛の寺々
が庭園美を誇つてゐるのも、深山の自然を倣つたのが
元だ、それを起す種々の表現が枯山水であるから
古い寺院の庭は今日の面目を知る事もさへ、今の庭とも
あまり一木一石と雖も皆創刻後のものと異つてゐること
相違ない。たゞし意匠特の面目は強ち想像と雖く

ちの、西京の西芳寺の庭園は、夢窓国師の心と云はん、国師は支那から作庭法を高らしめたと云はん、足利義満も国師の教を受けて、金閣寺の庭を作ったと伝へられる。

が、今あるものは西芳寺の庭園のみ殆ら変化して居ることゝ云へば、其の面影は今も拝する事が出来る。

西京の古刹の枯山水は、殆ど樹木の間を立てられたものゝ様で、其の環境と童様なやうな庭が心を引く。殊に樹木を避けて、砂石だけで庭を作り、清浄を損じないのは、如何にも高時の寺の庭園が大抵損じられたのを見て、近く都の中心三條山崎の寺の環境即ち高時の庭の跡を見てゝ、三十数年前の記憶を思ひ出す。

榛原製

憶の大部分が消滅するに過ぎぬ。尚ほ東叡山の庭園は不忍池をも保存して今公園となつてゐるのは、うるつけである。

庭園の発展も既にエラボレートされて来た。個工が行はれ、こんが作庭を大きな影響を与へた時、茶道が行はれ、茶道が趣味を導び、清潔を尊ぶ事から、庭も自然を則ることとなり、花やしきの様に一木一石を置くことを切つて捉へられたことが、一般の園芸術へ影響し、今日作庭の話のまくらとなつて居る。日本の庭が西洋と文部あらうも異つて特色のあるのは茶道の影響であるとも云へるべきであらう。

作庭法を通じて流派が[illegible]起つたが、流派と云ふものは
おのづから物況する所があつて隆り盛衰が出来
る。彼の支那の道学から説く陰陽説も
は、或る流派は金科玉條としたが、一木一石陰陽説を
基礎とした所を却つて自然を背馳する忌味があつて
おもしろくない。亦た或る時代を天然、支那を働き
支那流の模倣をも国内を置いたが、こんな盛衰
の事実を見ることがある。
諸侯が江戸を第宅を構ひてから、各侯の作庭は競
爭の観を呈した。洪大の土地を起し、恰も今日の公
園のごとき大庭園を邸内に作り中には名園と云つて
るものが多くなつた。江戸は海を埋めて造つた所
を池を引き入れた所も多く、自然の富立地を利用し
た所も多く、或は日比谷を利用した。北大名屋敷も巨
石を物珍き取つて大庭園を作の比例を求め、東海
道や奥州八景を擬して庭園を作つた。大
名の家族達の矢はりも外出の出来ないから、
[illegible]を通過数[illegible]の地として無理いらない作庭
の紫達は以上が賞讃されたことも
[illegible]
庭は当時行はれた画風の影響さん四條風狩野風の
趣向がなくて行はれ、江戸で天人風の作庭が行はれ出し
たのは以後の事であつて、その支那風の表庭
であるが、敢て支那の作庭に倣ひ、四條流の

奥氣を脱して愛と一生面を開くことをつとめ保し造成ち
ことろのうんが著及すること氣もちろの内之洋式の家屋が
漸やく盛んに建築さるるに至りて、作庭法も美と自然
ら調和を保ち新人ならんことを期するつれが、開港場ち日面
洋の無趣味なる花壇をもつて之を反覆し、日本の自然
趣味が安ち調和を得のみなく、建築も亦心しもちめ
折中の美を失ふもあらう。

○西国者公は幕府の卿国し来て現と私の家業と自の家
を所ひん人は、一度い頃府ちのもちの
人びとなるが、自分の幼時又は幕府の頃
ことがあい。併し何ともいえ懐こうみがちるえまい
公の事蹟をいろ〳〵聞んで見れば、公自ら書かれた所

横原製

御家流書の内之公は薩摩藩と陸奥の家
を必領して一通り四方を見れば、どうも井戸と臭
氣があるところの所、神々と見ると死骸がどんく生て
きて、頭之五つまで出てきれとあるが、最好ものあり
勝のことろ〳〵公の深慮ろの海を開口されな
ぬであろう。公の早くから福沢の著書を所まれば
が四倍の公家いろんな本を人の見ろ事し買ていい君
の為りまるとと日志をしたもあられと公ち
階級を捨の人で一度の特殊部義の如と結婚
しないと金をしたこともあるも、公は善佛義者のヤワ
ト流人は此伊藤西と相同の事し、ガンベッタに向ち
てあるが、明治三十三年再都の時ガンベッタを訪ふ

詩人ちう

来宿南洋月夜清、拍枕夢覚起憑欄、角無涯恨、月輪金笛怪猿山

公のはりんマンソーとハ四字熟語であつた。南方名を成して

から今年の時、公ハ生時代とまつたく異つて、真面

目であるが、皮肉の人となつたりんマンソーを怒ら

いハとある。

公が巴里滞在の時代ハ風流を多かつた、今三首も

たゝる。

巴里客中書感（羅紗絵）

朝霞痕如多映羅帷、秋入沙庭点点微、緑酒紅燈時暮夢、流歌一曲晩依稀

佛家ロ占

挂冠漸覚絶塵緣、大人政務身忽化、朝々公

利化朝餘、尋先仏家最難所

公の詠歌の詩こゝに

丁酉夏佛家寒次羅育腸炎、衆医令

診相生死不施戒解術、恐女疾不治、

賦（明治廿九年）公作

金刀一刻欲回春、脱屣疑是役鬼神、自笑

閑笑祇不得、正生我是病人

公ハ七年ぶりに京を墨くとして自分の家に書き

残された「静以修身」の四字額ハ山陽風でよく出来

てゐるが、丈八南画も相当でんれとして、京都の伊藤

古風なる書二枚の表装は其の公の侍の者
端を取めたるが、山陽ならん寄与上手にてあるかに
又愛せらる。
余が家の祖父の和歌集「張童集」を十名六名前出
版し此時友人不淳翁一氏を介して是家をもちいて世
つ此の今七代ら自マセ屋風を貼つてある。是何と
云く一片の飛心在玉巷
先考が宮内省に奉仕し此頃
陛下の御覧を供さんが為の多い事
あつたと云く、先考より式を三年位以洋寫かせ
事であつた御覧の罹紙の裏心に「富春」の二字が
刻されたものへ此時こそ記臨したるも、分の新会ら伝

標原製

り自由ならを度刊し、其後此の文庫を設立さんと
のことあるも、ひとり北京書籍市場の今回書案の花色中を
有りや

ニュートンの署名入り本

ラ博士發見

去る三月本紙學藝欄に日本耶蘇會古刊本の發見について興味ある消息を紹介した上智大學のヨハンネス・ラウレス博士はその際引用した天津商科大學アンリ・ベルナール教授發見の古刊書類を親しく調査するため暑中休暇を利用して北平に赴き同地の「北堂文庫」を見學中偶々今日まで全く知られなかつた古い日本耶蘇會古刊本を發見した

北堂文庫は北平の王宮内にありラウレス博士は精細な調査を遂げた結果同文庫に保管されてゐる日本耶蘇會刊行本は少くとも七册を下らないことを確めた、この中には先にベルナール教授が一年前發見した『金言集』(一六〇三年版)も含まれてゐるが更に今まで世に知られてゐない稀覯本として一五九六年(慶長元年)刊行の『教義綱領』(コンペンデイウム・スピリチュアリス・ドクトリナエ)一册が含まれてゐることを發見、別に全三册から成る有名な『長崎サクラメンタ』に今まで知られなかつた祈禱書の付録がついてゐるものも發見した、七册の内他の二册は『長崎字引』(一五九五年版)でこれは既にエルネスト・サトウ氏によつて世に紹介されてゐるが『教義綱領』の發見は實に我が切支丹文學研究に重要な新問題を提供する大發見だと學界ではいたく喜んでゐる

ラウレス博士はこの外珍しくもかの『萬有引力』の物理學者アイザック・ニュートンと署名のある數學書を同文庫内に見出し多數の稀覯本のタイトル・ページ及び内容を千五百枚の寫眞に收めて持ち歸つたので近くかねて内地で蒐集した切支丹文學書と併せて觀覽したい希望を持つてゐる【寫眞はラ博士】

○九月十七日特命の事有て上使井伊掃部頭殿
大府勅使吉政殿長州公今を一統し給ふ義公烈公の遺
跡を訪ふことを初め、大府諸名士の事跡に関する
ものも多く出陣されも出帆されも細説
いと未だ多くの部烈公遺跡の事多くとなく或人と海内
多く出陣されも戦誠を眼前に見て人心自の
を聊か知る知れ難く

一烈公操甲冑馬の図　常盤神社蔵
一烈公愛用東海道の書　常盤神社蔵
一烈公所在の御印の法書　徳川家
一烈公自心の眉尖刀　常盤神社
一大日本史稿本　徳川家

一右献上の上表文并に目録　仝上
一烈公の肖像鏡日本丸　仝上
一烈公の二字草書大字　乳八寺蔵
一地球儀献上品　徳川家
一烈公大字梵字軸物　常盤神社蔵
一烈公考案の潜航艇式甲船の図　常盤神社
一墨画砲模型と大砲の図　仝上
一雷管式三連銃と服部式弾砲　仝上
一天極砲　仝上
一陣太鼓　仝上
一烈公考案の布袋型銭筒　夫津一雄蔵
一紙製大筒　常盤神社蔵

一列公記事の行幸所

常福寺

列品の内珠と異味を覚くれの列公考案の花々の中
芸ぬあるれ所々の変化ヤ樹間の花々の意抱墨
跡の一々拝するを皇かるいる此今之の行幸の入口しるう
ウチンドウに記品記所分が神奥西院記と書いて長る
間を人形もあるらしい 場内にい列公が撰田一騎馬ひ追
鳥狩の人形を化つてあれ、井伊大老を桜雪の模
型もあつた。

九月十七日録

模原制

つておきの言葉であらう。近頃のエネルギッシュな活動は、確かに超人的であつてホルモン注射以上の謎像（スフインクス）である。本年に這入つてから刊行された單行本も五指を屈するに足る業績を擧げて居られるものである。

其れ等の近業の諸作品を通して窺はれる翁の風格を一言以て言へば、趣味人として典型的な東洋風の姿態を完成されつゝある事で、單に形骸上から觀れば、其の記述に江戸時代の藝文界の雜學者の隨筆に一味通ずる風韻の存る事が指摘され得る。けれ共、内相を少しく注意して觀るならば、創作態度の上なり、内容の藝術的筆致——翁に於ては、意識的では恐らく無からうが——と云つた根本的な異差に氣付く筈である。

翁の隨筆は、譬へば、古老の諄々乎として、月夜に清談を說くの趣があつて、其れが一見、無雜作に誌された記事であつても、決して作り咽でも無ければ、潤色に彩られた稗史でもなく、深奥には豐富な、又確實な資料の實在が祕藏（ひめ）られてゐる事實は改めて言擧（ことあ）ぐるには及ばない。

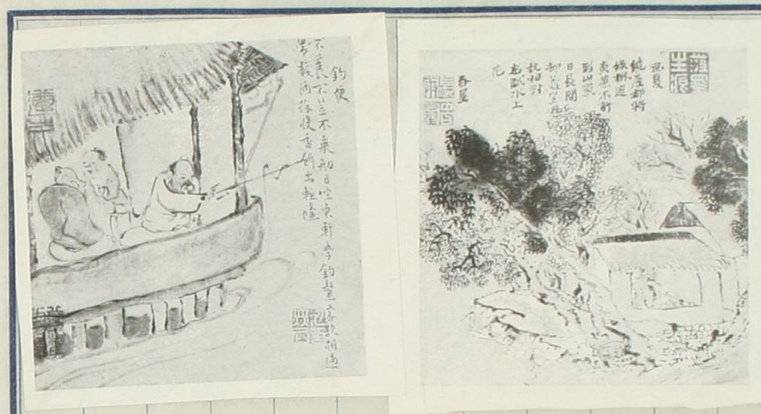
一般に翁の作品は考證的隨筆と目（もく）されてゐるやうだが、これは決して正鵠な評言とは申されないのは、上に述べた作品の個性を省（かへり）みれば明らかであらう。

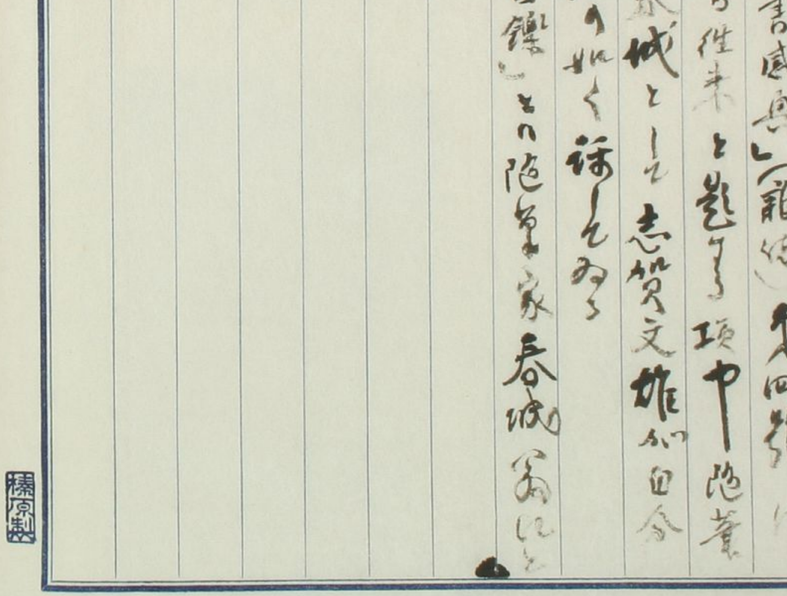
私は翁の隨筆の中で特に傳記に關する部分に興味が牽かれてゐるのだが、或ひは翁の十八番とする所でもあらうか。

『文人墨客を語る』は、こよなき福音の書として、愛讀させて頂いてゐる。主に近世の文人墨客百三十餘人の性格行實の横顔を素描された作である。この人達は、これまでの傳記と名打つた書では、學問上、藝術上にそれ〴〵獨自の城廓を築いた英雄達として、我々「雜兵」共の頭上に君臨してゐる人達であるが、本書に於ては「御同役」として共に笑談する人達で、その性格なり行實なりは我々個人々々の心象の投影と認め得るのである。傳記の「學」の目指す究極の目的が、人物の完全なる再生に有るとする見解に誤りないとすれば、考證のための考證、有意識的な事實の歪曲、或ひは、一方的行實の不當な擴大などは、眞の傳記とは認め得ない。

翁の傳記には斯樣な夾雜物が淨化されて、ありしがまゝの姿を再生させて居る點に、非凡人としてのみ觀

過誤を訂正されたもの多く、用つて遺憾なく傳記作者の重大な藝術的筆致の躍動は、眞に得難いであらう。





丙子雜錄（九）

紅葉山人の日誌

紅葉山人の日誌が先頃佐々木信綱博士の手に歸したので、博士が補注されたのを中央公論に收められた。それは明治三十四年七日二十九日から翌三十五年一月三十一日までの日誌である。山人の日誌で世の中に刊行されてゐるのは石橋思案の出版した十千萬堂日錄で明治三十四年一月元旦から同年十月十日に及んでゐる。八九十の三ケ月が博士の得られたのと重複してゐるのがどうかと思ふけれども、博士は兩者を比較して見て少しばかりの異同增減があるのみだと云ふて居らるゝが、マサカある月だけ二つて、或る時それはよい習慣だ自分も倣ひたいものだと云ふたことがある。亦或る時君はドンナ風に毎日の事を記すかと問はるが自分が、山人と柳橋の升田屋竝に山谷の八百善に飲食した時の事が委しく書かれてゐたので、自分も一驚を喫したが、全く事實である、今左にその全文を掲げ、如何

ない。段々讀んで行くと、自分の事も二三所に見へてゐる。乃ち八月廿五日に此日市嶋氏新潟近江家にて喀血臥蓐の報ありと記し、十月五日に（前略）出るに臨み（外出）市嶋氏の門生書畫帖及色紙二枚を兩三日前に持來りしを早速揮灑して送らんと云ふ、氏は病を養ひて鎌倉三橋に在りとぞ、則ち樓に延きて直ちに揮毫せしが極めて拙也とあるが、自分は此病の爲め山人と會することも少なかつたので自分に交渉ある記事が甚だ少ない。自分の病臥に就て山人が新潟に在る自分に寄せた見舞狀は幸ひに保存してあるので、取り出して見ると、如何にも長文で、墨刷り罫紙に

るに平生過飲の致す所なるべく後來一層の御自愛を祈り候

唯今手元に何も無之候へども座右を搜し何ぞ入御覽可申一兩日中に取纏め差出し可申候、實は此方も去る五日より膀胱炎の爲に打僵れ候て、十日間ばかり身動きさへならざる劇痛に惱され此四五日來漸やくかやうに筆持つ事も相叶ひ候やうの始末にて來月半頃迄は門外に出候事不相叶時恰かも新聞の懸賞俳句有之候て內憂外患の苦む所と相成難澁を極め居候

尊臺の御症も追日輕快の趣を承り頗る安心いたし候へども決して御油斷はなさる

複原製

ため、日記の一節とおぼしきは左の如きものである。

四月二十一日市島春城坂口五峰二子と柳橋舛田屋に飲む（料理は生稻）

時に墨堤の一重老いて雪の如く落つ

椀（大椀）蕨。松露。ムシリ蝦。島の團子。

魚軒　鯛

小鮎の鹽燒。萌蕁。

天ぷら（箱重）車蝦。烏賊カキアゲ。

香の物（細根。獨活。糸菜）

妓　小萬。金八。

更に春城子と花を賞して山谷八百善に晩食す

味噌吸（蕨）

鉢　赤貝　白和へ　木耳　モヤシ　根菜　ツマ萌し蓼

魚軒　タヒラ貝の柱、鯛、鰆？　右三色（海雲　防風（モヤシ）ワサビ）

替椀　小鯛の大切　莢豌豆　口木ノ芽

や又その當時の文人生活の一面を知るのに面白い材料だと思つて敢へてこゝに錄した。

いつか之れを石橋思案氏に示したところ、之れはほんものだ、面白いから僕の印も捺してあげようと下一枚の諸氏の印の中へ「思案外史」一顆を加へてくれた。

佐々木博士が發表された山人の日誌にはいろ〳〵錄したいこともあるが、自分は山人のことをしば〳〵隨筆に收めあらましは書いても居るからすべて割愛するが、唯だ一事抄錄したいことは露國の中尉が山人の書齋を訪れた時の日誌である。その中尉と云ふは要塞の砲兵中尉でビイソオキフと云ふ文學に理解のあるもので、其人が山人を訪れた記が後に露國の雜誌に載せられて、其譯文は自分の隨筆中紅葉山人を憶ふ記に轉載して置いたが、其の訪問は九月十八日であつて、山人は日誌に左の如く書いてゐる。

して室を淸うし、床に蝦夷菊を挿し葡萄など買ひ置く、午後瀨沼氏同道にて來訪、五字位まで文學談あり、扇子一握外に「多情多恨」小天地（肖像入）「氷面鏡」等を送りしに大滿足にて歸る

とあり、こゝに「氷面鏡」とあるは山人が三越呉服店の爲めに編した衣裳の見本帖である。又山人が二階の書齋を特に掃除し、花まで活けて待つた歡待振は山人には破格の事であるが、露の士官が日本文豪の貧弱なる居を見て驚ろいたと云ふ記文と參考すると、自分と雖も日本文人の不遇に一脈の哀れを禁じ得ないのである。

東京より

額の寄附金を支出せられたことは、私のとりわけ感謝にたへざるところで衷心謝意を表する次第である。

立つたのは一道六縣の中央圖書館が藏書の相互貸借を實施することとなつたのと、東北振興と圖書館事業との密接な關係から文

丙子夜錄（九）

紅葉山人の日誌

紅葉山人の日誌が先頃佐々木信綱博士の手に歸したので、博士が補注されたのを中央公論に收められた。それは明治三十四年七日二十九日から翌三十五年一月三十一日までの日誌である。山人の日誌で世の中に刊行されてゐるのは石橋思案の出版した十千萬堂日錄で明治三十四年一月元旦から同年十月十日に及んでゐる。八九十の三ケ月が博士の得られたのと重複してゐるのがどうかと思ふけれども、博士は兩者を比較して見て少しばかりの異同增減があるのみだと云ふて居らるゝが、マサカある月だけ二部ある筈もないがどうしたことか自分も疑ひなきを得ないが、それは兎も角二者併せると一年程の日誌が連續した譯である。

私は山人の日誌や手簡を讀むと其人と對する如き懷しさを感ずるので、今度も早速讀んで見た、例に依り珠玉を連ねた文章で毎日の起居が書き記され一日も脫した所がない。段々讀んで行くと、自分の事も二三所に見へてゐる。乃ち八月廿五日に此日市嶋氏新潟近江家にて喀血臥蓐の報ありと記し、十月五日に（前略）出るに臨み（外出）市嶋氏の門生書畫帖及色紙二枚を兩三日前に持來りしを早速揮灑して送らんと云ふ、氏は病を養ひて鎌倉三橋に在りとぞ、則ち樓に延きて直ちに揮毫せしが極めて拙也とあるが、自分は此病の爲め山人と會することも少なかつたので自分に交渉ある記事が甚だ少ない。自分の病臥に就て山人が新潟に在る自分に寄せた見舞狀は幸ひに保存してあるので、取り出して見ると、如何にも長文で、懇到の意が悉されてゐる、即ち左に全文を收める。

久しく音容に不接候へども不相變の御元氣にて共進會御見物の事と存居候處本日の御書面にて夢ならずやと驚入申候別して旅中の御不慮いかばかり心細く在すやらんと察し申候へば胸もつふるゝやうに覺え候此上は御養生肝要に御座候要するに平生過飲の致す所なるべく後來一層の御自愛を祈り候

唯今手元に何も無之候へども座右を搜し何ぞ入御覽可申一兩日中に取纒め差出し可申候、實は此方も去る五日より膀胱炎の爲に打僵れ候て、十日間ばかり身動きさへならざる劇痛に惱され此四五日來漸やくかやうに筆持つ事も相叶ひ候やうの始末にて來月半頃迄は門外に出候事不相叶時恰かも新聞の懸賞俳句有之候て內憂外患の苦む所と相成難澁を極め居候

尊臺の御症も追日輕快の趣を承り頗る安心いたし候へども決して御油斷はなさるまじく輕はづみの事あらざらんやうくれ〳〵も御注意が大事に御座候枕上の御無聊御察し申上候何かこま〴〵書記し度候へども此方とても餘り長く坐り居候事叶はざる體に候へば用事のみ記し申候御狀披見の際千葉鑛藏氏見舞に見えられ御話致候處是亦不料驚き居られ候病に不慮ならざる事とてはなけれど尊臺の此處のご

養性生

のである。

四月二十一日市島春城坂口五峰二子と柳橋舛田屋に飲む（料理は生稻）

時に墨堤の一重老いて雪の如く落つ

椀（大椀）蕨。松露。ムシリ蝦。鳥の團子。

魚軒　鯛

小鮎の鹽燒。萌蕁。

天ぷら（箱重）車蝦。烏賊カキアゲ。

香の物（細根。獨活。糸菜）

妓　小萬。金八。

更に春城子と花を賞して山谷八百善に晩食す

味噌吸（蕨）

鉢　赤貝　白和へ　木耳　モヤシ　根菜

ツマ萌し蓼

魚軒　タヒラ貝の柱、鯛、鰆？　右三色

（海雲　防風（モヤシ）ワサビ）

替椀　小鯛の大切　莢豌豆　口木ノ芽

額の寄附金を支出せられたことは、私のとりわけ感謝にたへざるところで衷心謝意を表する次第である。

東京より

に面白い材料だと思つて敢へてこゝに錄した。

いつか之れを石橋思案氏に示したところ、之れはほんものだ、面白いから僕の印も捺してあげようと下一枚の諸氏の印の中へ「思案外史」一顆を加へてくれた。

佐々木博士が發表された山人の日誌にはいろ／＼錄したいこともあるが、自分は山人のことをしば／＼隨筆に收めあらましは書いても居るからすべて割愛するが、唯だ一事抄錄したいことは露國の中尉が山人の書齋を訪れた時の日誌である。その中尉と云ふは要塞の砲兵中尉でビイソオキフと云ふ文學に理解のあるもので、其人が山人を訪れた記が後に露國の雜誌に載せられて、其譯文は自分の隨筆中紅葉山人を憶ふ記に轉載して置いたが、其の訪問は九月十八日であつて、山人は日誌に左の如く書いてゐる。

五字位まで文學談あり、扇子一握外に「多情多恨」小天地（肖像入）「氷面鏡」等を送りしに大滿足にて歸る

とあり、こゝに「氷面鏡」とあるは山人が三越吳服店の爲めに編した衣裳の見本帖である。又山人が二階の書齋を特に掃除し、花まで活けて待つた歡待振は山人には破格の事であるが、露の士官が日本文豪の貧弱なる居を見て驚ろいたと云ふ記文と參考すると、自分と雖も日本文人の不遇に一脈の哀れを禁じ得ないのである。

など買ひ置く、午後瀨沼氏同道にて來訪、

立つたのは一道六縣の中央圖書館が藏書の相互貸借を實施することとなつたのと、東北振興と圖書館事業との密接な關係から文

丙子雜錄

（九）

紅葉山人の日誌

紅葉山人の日誌が先頃佐々木信綱博士の手に歸したので、博士が補注されたのを中央公論に收められた。それは明治三十四年七日二十九日から翌三十五年一月三十一日までの日誌である。山人の日誌で世の中に刊行されてゐるのは石橋思案の出版した十千萬堂日錄で明治三十四年一月元旦から同年十月十日に及んでゐる。八九十の三ケ月が博士の得られたのと重複してゐるのがどうかと思ふけれども、博士は兩者を比較して見て少しばかりの異同增減があるのみだと云ふて居らるゝが、マサカある月だけ二ない。段々讀んで行くと、自分の事も二三所に見へてゐる。乃ち八月廿五日に此日市嶋氏新潟近江家にて喀血臥蓐の報ありと記し、十月五日に（前略）出るに臨み（外出）市嶋氏の門生書畫帖及色紙二枚を兩三日前に持來りしを早速揮灑して送らんと云ふ、氏は病を養ひて鎌倉三橋に在りとぞ、則ち樓に延きて直ちに揮毫せしが極めて拙也とあるが、自分は此病の爲め山人と會することも少なかつたので自分に交渉ある記事が甚だ少ない。自分の病臥に就て山人が新潟に在る自分に寄せた見舞狀は幸ひに保存してあるので、取り出して見ると、如何にも長文で、懇劄の意が悉されてゐる、即ち

ると何人と雖も驚愕可致高田氏にも暫く御目に掛り不申坂口氏無事に被居候や越智氏日々出精被致候か新潟の雜閙非常の

つて、或る時それはよい習慣だ自分も倣ひたいものだと云ふたことがある。亦或る時君はドンナ風に毎日の事を記すかと問はるに平生過飲の致す所なるべく後來一層の御自愛を祈り候

唯今手元に何も無之候へども座右を搜し何ぞ入御覽可申一兩日中に取纏め差出し可申候、實は此方も去る五日より膀胱炎の爲に打僵れ候て、十日間ばかり身動きさへならざる劇痛に惱され此四五日來漸やくかやうに筆持つ事も相叶ひ候やうの始末にて來月半頃迄は門外に出候事不相叶時恰かも新聞の懸賞俳句有之候て內憂外患の苦む所と相成難澁を極め居候

尊臺の御症も追日輕快の趣を承り頗る安心いたし候へども決して御油斷はなさるるが自分が、山人と柳橋の升田屋竝に山谷の八百善に飲食した時の事が委しく書かれてゐたので、自分も一驚を喫したが、全く事實である、今左にその全文を掲げ、如何

又、日記の一節とおぼしきものである。

四月二十一日市島春城坂口五峰二子と柳橋舛田屋に飲む（料理は生稻）

時に墨堤の一重老いて雪の如く落つ

椀（大椀）蕨。松露。ムシリ蝦。島の團子。

魚軒　鯛

小鮎の鹽燒。萌蕚。

天ぷら（箱重）車蝦。烏賊カキアゲ。

香の物（細根。獨活。糸菜）

妓　小萬。金八。

更に春城子と花を賞して山谷八百善に晩食す

味噌吸（蕨）

鉢　赤貝　白和へ　木耳　モヤシ　根菜　ツマ萌し蓼

魚軒　タヒラ貝の柱、鯛、鰆？　右三色（海雲　防風（モヤシ）ワサビ）

替椀　小鯛の大切　莢豌豆　口木ノ芽

口取　蒲鉾二片　蕗甘露煮（長二寸）車蝦（立二ツキリ）四片　銀糸昆布

小鮎　魚田

香物　大根、瓜、西瓜（いづれも粕漬）

紅葉といふ人の老成ぶつた、丹念な性格や又その當時の文人生活の一面を知るのに面白い材料だと思つて敢へてこゝに錄した。

いつか之れを石橋思案氏に示したところ、之れはほんものだ、面白いから僕の印も捺してあげようと下一枚の諸氏の印の中へ「思案外史」一顆を加へてくれた。

佐々木博士が發表された山人の日誌にはいろ／＼錄したいこともあるが、自分は山人のことをしば／＼隨筆に收めあらましは書いても居るからすべて割愛するが、唯だ一事抄錄したいことは露國の中尉が山人の書齋を訪れた時の日誌である。その中尉と云ふは要塞の砲兵中尉でビイソオキフと云ふ文學に理解のあるもので、其人が山人を訪れた記が後に露國の雜誌に載せられて、其譯文は自分の隨筆中紅葉山人を憶ふ記に轉載して置いたが、其の訪問は九月十八日であつて、山人は日誌に左の如く書いてゐる。

午前夏葉より來狀にて、露國要塞砲兵中尉ビイソオキフ氏切に面會を乞ふ旨を告ぐ、乃ち午前（午後の誤か）二三時頃來れの返電す、故に午前二階の大掃除を作して室を清うし、床に蝦夷菊を挿し葡萄など買ひ置く、午後瀨沼氏同道にて來訪、五字位まで文學談あり、扇子一握外に「多情多恨」小天地（肖像入）「氷面鏡」等を送りしに大滿足にて歸る

とあり、こゝに「氷面鏡」とあるは山人が三越呉服店の爲めに編した衣裳の見本帖である。又山人が二階の書齋を特に掃除し、花まで活けて待つた歡待振は山人には破格の事であるが、露の士官が日本文豪の貧弱なる居を見て驚ろいたと云ふ記文と參考すると、自分と雖も日本文人の不遇に一脈の哀れを禁じ得ないのである。

とき何人と雖も驚愕可致高田氏にも暫く御目に掛り不申坂口氏無事に被居候や越智氏日々出精被致候か新潟の雑閙非常の事と察候へばお祭最中の御臥病御薬問も一層の事と存候時候不順に候へば御大切に被成度一日も早く中華亭にて祝盃を擧げ候を待居候草々頓首

二十四日　　紅葉

春城先生梧下

此の手紙の日附で見ると、山人の發信は日誌に私の病を錄した前日と見へる。尙ほ忘れてゐたが自分の歸縣したのは新潟に共進會が開かれたのを見物の爲めであつたことが分る、書信中にある坂口氏は坂口五峰越智とあるは越智修吉で、共に山人別懇の間柄で越智は元と讀賣の社員で其後新潟新聞の主筆であつた、尙ほ手紙の終尾に中華亭とあるがこれは木原店に於ける有名な割烹店でよく連れ立つて同飲の處である。尙ほ漏らす可らざるは山人自身も輕からぬ病氣に罹つてゐたことが此狀にも知れ、又日誌にも續出してゐる。

山人が一年續けて日誌を書いたに就て自分の思ひ出を云へば、山人は嘗て自分が二十年も繼續して日誌を認めてゐることを知つて、或る時それはよい習慣だ自分も倣ひたいものだと云ふたことがある。亦或る時君はドンナ風に毎日の事を記すかと問はれたから、日誌を記す要訣は只だ簡單に其日の起居の大略を書くに止むべきだ。感想などを書くは禁物で、長文になると決して長く續かないと云ふた。コンナ問答はいつであつたか忘れたが、山人は或は其頃から日誌を書き始めたのであるまいか、山人の日誌が要を得て兎に角一年繼續したのも或は私の經驗に從つたのかも知れない。唯だ山人の日誌に異とするのは、毎日の梗概を書くのに飲食の事を決して略してゐない。どんなに食物に深い關心があつたのであらうが、人に招かれて饗應の獻立を記したり割烹店で會心の料理を喫した時の事などを錄するのは、山人の如き食通に不思儀はないが、家庭に於ける飲食まで毎日多少の記のあるのは山人の日誌の特色とも見るべきである。山人と連れ立つて料理店へ出かけると、いつも手帖を出して細かに獻立を書き留める習慣があつた。偶々七月號の「書物展望」を見ると首藤鐘一と云ふ人が山人の日誌の零篇を有して居ると云ふて、其の寫しが掲げてあつた。その中には俳句もあるが自分が、山人と柳橋の升田屋竝に山谷の八百善に飲食した時の事が委しく書かれてゐたので、自分も一驚を喫したが、全く事實である、今左にその全文を掲げ、如何に山人が飲食に細心であつたかの一端を示す。

先頃、私は押入れを掃除して小さな軸を見出した。それは紅葉山人の日記帳らしい、罫紙三枚を縱に並べて表裝したものだ。上の一枚には俳句、中の一枚には或る春の一日、友人と花を見ながら飲んだ日記の一節、下の一枚には、「紅葉」「十千萬堂」「風葉」「秋聲」「春石」「桂舟」などの黒印をベタ〳〵捺してある。

俳句は左の如きものである。

田　家

栞の花の黄なり戸の隙壁の隙

東山遊歩

花を見て立てば盃さされけり

春の間にやう〳〵逢ひぬ藤の花

あすの用蚊帳の傍まで呼ばれけり

咲きおほせ咲かせおほせし牡丹かな

見る花は過ぎぬ聞かうぞほととぎす

夕　風　や　螢　を　ふ　る　ふ　川　柳

一口は夢のやうなる清水かな

又、日記の一節とおぼしきは左の如きものである。

[illegible]

や又その當時の文人生活の一面を知るのに面白い材料だと思つて敢へてこゝに錄した。

して室を清うし、床に蝦夷菊を挿し葡萄など買ひ置く、午後瀬沼氏同道にて來訪、

○なほ〳〵山陽の銘宝を寄せ来ることなど其の煩さと
厚物の多いのとで閉口させらるゝが、名古屋から
十帖程のを勧めて来た永井助教と云ふ校友人の伝を
伝ふと云ふことなど、余の郷里を訪ねた為出来た
其の数幅の画一帖を見た。こんな教者が京
都へ出た時、山陽の交りあるまゝの文人を方かたれ
紀念帖に花月十句帖と似たものであるが、十句帖は細長
い帖であるが、こんの大版の日本紙に出来た本である
南時の名家即ち三宅の助の大家の漢詩、宿羅
さん、春好自分も詩歌を或所へ書き、山陽は数ヶ
所と詩を書き、お例の菊園翁も絵を描き、絵の伝
歌まで書き、春好と四人の京の人へ入つた掛紙へいろ〳〵

歌を書き、長崎の勿論画うの木米あり、仏江あり、
雲華あり、春琴あり、海屋あり、十句花月帖は此すべて詩
画にして是帖は雲華と春琴、巻尾に春好
の子の絵あり、絵の中に数枚は山陽の印全部捺してある
勿論厚薄のあるまでもなく、陸奥の名物帖なり、こんを
山陽と日々見る間に稀なる見物なるを真に眼福也
つた（十月十一日記）
○十月三日の山陽墓を中心とする故年間の話々相も
放是でんと日論見自分は是墓の思出を放是せよ
と嵯さん此の自分も話し出す初期頃の
此のことのまゝ忘んとあるもの所の楽所の次倫
年中と就て聴く勿論此佐果い古の歴史ひ

時の首相は山縣有朋で、叡洲院は初期議会の中堅住のひとつだった。

[illegible]

[illegible]の一橋家は[illegible]の焼失したことがある。

[illegible]の一橋家は[illegible]の華族令制、叡洲院は[illegible]

寮址の[illegible]制度は宮中の豊明殿で行われた。

[illegible]を聞き得たことを三條木戸大久保の墓前に報告された。

[illegible]の[illegible]は[illegible]人[illegible]納税の資格を[illegible]

住の資格が[illegible]

各府県で第一の人を後補[illegible]いとして輸入

標原製

[illegible]補が多かった。

長住資格は[illegible]五[illegible]生[illegible]、[illegible]補[illegible]

[illegible]大石正巳[illegible]

行政の媒酌で伊勢の沖尾の[illegible]

輸入[illegible]補の一例として[illegible]名古屋から小[illegible]

家の[illegible]を迎へて[illegible]

[illegible]

北海の選挙人は少数であつた。十五年の調べによると[illegible]

と[illegible]選挙人は[illegible]

(もと名の候補が立つた。[illegible]二[illegible]二十七名[illegible]

第二期[illegible]早く[illegible]義[illegible]

正義[illegible]の[illegible]選[illegible]

[illegible]

驚きたるのみ
全力を投じて奮闘すべきことは後日のことにて此次の職務に
つれ所謂る壯士なるものは（其実）日々ありし。分題政府党と名乗るもの
党派はまた何程であつたか。政府の味方するものあれば、これを政党
とい吏党とこれを稱し
自分も郷里で郡長に推挙せられ候補者
つれしとかなく其人へ吏党であるとかが自分の友
人共は、皆と共に三つの名折れとこれを
云はれしとかなく宣布を忘れからだ。
政府が政府党を但倒して党を一種
を立てもせるかのようなるが、そうでなく唱えるのを

擁護したから是者干渉いやすく初まりた。
御今の僅こそ二才にそなかるかれ解散を実
験した。
△第二期の活動　第一の期の切迫の状況自由改正
西郷隆盛大隈板垣●其他党員の幹部の是等
取別意及ことのみ載別所くに吸さるこのこと
成あつたの。えの強くて干渉だ。
第二回活動　●第の結果政府当局は僅こそ三十七名
と云う数の当選者で中立らしいものが多く
多数であつた政府党の勢の振いうるものは
大隈伯爵伯爵の響であつたのだ
当時の選挙場は多く金と時き散すこと

無つ時男女ともでい中央から候補を迎へることがあつたり、選挙費も概ね地方有志で辨じた。當時も酒会を以つて選挙人を誘ふことを禁じた。併し懇親会で今夫と所謂選挙人と一緒さうすることは禁じ、・・・

北から、皆り横ちへこちらの方が議会の全く真剣
であつた、国士型の人物も多く出で、八百円の寄附
などを眼中に置かずやうやうケチケチ人物の多く
とうとう、皆な涙を流した。墨絵の為めに有名の人を泥
童子有りしに、墨絵は流しれのハ
宮殿、政府が干渉の日影絵音でもつて非の
皇子の政府とあつて、政分の振舞とは二重
から後の議会は、既に純粋で、国的
あつたと言ひ得る。

○今朝が義仁亭屋、五分の田形、勝基氏不義の新家の
屏風の字を持参、北の義者の家に山湯を起居の人
あり国雪一所名乱と弾ずるなり、特に新家一般の

東京の感情

街上の猟人？

「蓋然性」といふ單語を鋪道へころがしたやうな商賣だ。砲台の如き寫眞機を構へて「鴨」や來ると待つ。ピント・グラスの上を朦朧と近づいて來るものがハツキリ「鴨」の姿を現した瞬間にシヤツターを切つて渡す。フイルム・ナムバーの入つた申込み用紙を渡す。一枚送ると引替へにあの日あの時のお姿をといふわけだ。シヤツターを切るトタンに「鴨」にツンとそつぽを向かれるときの胸騒の悪さ、獣人が猪を射ち損ねた比でないさうな、もつともである

日銀世話をあるとと、金上字を墨を振くの
ちしてある自分を写しかが、自分が其前をうくる時
一枚のカードを交ぜ（其の別紙の如き）まのびある
が、あ也遠来工夫さん九宮倫の一法と思ひ、こゝ世
れの一
端と
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
す
十月十
五日

No. 464828

註文書　2¼吋×3吋寫眞一組（三枚）
右註文致候代金壹圓也寫眞引換ニ支拂可申候也
昭和　年　月　日
御住所
御姓名
日本ムーヴィ寫眞社中御

No. 464828

◆唯今お寫眞が撮れました◆
あなたの動いた御姿が
極めてはつきりと
寫眞を御覧下さい

◆御希望の方は
◆希望の方は
◆御註文は
◆お客はお客りにならやう
◆この手紙は
◆御註文は
◆御註文は

日本ムーヴィ寫眞社
東京市麻布区三河台町
電話麻布(56)

○此の間日間、雑誌と著述することを廣くしたが、此間に何をしたかとあるまゝに、多くの隠遁者の為と俗めたが一二雑誌に載せて貰ひたいと大坂毎日のホーム、ライフ、又は淺草ムレトブンの座するやうに、移動者」と云ふ一篇を書き、次の如きの「日暮きの堀端」の意味の通ずる輯文の「枕流を家のセ、淳本其一の俗きの通ずる輯文を寄せて住まるきるい。富記に載せんとの通隠文を寄せたのが十月十五日自山房の五十年の祝典を祝ふ為に、前夜社長代理として出る用を申送て来た。祝宴の日に富代表として出る用を申送て来た。祝宴の日に富「五十年」と云ふ表文の「紀念本を配つたが此間自分の通隠文が二〇番と嵩の今昔」と云ふ二十

榛原製

頁の長篇が出ぬ内に、自分の通隠文を中心に、明治の文化を新大家を祝ふことを考へたが、自分の初期の作品を選挙を設定したが、人も多くは賛成せず、自分も是れを「とうふのび」の終の引受けたが、又は明治を通じて、あるのに、聊か腹稿を表したのである。幸四郎の歌舞伎の歌舞伎を共にせんと義成を失はれたので十一月十日を以て後立式を奉げ祝宴を開くのに、式と称待状が来た。多分元祝会であらう、為め相応に出席した。こんの表人が臨席ことゝなる。家兄家族を連れ、つき老を養養者と方と相談した

生きた明治文化史

先驅者が尊い體驗を披瀝

〔後八・〇〇〕 AK第二放送の試み

明治文化の再檢討が叫ばれて居る折柄、第二放送國民講座に「生きた明治文化史」の項目が新に設けられました、今晩明治思想界を語る文學博士井上哲次郎氏(ゴ)を筆頭として直接明治文化の各部門の經驗に濡つた方々が、明治節の嘉辰を中心に、左記の通り約廿日間に亘つてその尊い體驗を披瀝することになりました

十九日「宗教」小崎弘道(ゴ)
廿一日「政治」市島謙吉(モ)
廿三日「外交」秋月左都夫(モ)
廿六日「法律」法博田部芳(モ)
廿八日「經濟」未定
十一月二日「教育」文博大瀬甚太郎(モ)
四日(BK)「文學」菊池寛(ゴ)
六日(BK)「演劇」高安吸江(ゴ)
九日「美術」中村不折(モ)
十一日「音樂」鈴木米次郎(ゴ)
十三日「科學」未定
十六日「科學」理博田中館愛橘(ゴ)
十八日「ジャーナリズム」頭本元貞(モ)
廿日「風俗」石井研堂(モ)
廿五日(BK)「風俗」中村塘花郎(ゴ)

榛原製

儀但先ときの掛念せしめ、始終海内の
出版新聞紙に掲載せらるべき歴史金の内五千円を銀行
に預ける北海の事に付ある、他の楚囚小説成る（十月廿
日記）

○去廿五日の金の放さ）は本年三回目にて、諸方面政況
の政情、并に選挙を論ずるとの注文、こゝにおちく来り
たれば、実の政況に表る自人事の無理なる注
文に対つたが、南の方の注文に答へ答へ人々があつたれ
ども、仲間の出さるは、誠あるも出さず、却つて調子
よく彩も御したる成りたりと云へば、大分放さる
ばかりにて、今回の思ひ存分談じて時間を過ごす
無つた、偶と政界往来、旅行と略書との事務を

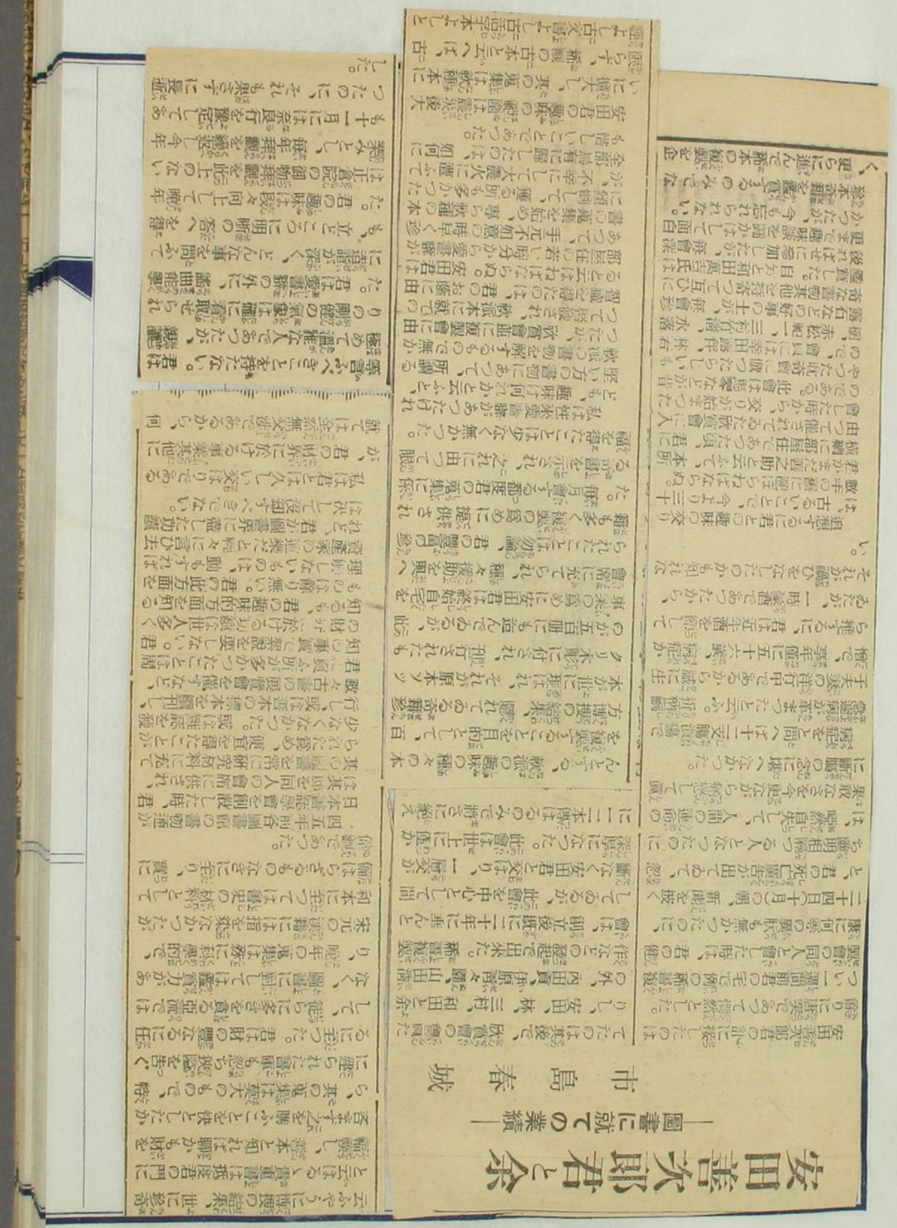
榛原製

話ひまりなりつき、放さの依頼を敷衍した者
きまつた。験所祝の四時門を祝める筆ひ
ここに略する。

○今朝（十月廿四日）の新聞紙に出田義次郎の訃と
報じたるの一数なるを喫した。出田氏は
去十三日にて、年齢の病らしいこともなく
元気であつたが、俄に十六日から十二支腸潰
瘍を病み、一面の前名と疾か革つたとの
行き五十六歳、実に惜しいことをした。追懐すること交
りは長いことである。まだ善き地を名乗つた新聞
往時代から往来した、妙味を談する欲貴今を悔ある
め事柔の書、えぬ（庭中）につれこと多く、大

震災後居を今の地に移してから、別して姉さと訪ふを毎
時共の響応と愛は、稀出複雑の御涙をしたことが
実人と二十年の長きを亘つたいつも近緯の弥書を示さ
れたのに眼福を得、自分の老後の楽みとしていつも、か、
まことにうく出席したりき、北人を失ひしことの真の残念
じ為る。母の親子夫婦の洋の中ひ、其の内相を待つ
て葬儀を営むとふが、人間の運命ならば致し方無いよ
ねと今更ながらうう感じ入る

十月廿四日記



自分は友人を持たぬでもないが、同趣味の友人は甚だ少ない。殊に安田君の如く、自分と同趣味であるのみならず、自分の及びもつかぬ趣味の寶庫を開放して、自分に眼福を與へ、自分の心田を開拓してくれた友人は、君の外にないのに、其人を失つた自分の淋しさは何んとも言ひ難いものがある。併し君を失つた悲哀は實い範圍に於て自分に百倍するものがあるであらう。眞に國家の大損失である。(完)

○十月三日家子共と共に久しく日を去らず北能筆下の筆の如き北十數の國河を執ることが出來たので、ここに其の大要を記す

一 藤軒錄 昭和の初の漸やく迫り、一世の去る七月迫り昭和と迄る、あとの殘るの閑月日、

榛原製

一十一月廿四日紅葉館に於ける長崎の陸奥の社を南番舞事松平敬壽伯の屋敷を金と京四の舞踊あり 祝壽伯自身の祝や其他の舞踊あり 祝壽伯

一十一月七日 今流事業の設立式に招かれ南の南天の為め露天の式に臨む 出でて開廣をやむ

一 平大出御 創立五十年紀念として金五百圓 寄附する

一 昨日の角谷家の長女と結婚する長の忙殺 十一月四日石塚三郎を訪ふ

者に納税の式をとる、矢吹男爵夫婦
を嚆矢とし、十五日角谷家と族葬
とす、其親族七家、交詢家族六人、
親族代表と紙を郵送す、新聞の為
め表情況を報ぜんとの申込あり、
紋附庭具式を携入、葬式兼と昂
奮を余儀なくせるの修羅を加ふ、こん葬の為
日日紀殺十五日四軒計り、根持状を
寄せ式場を兼ね家人を始め諸の特義
新を定む、
一 十三十四両日の浅草の倶楽部に稀世種類
今主催として安田義孝氏の特別会を

横原制

催す、安田義孝氏は数多の人を傷
ける人の小集を催す、
一 義孝中洋装本書等と溢れ意現に窮し
こ万三十円の遺産を残し死亡
附す
一 三田朝大郎（三郎）伯爵は美人時代の交人にも
刑法博士也、年四月死去、
一 北十数の刑法中殺伐の需めらるる二三の
実行者所にて寄せ来る新著の内、高級苦
学者の天戸芸術の為皇室刑法の内
天皇と稀世の人を、幽蹟光清の紫琴殺法
白鳥有吾の特色、紀陽紀、京都使刑事

紫の寺山寺の薬師堂、山陽の名刹なり
り余の墨跡を収めて美術長物に富む
なり、

一 臨時式部会議に矢野男爵議を議す 金四十銭
き午前を無き事 十一月十三日

一 北朝間に政府烟草の値上げを行ふ 市内の
西洋烟草一箱一円六十銭のもの一円九十銭と
なる 愛 烟草を喫する人止也」

一 白木屋に開会中の奥物げんの展覧を
見る、陶器数多くあり、多くは木製の家々
数百年以上の古家の基礎と
寄用の煙草用の煙管とあるが

時代の風化のなかく面白い味を出すものと思ふ
此行燈、格子の衛立、手下げ行燈、木製の
アンカ、銭箱、木鉢、絲車、等々なるも
少々なる数なるも、如何に高値のものの泥絵を
目的の為めの為めなるか高値四百五十円とあるは高
高値也

一 忙中閑を盗み来る所を中を宮本
武蔵と自署し居る仲仙金泥の書画
なるも紙と字体の自宅かの時代なるも
武蔵本の自宅かの新し難きもの也
署名も同書にて此署名を検ひ

一　北朝の文治の冷泉一帳を始め、月下の墨蹟（三名）（の筆）を書す、
四條家のものゝ如くある画幅うんぬん（純南画）
又冷月の意、数定しがたし。

一　早大の仏像は今の生ゝ成る仏像今の今
長ゝしこと十数年の久しきを重りれ
るが、漸く老境を物語る今の進度に後し
難きを以つて十六の附録位を中止す。

一　自今八本年一月から十二月迄共同俳かん
一回休んだが日本図書館雑誌の結こ応じ
雨子老も録の挿画を書いたが
此年十二月彫の前幅を完成したのを最

榛原製

後として、本年で新止めとした。

一　毎彫自分が巻頭言を書くのが例となつてゐる今回高原の金石録拓美術史の十二月彫の挿画として「碑庭」と云ふを出すのもれ豊太閤が聚楽の第を築く時石を將り、陸人多くの石碑を找掘したことや支那でも代の天子が前朝の墨碑をへぶして宮殿の材としたことを考へ合せ書く情しあべき神が立ちたことを考へた。

一　「ち年」と云ふ語を使ふんで去る年の自覚と自批」と題する一篇を出すのもれ。一回
人の力が往々一回の夜こそ関し大ゝしたい

天海も関することを言ふて寺の自
教自章を撰め自来自覚が人々を
迷うものきとが、自批が伸い移が自覚い自
恨とうこことどこうあも教育の見識を得
いた。

一　日本橋や九ピン屋の教業で時に骨董を
冷かすことがある、北間も校数に布脳的
武人が市と剣を執って弱立してある間
を眼刻れることが出てゐた。女の眼刻が
鈍うなくなくなく

その奥地や新潟県三分国とろれば風
景区の端書が浮山あるのびやかな新
き百枚ばかりを拝んで、一冊のアルバム
装置して卵海と供することとしたのこん
もたゆの一奥である。

一　十吉庭園の中央別館に故あるぎ
を伴う貴人のお集がなく、安果てし十時
代自動車（伊吉の金）中寺三四お三ん
所迄と通ちこうると、路傍数丁とてなり
寝はしんるる輝衆がなるのびあるろ
いて車寄とやんとも垂飯を得ろう
つたかい今朝（十八日）の新聞紙をえを動

横原製

業体巡察刻
の妻出し
夜と思絶め
ケラを待つ
車中の
ことが
ない

三十圓の夢を追つて

前夜ゆふべ勧銀前から蛭五町

その数何と三千人

【時事社撮影】

金一封の魅力

[illegible]

一　竹花の墓碑を保存する話が出た、安田の義士
は古文書類を併せて優に百篇位に上ると川
瀬一馬氏談。伊東市の淡い安田が郷
居住時代等から劇に関する書物を盛り集
めたが、特に赤穂義士と共に伊東を預けた、と云ふ説は
家康の直接と吐夫と吐夫。
伊東を預けた者は雲状を免れ、伊東は其
の材料も豊の研究をやった。侍士の墓を
瀛ち得ないもの田の底陰の因ともなり得
ようか。

一　北原上伊東からの手紙を受へた。美の島村抱
月と杉井彼麿の情交談で、北原抱月の書い

橋原製

た紙箱が三通出たと云ふ。北の三通は
時を異にしても書かれたもので、美を見ると情交
の漸次深く行く消息が知れるので、最後の
葉書の葉月迄に大体ということを約す、
荒し迄約すんば五千円四千金を出すとあ
つてえんが有り両様いさんもあるが、島村の
書に係ると云ふ心、彼麿の所移のようでも
らうの抱月が別居をしてしまの離別
まで誓い終る後時迄折を約する者が強制
を受けたことが想像されるが、伊東の立場
は変り始めるであろうと思ふ。峰村の為め異
既翼係に理解してやるようにと、

一　醫師の家藝部類に関する秘法を
書き表すことが多くあるが失敗の時多く
報ずる所の話を面白く記して
うせようと来たれば一時事柄の如くも因
の病状に応じて秘法を授けたことがあり因
とその人自風俗を得れば法と大田金右の解
飛行翼美毛純の稿本を得れば法を著記
させた。因者の話後人を面白からしめることの
ないようにいのんあれば開口する

一　医師の家平ける金の施業を保りれ
難肝録と名つけれるのが遠く世に伝失
が出れば今更改めて詳れめうものかも

榛原製

当世流行の出名でもの多く得秘方の諸解
を聴かせんで喫飲した実の疑と云ふこれ
身体の切んの部分も後ろ三つが肝脳此けハ
用立たないとこのので無用の長と覚した
積りであるが人の此者を見て流石好
酒家の施業きびしく豪酒家を難飲家
と云ひ酒ハ肝脳者を醸すこれと自
分い之んを聴へて唖然として笑ひ此業者の
業施業と標榜したるが自分のい家
難施業もあることの程とり此、難の家へば
百川の酒と一緒に吸ひめべきれかい生情此施
業ゆの酒の沢まーがうへと云つた。

又值住秀張酒兵去年百
戰死餘生稍〻難年細新
橋兩旅向好軍歌大平
出愛こゝお年玉

第三圖　草雲法師自炊圖　足利　丸山宗三氏蔵

一乃木大将も右のごき野体の詩あり日時等
不明なれども自炊のこと有り其間を偲ぶ
証之

一四合の下宿の家具等珍〻敢セしめる
ものがあり、鍋のあり火鉢の如き只一個で
あり、方形の火鉢の四方に鍋のやうなものが
あり、之れに自然火鉢を囲んで、夏を暮れ
茶を飲む時に杯を置き茶椀を載せる
台あり之れを使ふことあり、お粥や菜あり
も置く為めなり湯沸し、其鍋なる杯の様
なもの空木で、かんなくずに心を長う且つ
火鉢から外し得るやうにもなるべし、古

天下一品とも云ふべき興味がある。

一

山崎光次郎博士から寄せられた貴重
現代の俳句の終りに附録として金の恋葉春
俳六種から一部が摘録されてゐる。これは
前年博士の父君が京都の三角井戸
吸ふ七月、盃を挙げて時自分が、古い
一盃で、此の盃を挙げた博士の父君の四方山
酒蔵が印刷されて附録とされ
てゐる。それは一飲限二盃銘田庵思也再
新可」とあり酒は二盃を限れとの戒
めであらう。博士の父のおき嘉酒家は不
似合の戒めだと、御本人は思ひ乍ら盃を

標原勲

把ると、善(善)の杯の三倍ほどあるの
で、自分のハアくと云つた。これは大杯
二盃でも不足いうとうとと民間
とふ比べよりでもあるが、私の丈が拡の故
か或は侍士は飲を解せず故か、年老を一寸
比思市が多くあると云て長こんうが、敢て
一杯もらい所を見ると、自分の云ふ民間が
微しきのであるまいかと自笑した。

一

此の日の数茶は丸ビルを訪ねて骨董陳列を
のぞき陶器類二点を指動き終に城ふ
一い唐物物鈕磯印と決付特産うる
より縁さ大田宣徳年制とあんど

こんの飾りアテにする人が体制的作と見る事はくし例の支那流のキメコミの箱を装ひてある、無刻也 他の一八扁平の形酒ろ〻フクラ雀の形を変すくしツスリの溜を見ると瀬戸の製と見し、太二品机上に玩物寿まる可 十一月十九

橋原製

奇觀書の巻

天下第一の國寶寫經

それがナンと本屋の店に

市島春城翁の大物二つ

『さあ、どんな話がおもしろいかな』

春城市島謙吉翁は、こと書籍に關する限りいつでも快く話してくれると聞いて、翁を牛込東五軒町のお宅に訪へば

「成ほど喜壽の」

高齢殊更として書齋に端坐して居たが

早速の記者の所望に應じて靜かに語り始めた。切き孫に昔語りする好々爺といつた感じである。

『二十年ばかり前のことだが池ノ端の本屋で「金剛般若波羅尼經」といふ巻物を發見した。卷末に天平何年とか書いた符號がついて居る。然し天平時代の文字は書體が柔かいのに、この經文の書體は剛くて遒ふのだ。ともかく買求めて歸つた。後でよく見ると本文には年號が書いてないし

「郡といふ字を」

使ふ所へ評といふ字を使つてゐる。奥風なものだとは思つたが、いづくんぞ知らん、これが天下第一のお經だとは考へなかつた。

博物館の人に見せるとこれはただものではない、一寸拜借させてくれといつて持つて行つたが研究の結果これは年號のまだなかつた時分、天平を遡る六十年前白鳳朱鳥の頃のものだらうその證據にはその頃作られた鐘には、郡を評と書いてある、天平のお經でも千年以上も前のもので尊いのに

「それより前の」

ものだから、日本中にあるかないかわからぬくらゐ貴重なものだといふので、京都の故内藤湖南博士に見て貰ふと、氏も確にその通りだ

白鳳の頃出來た大和の長谷寺の佛像の台座に刻つてある字の書體とこのお經の書體が全く同一だし干支も同じだ、恐らく同筆だらうといはれた。

支那から渡來したものではその頃のものが二三あるが、日本の寫經としてはこれが最古のものであるといふので、後年このお經が國寶に指定された。

「またこんな話」

がある。福山の備者太田全齋の著になる「韓非子實論」といふ本は詳しい註釋の點では支那にも誇り得るもので、これを常々手に入れたいと思つてゐた。全齋はこの本を作るのに非常に骨を折つたものだ。いつぞや全齋の家の付近に火事があつた。その時全齋は折角本を書いても一部だけならば燒失したらそれつきりだ、せめて二十部だけ作らうといふので製作に取掛つたが、何しろその時分の木でこしらへた活字で、一部十二册二十部を作らうといふのだから

「並大抵のこと」

ではない。終ひには活字が足りなくなつて、仕方なく自宅で活字までこしらへた。

十四五を一頃にする三人の息子を奮勵してこの仕事に當らせ、病床に臥す妻をいたはりながら全齋が乳飲兒を抱いたり貧乏つたり、それこそ全く泣きの涙でこしらへた本なのだ。

それだけに非常に高價でもあるのだが、これを探しまはつたがなかなかない。それが四五年前黒門町の本屋でゆくりなくもその草稿文が出て來たのだ。誠に立派な文字が書いてある。

「活字本てさへ」

それ程尊いのにその草稿文だ、全齋の自筆ならば二百五十圓だとかいふのだが、それでも決して高くないと思つた。

一見して寫字生藍の書いたものでないことは判るが、さりとて全齋のものだとも斷定出來ない。本屋の主人もはつきりしないといふ。結局判らないまゝに買つて來た。三日間研究した擧句とう〳〵全齋の自筆に相違ないことを發見して大變な喜びであつた。

「昔の人は今と」

違つて、一つの本を著すのにもこれ程の苦勞をしてゐる。全齋はこの本の製本だけに三年を費して居る。著述の期間を入れゝば畢生の仕事であつた。その本の終りにも其苦心が細々と書いてあるのだ。

趣味のたより

大國藤郎作茶の湯寫眞　廿四日まで日本橋三越

隨筆

搖籃時代の議會回顧

市嶋春城

帝國議會の生れたのは四十七年前の明治廿三年である。憂國の士が如何に之を見ることを待望したか、宛ら春を待ち花の咲くを待ち遠しがられたやうな觀があつた。其れも其筈、立憲政治は振古未曾有の事で、我國史の上に輝く大事件であつた。當時の政情を案するに、官民の抗爭が甚しく、それが安全瓣としても議會が必要であり、志士のオアシスとしても之れが必要であり、民衆の氣を吐くのも亦之れが必要の處であつた。

議會は豫期の如く開けて、誠に目出度い慶びであつた。併し呱々の產聲を揚げた計りの議會は搖籃の內にあた。議席に列した選良は勿論議會の操縱に慣れなかつたが、政府者も選良よりも憲政の認識が足らなかつた。これは自分の偏見でなく、今となつては誰れも異論の無い公評である。斯樣の譯で、折角議會が開けても圓滑な政治が行はれず、官民の抗爭は益々甚しく、明治廿七八年日淸の役までの五六年間は、議會は官民抗爭の土俵であつた。

初期の議會に於ける政府の首腦は山縣で、其次が松方、それから伊藤が出た。初期の議會は幸ひに無事に終了し、元勳三條大久保、木戸の墓に特に勅命で第一議會無事終了を報告されたが、第二期議會には早くも解散を見た。そして總選擧には激烈な選擧干涉が行はれ、高知、佐賀、熊本、石川の諸地には流血の慘劇を演じ、某々の地には軍隊の出動があつた。此間に保安條例や豫戒令が布かれ、國士も壯士も玉石同架に放逐され、言論の梗塞の此時より甚しきは無つた。

第三期議會は辛ふじて無事に畢つたが、第五期議會伊藤首相の時に亦解散の不幸を見た。即ち議會の初期より五六期に至るまでは騷擾の議會史で、呱々の聲を擧げたばかりの幼稚なる議會は斯かる物騷裡に育つたのである。

顧つて當時の選擧如何と顧みるに、初期から、意外にも廉正の選擧が行はれた。當時は今日と異つて、普通選擧でなく、選擧人にも被選擧人にも、納稅居住等の資格があつて、選擧人の數も甚だ少なく、廿五年の調べに依ると、京橋區の選擧人は僅かに二百二十數名に過ぎなかつた。

當時はどこの選擧區でも第一流の人物を擧げんと競ひ、輸入候補が多く、名家は諸方から引張り凧で、二三區から擧げられた人もあつた。適當の人物に被選擧資格がなく、他家の養子となつて資格を作つた。大石正巳が尾崎咢堂の媒妁で伊勢古市の油屋の養子となつたなどが其一例である。候補の選定が人物本位であつたから、後年のやうに金力で候補に立つことが出來なかつた。候補に擁立されれば、これは選擧費などを煩はさないのを條件とし、選擧費は有志者が負擔したものである。其頃は投票の賣買が行はれなかつたから、後年の如く巨費を要することもなかつた。隨つて選擧場は淸淨であつた。

政黨は既に存在したが、政府黨の銘を打つたものは無つた。但し中立と云ふ無所屬の內に、暗に政府と脈を通ずるものがあつた。併し民間では役人の古手を候補とすることを恥とし、政府筋に秋波を送るものを吏黨と呼んで擯斥した。

以上の如き選擧區の情勢で生れた議員は、どんなものであつたかと云ふと、長く國事に盡したものが當選したのが勿論であり、當然の結果でもあつた。其他各地に散在の著名の人が多く擧げられた。政府に脈絡を通ずることもあつたが、それは私生兒に齊しいもので、滔々たる議員は多く藩閥の非違を憤慨するものであつたから、民黨の氣勢の議會に橫溢したのは自然の勢であつた。恐らく四十七年間の議會史に於て、尤も國士型の選良を議會に送つたのは初期であつたらう。

此際の議員は歲費八百圓などを眼中に置くものは無く、眞面目に且つ嚴正に身を持して、大概は秘書などを置いて議案を調査せしめたり、相當の邸宅を構へて體面を維持し、然して議員の信用は此時が尤も社會に厚かつた。議會の搖籃期に在つたとは云へ、選擧場の淸淨と、選良の人を得た點から云ふと、搖籃期が模範期であつたとも云ひ得るのである。

國士揃ひの初期議會は壯觀であつたが、政府は到底太刀打が出來ず、衝突の結果解散を二度迄行ふと、初度解散後の總選擧には思ひ切つた干涉を行ひ、保安條例豫戒令でクーデターらしいことをやつたのみならず、投票間際に自由改進黨の首領板垣大隈を始め、兩黨の幹部を裁判所に召喚するごとき妨害までも試み、之れが爲め壯士輩を刺戟して其の跳梁を挑發し、軍隊を以つて鎭壓するごとき不祥事さへ現出し、議會史に汚點を印したもの。即ち滯閥政治家で、神聖の選擧場を汚したものは、決して政黨のみでないことを忘れてはならない。

吾々が遺憾とするのは初期の議會に折角粒撰りの國士が揃つて擧つたのに、此の干涉によつて其大半を振り落したことで、惜むべきことであるとともに、これも亦國民の長く忘れてはならぬことである。

初期より五六期迄の議會は物騷の事が多かつた。建てた計りの議事堂が燒けて、貴族院が華族會館に、衆議院が元の工學寮を開議し、閉院式が宮中の豐明殿に行はれたごとき變態の事もあつた。

壯士が橫暴を極めて議員が其襲擊を受けた例も二三に止まらなかつた。第四議會の時の首相伊藤が不慮の事で、議院の大切の場合に負傷し、臨時に首相を置いたこともあつたが、ここに漏らしてならないことは、第五議會の時の衆議院議長星亨が、院議で懲罰を受け、遂に議院から放逐されたことで、其原因は星の收賄事件で、議會は假藉なく之れを罰したのを見ると、其頃の議會が如何に嚴正であつたかが知れる。

自分などは今になつて思ふのは、議會は搖籃期に於て相當の選良を得、議場並に選擧區の風氣も淸潔であつたのに、政府には選良に對する雅量が無かつたことを遺憾とする。若し政府に相當雅量があつたら、あれほど頻々たる衝突も無かつたであらうにと思はざるを得ない。

山縣、松方など云ふ人々に、立憲的理解があらうとは思はれない、唯だ伊藤こそ憲法の立案者で、斯人こそ理解もあつたであらうに、何故か最も大切な初期、二期に隱れてゐて、やつと

五月放生の会稿に東京の修補を施し改海往
来に収めゆくこの日さんらう、文章のあしき所
を推敲を加へて近うく出版ちんとする類所紅
の迴廊日記を収ちることとしぬ。十一月廿一日記

榛原制

榛原製

以下
／／丁
白紙

櫻原製

北越雪譜を讀みて（其の三）

朝比奈貞一

雪の堆量（前號の續き）

以上に擧げた十餘例について見れば積雪一寸のことを一尺としてゐるとも考へ難い。故に二七頁の「雪の堆量」中の數字については單に大袈裟に言つたものか或は斯の如く雪尺を使用する場合に限つて一寸を一尺といつたものか或は事實二ヶ月餘りの間に積算量十八丈の降雪があつたか何れかであるが、大方の示敎を仰ぎたく思ふ。

本稿に對して藤原博士から御注意を賜つた。それは、毎日の積雪の深さを測り、夫の合計を十八丈とか廿四丈とかいつたのではあるまいかといふことである。此の見方の可否をたしかめる爲次の統計を調べた。

即ち前に記した六日町及び十日町で觀測した積雪日量を夫々新潟測候所及び高田測候所の報告から借用して夫等につき十一月、十二月及び翌年一月の積算量の和を求めて見た。個々の觀測値は紙面の節約の爲再錄しなかつたが、前述三ヶ月分の總和を求めたのが下表である。糎は尺に換算した。

六日町では平均十七丈、十日町では二十丈位となる。大體「雪譜」に出てゐる數字の十八丈或は二十四丈と近い。

本文「……およその日數八十日の間に三尺づゝの雪ならば廿四丈にいたるべし。」は藤原博士の云はれたやうな測り方をして述べた如くにも考へられる。しかし「……雪の下る毎に用意したる所の雪尺を以つて量りしに……」は新雪のみを測つたやうにも考へられる。

高田測候所の泉所長から材料として送つて下さつた小册子「高田の雪」の中に同測候所に於ける甲種積雪量累計（一日五回觀測し降雪の深さを合計し更に之を前年初冬より年末迄の一寒候期間累計したもの）の全部を此上の表に再錄した。

右の累計の半分を假りに「北越

	平均	1928, XI −1929, I	1927, XI −1928, I	1926, XI −1927, I	1925, XI −1926, I	1924, XI −1925, I	1923, XI −1924, I	1922, XI −1923, I
六日町	1707.4 寸	1859.8 寸	1171.0 寸	1808.5 寸	1877.0 寸	1176.0 寸	1269.0 寸	2790.8 寸
十日町	2040.1 寸	1931.1 寸	2137.4 寸	2129.3 寸	2083.5 寸	1283.8 寸	1710.7 寸	3004.8 寸

	10	9	8	7	6	5	4	3	昭和 2	15	14	13	12	大正 11
六日町	496.4	1030.0	1105.8	349.0	565.9	408.4	902.4	890.7	1532.3	430.4	800.5	812.2	694.6	972.0 糎
十日町	16.38	33.99	36.49	11.52	18.67	13.48	29.78	29.39	50.57	14.20	26.42	26.80	22.92	32.08 尺

年	大正 11	12	13	14	15	昭和 2	3	4	5	6	7	8	9	10
尺	16	12	13	13	7	25	15	15	7	9	6	18	17	8

雪譜」に記された期間に對應させて見やう。即ち「雪譜」にある期間を冬の前半季とし、前・後兩半季の降雪累計が等しいものと假定して比較しやうといふのである。高田の累計の半分は（尺の端數四捨五入）上の表の如くで、最高二十五尺、最低六尺平均十三尺となる。今日の高田と昔の妻有とを同じに取扱ふことの可否は別として此の數字と「雪譜」の十八丈或は廿四丈の1/10とを比較すれば積雪累計の單位に一寸のことを一尺として表はしたものとよく合致する。

つまらない詮索を永々としたが佐藤順一氏の筆者に語られた如く「無學の昔の人がよい加減にやつた」事を、餘り一生懸命になつて詮議立てをしても何もならないといふのも一つの見方であらう。

本文投稿後岐阜測候所長淵本一氏より左の如き御知らせを頂いた。

先般上京の時「美濃では積雪八寸を以て一尺とする」といふ事を申上げましたが其後岐阜地方の古老でも亦一般でもこの頭が非常に深いのです。飛驒は未調査ですが美濃國の北部、北西部、西部及中部迄はこの事が相當深刻です。—中略—この八寸を一尺とする考は何時から用ひられたかは未だ判然としませんが土地の人でも若い人はあまり用ひず、老人程この觀念が強いのを見ると少くとも百年以上前から用ひられてゐるのではないかと思ひます。—中略—役所の小使の言によれば岐阜市の南西地方では主として六寸を一尺とする由小供の頃聞いた由です。尚所によつては四寸を以て一尺とする事もあるさうです。一般に南の小雪地方は四寸乃至六寸を以て一尺とし、北の山間及多雪地方では八寸を以て一尺とする樣にも思へますが、之は大變面白いことですから古老の言もよく證して調査をして御知らせします。云々」

即ち此の樣なことは本邦各地にあるものと推察出來る。それ等の詮索は古文書によつて過去の積雪を調査する爲には必要なことではあるまいか。

正誤及び補遺

〔頁〕（通し頁）	〔段〕	〔行〕	〔誤〕	〔正〕
三三八	上	一四	五七頁	五六頁
三三八	中	一	押	挿
三三九	上	七	丘陵」の	丘陵の
三三九			ことも	ことあり
三三九	上	一〇	あり	童蒙
三四〇	下	終より三端蒙終より二には	諳に	諳するならば
三八四	中	四	語	
三八四	上	二	終から五萩	一行空けて中央に○を入れる
三八五	下	終から二と三との間		
三八六	上	終から六版本		
三八七	中	八	ある	版木
三八七	中	二	あるか	ある
三八七	上	表の	換言	換算
	中	初雪に横に「中魚沼郡六日町平年十一月廿日入れる。		

前回三三九頁中段に石油工業の歴史につき明治工業史より引用した事項中、妙法寺村に於て西村某が原油の採集を行つたが、之も如法寺のことではあるまいかと記したが、柏崎の在數里の所に刈羽郡二田村字妙法寺がある。寧ろ此の方ではないかと思はれる。御存じの方は敎へて頂きたい。

北越雪譜を讀みて（其の四）

朝比奈貞一

北越雪譜の初版は天保年間に出版され、後になつて明治初年に復た出版されたことは、岩波文庫の岡田博士の解説に記されてある通りである。（五頁）。併し少數ではあるが、筆者があちらこちらで見た所では大體次の四種の版があつた。

第一種　之は最も古い版のものであると思はれる。その理由は「雪中演場を造圖」（一八二一三頁）の左肩に「雪國に梭欄なし畫者不知してゑがけり」の斷り書が入れてない。又「雪中歩行の用具」の圖の最後の「すかり」を漕ぐ形（一八九頁）の背景に薄墨で雪が畫いてある。（寫眞參照）此の種の版は岡田先生、及び白柳秀湖先生の御所有のものを見た。

第二種　之は右に次いで古いものであらう。第一種にない、「雪國に梭欄なし畫者不知してゑがけり」が、圖の左肩の一部分を切りとつて入れてある。（岩波文庫のは之と同じである。）又第一種と同樣に「すかり」の圖のバックに薄墨の雪が入れてある。私は此の版のものを鈴木卯三郎氏の所で見た。その木は牧之翁から直接子孫に傳へられたものの一つであるから、之は古さに於ては第一種と大差がないであらう。

第三種　第二種と違ふのは「すかり」の圖のバックに雪がない。本書出版當時は色彩入りの書物は國禁になつてゐて、せいぜい墨色の濃淡をかへることだけが許されてゐたのであるが、本書の圖は主に濃淡の二度刷りである。その中で薄墨の方の版木を紛失してしまつたのであるまいか。岩波文庫の圖（一八九版）は之によつてゐる。此の種の版は中央氣象臺備付の圖書の中にあつた。之は何年頃印刷出版されたかよく判らない。

第四種　第三種と似てゐるが一番終りの「阪額野陣之圖」（三一〇頁）が全然缺けてゐる。之は明治初年印刷のものであつて此の圖の版木を失つてしまつたのであらう。私は之を藤原博士のお宅で見せて頂いた。

尙、同博士御所有の明治版は、ロンドンの古本屋で入手されたとかいふお話で、所々にローマ字で日本語の發音が入れてあり且つ英語で意味が記してある。可なり日本語のわかる英國人が讀んだものらしい。

尙又、岡田臺長藏書のものは初編が「上之卷」「中之卷」「下之卷」となつて居り、中央氣象臺のもの及び鈴木卯三郎氏藏のものは「天・地・人」となつて居る。初編第一卷の表紙裏に岡田臺長のものには「江戸書肆文溪堂梓行」とあり、中央氣象臺のものには「東京書肆萬笈閣梓」と刻されて居る。二編の敍の中で、中央氣象臺のものは「雖然彼自爲二李漁。金人瑞之流亞二云々」以下が偶然頁が重複してゐて然かも重複分には「搖鑊樹翁」が「碩學鴻儒」となつてゐる、終りの二重圓の印の下に、別に四角な輪廓の「岩瀨百樹」なる印がある。之等の他に後付の廣告その他にも多少の差異が認められるが昔の本には有りがちのことである。

私が氣がついた、版は右の四種類だけであるが、よく調べたらもつとあるであらう。又特長も右に記しただけではないであらう。唯〻右四種は大體に於て、版木を新しくしたり版を改めたり、といふのではなくて、需要に應じて時々印刷して供給したのであつて、永い間に版木の一部を毀損したり紛失したりしたのであらう。

○

北越雪譜刊行に至るまでの經過が市島謙吉先生によつてその著「隨筆春城六種」（昭和二年八月發行）に記されてゐることと、その內容の一端とを前回（其の二。三八五頁）に記しておいた。同先生の「春城漫筆」（昭和四年十二月發行）一九九頁「訪書餘談」の中にも「馬琴と北越雪譜」（一九九—二二四頁）なる一項目がある。前著には主として山東京山と牧之との交渉に基き、後者には牧之と馬琴、及び小泉其明（牧之の紹介で馬琴が交際する樣になつた人）と馬琴との間の文通を基として、本書出版までの經緯が記されてある。

前著の方に出てゐることは北越雪譜の出版開始に至る迄、及びその後のこと、京山父子の越後訪問の話、等であるが、後の著書に出てゐるのは年代順から云へば、それよりも少し前のことであるが、瀧澤馬琴が北越雪譜出版の計畫をたて乍ら遂にその功の成らなかつた次第が主に記されてゐる。詳しいことは兩著を讀んで頂くことにしてその中の極く概略を、事のついでに以下に記して見やう。

牧之翁が越後の雪國の模樣を記したものを出版しやうと計畫をたてゝ、最初に相談したのは山東京傳であつて、京傳は「北越雪談」といふ題で繪入讀本五册とする豫定であつたが牧之が考へる程出版といふことが容易でなく中々埒が明かないので、馬琴に賴まうとして手紙を出したが馬琴は遠慮して斷つた。繪は玉山及び鈴木美蓉に賴む積りであつた。その中に京傳が死んだので、文筆もかなりに立つ玉山に文畫共に賴まうと馬琴に相談したが、そかうするうちに玉山も美蓉も死去したので改めて馬琴に出版の世話を依賴し、馬琴も之を承引して手紙の往復により色々と打ち合せを行ひ材料を蒐輯し又畫家は渡邊華山にしやうか北齋にしやうか、或は大勢に分擔させやうか等と、案を練つてゐた。馬琴は之を自分の名の著書にして牧之は單に考訂者とする積りであつたので一度自ら越後に出かけて實地を見てからでなければ出版出來ないといふ考であつたが、多忙な身の越後行は中々に實現出來なかつた。書名に就いても種々思ひを凝らし、「北越雪中圖繪」、「北越雪話」、旣に北越奇談といふ本が出たから北越の二字

を入れるのは人まねをするやうで殘念だといふので「越後國雪中奇觀」等々、を文政五年馬琴から牧之へ宛てた手紙の中に見出す。その後間もなく「北越雪譜」の名が定まつた。文政末年馬琴から小泉其明に宛てた手紙には「越後雪譜」の文字も見える。

此の樣に馬琴との交渉が度重なつたが彼の手では容易に實現しさうにもなかつた。そこへ文政十二年、京山から亡兄京傳へ牧之が依頼した出版をやらしてくれといふ手紙が來た。牧之は馬琴への義理立てから一度斷つたが京山の再度のすすめで應ずる積りになつた。

註　「隨筆春城六種」には右の樣に記してあるが(同書二八〇頁―二八六頁)同じ市島先生の「春城漫筆」には本書の出版を牧之が馬琴に頼んだが中々出版の運びに至らず、牧之も少し燒け氣味になつて山東京山に托することとなつた。京山は他人の仕事を横取りする樣であるからとて引き受けるのを躊躇した。京山と馬琴との間はあまり圓滿でなかつたのでやかましやの馬琴からどの樣な難題を持ち込まれるかも知れないと、京山は思案してゐたが、何年を經ても馬琴が手を下さないので京山も遂に牧之の懇請を斷りかねて擔當に應じた。(同書一九九頁―二〇〇頁)と記されてゐて出版のことを頼んだのは牧之か京山かといふ點で兩著書に少し矛盾した所があるやうに思はれた。そこで些細な事乍ら市島先生に手紙で何つて見たが、頼んだか頼まれたかの機微は後人が何れとも判斷する外無く、同先生の材料とされた往復の手紙の中にもずいぶん矛盾した節もあるとかいふお返事であつた。

京山と牧之との交渉が成立し、馬琴も恐らく心中不快であつたらうが之を諒承して京山の手で出版することになり、馬琴へ預けてあつた草稿返却を交渉したが馬琴は子孫に遺したいとてどうしても返さなかつた。之には牧之も隨分不快のやうであつたが、此の事は牧之が兒孫に遺した文書中に明かに記してある)止むを得ず重ねて草稿全部を書き京山の許へ送つた。之と最初に京傳の許に送つた草稿の一部とがもとゝなつて、殆ど全部が京山の手で書き直されて出版されたわけである。

扨て本書出版は斯の如くにして緒についたわけであるが、書名の「北越雪譜」は馬琴の選んだものであることは既に述べた。實は、此の名を用ひることについては京山はあまり快しとしなかつた。自分で色々と工夫してゐる。「越後國雪物語」「雪話」「雪篇」「北越雪志」等が散見されるが、馬琴がかね〳〵その色々な著書(例へば「玄同放言」等)に豫告した「北越雪譜」の名が既に廣く知られてゐるから夫にして呉れといふ書肆文溪堂の懇請によつてかく定まつたといふことである。

馬琴と牧之との間の交際は右の經緯の爲多少とだへたこともあつたかもしれぬが、本書出版後も晩年迄續き家庭の内部の打明けや相談等も手紙の上で行つたといはれる(市島春城著・藝苑一夕話・上卷八六頁)。勿論、牧之と京山との間の交際も非常に親密に永く續いたのである。

次に本書出版の年であるが岡田先生の解說には初編の上卷は天保六年の刊行で、下卷は同七年九月の發兌であると記されてある。之は夫々「敍」及び「奥付」の年號によつた旨を直接伺つた。所が「隨筆春城六種」

によると京山・京水父子が曬澤に牧之を訪ねた時に漸く出來た許りの「北越雪譜」――恐らくまだ校正刷を假綴にした位のもの――を多年待ちこがれた牧之へ土產として持參したと思はれる由が記してある(同書三〇頁)。京山父子が曬澤を訪ねたのは天保丁酉八年の晩夏である(北越雪譜一六三頁、一六二頁、一九六頁)。して見るといよ〳〵出版になつたのは天保八年かもしれない。「隨筆春城六種」に又、「そして天保七年、越えて八年に至つて漸く前編が出來た。」(一七六頁)とあるのも此の事と一致する。所で京山父子の越後訪問の年であるが「隨筆春城六種」には天保八年でなくて天保七年となつてゐる。(三〇九頁―三二頁。又前年の天保六年十月廿一日に翌年越後へ行くと京山から牧之へ送つた手紙の寫しがある(三〇七―三〇八頁)之等の天保七年といふのは總て手紙の日附を基にしたものであるからさう不確ではないと思ふ。從つて本書初編の出版年月については、京山父子の曬澤訪問の年と共に調べ直す餘地がある。此の邊の考證は私共の職能以外のものであるから、何誰かにやつて頂いて判然と出來たら結構だと思ふ。

若し天保七年出版であるとすれば今年は丁度滿百年に當るわけである。

鮭の字の考(一六六頁)

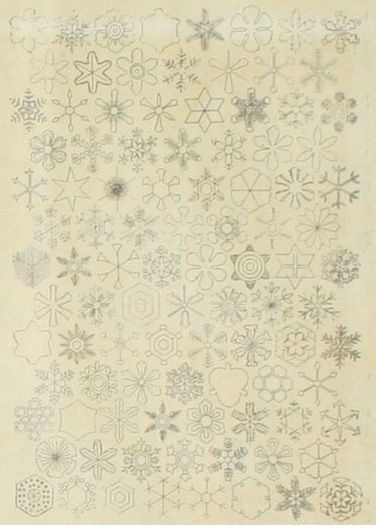
本書に鮭は鮭と書くのが正しいとある。試みに、宇源(簡野道明著)で鮭(ケイ・スケ)の字を見ると「ふぐ(河豚)王充論衡鮭肝死レ人」とあり國字では「さけ」のことに用ひるとある。又鮭(ケイ・サケ)の字を見ると「なまぐさし(魚臭)」とあつて之亦國字で「さけ」のことをいふとある。つまり支那には「さけ」に相當する字がなかつたものと見える。赤松宗旦著「利根川圖志」卷一、八丁以下に利根川の物產のことが出てゐて、その中に鮭の話があるが此處にも鮭の字を使つて居る。その一節に「ある儒者よりフグの可否を問ふとて鮭は如何といひやりしかばサケなりと醫の思ひて可(ヨシ)と答へたるより、食ひて中り困みし事人の能く知りたる談なり」といふことが出てゐる。

白熊(四二頁)、**白烏**(二四頁)

白熊は勿論北極地方に棲息する白熊ではないであらう。東京市上野の動物園に、普通の月ノ輪のある熊の白色なのが、一頭永い間飼育されてゐた。總身純白で眼が紅味をおびてゐたやうであつた。數年前死んだといふことであつた。今年五月上旬同所に遊びに行つた時、園の飼育人の一人をつかまへて產地や捕護された年代を尋ねたが、「何でも信州との國境に近い越後でとれたとかいふ話です」といふ丈けで他は要領を得なかつた。本書の白熊は八海山の近くでとれたと記されてゐる。今後も注意してゐたら見付かるかもしれない。白熊も白烏も共に色素を生ずる機能に缺陷のあつたものであらう。佐賀には朝鮮から古く傳つたと稱する白烏がゐるが、之は恐らく本書にいふものとは違ふのであらう。

雪の形(二〇頁)

此の表題で、前々號に少し書いたが、追加したいことが出來たので再び書くのである。本書に引用されてゐる「雪華圖說」に續編のあることを知らないものが多いやうである。斯く申す筆者も亦その一人で、岡田博士のお話しによればその續編は現在中々入手し難いといふことである。所が今春東京の古本屋で、見付けた風俗畫報增刊第百八十四號、雪況圖繪、全國雪譜、(之は明かに北越雪譜に慣つた文字である)並に北



國之實況（明治三十二年三月一日東陽堂發行）に雪華圖說の紹介がしてあつて、圖も正續兩編のもの全部が再錄されてゐる。その圖と本文の一部とを此處に再錄して見やう。「我國に於て雪形を圖して。世に公にせしは古河城主土井利位君（許鹿と號す）を始とす。其の著書は。卽ち雪華圖說にして。天保三年壬辰秋七月刊刻する所なり。北越雪譜の如きは、此の書中の一斑を轉載せるに過ぎず、當堂（筆者註、東陽堂のこと）は永く其の遺功を傳へむが爲めに悉く登載せり。

其の圖說に云。夫水の其の形を變換する雪を以て最高なりとす。海陸の氣上騰して雲をなす。雲冷際に至れば其溫を失し、變じて雨となる。氣中に在るを以て一々皆圓なり。初圓は至微至細。漸を以て併合し。終を以て併合を得す。冷浸の甚に重體點滴の質を致す。冬時氣升て同雲を成し。冷に遭て卽亦圓體を成す。しき一々凝泣し下零するも其併合を聯相依附して大圓を成さむと欲し。六を以て一を圍み。綏々翩々。頓々天地の觀を異にす。故に寒甚ければ粒珠となり。寒淺ければ花粉をなす。花粉の中寒甚しければ、片愈美なり。凡そ物方體は必八を以て一を圍み。圓體は六を以て一を圍むこと。定理中の定數評べからず。雪花の六出なるゆへむも亦これのみ（立春後の雪みな五出の說あれども取り雜し）水已に雪に變ずれば。重體忽ち二十四分を減じ。輕體忽の如く。花形萬端。都て六出。星辰芒角の如く。其狀整正其質潔瑩。實に賞するに堪たり。其精白にして他色を雜へざるは。光線の盡く反射を致すによる。雪若し黑色ならば。四望幽暗豈に堪ふべけんや。

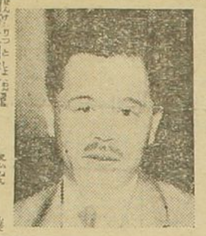
註に云。西土雪花を驗視するの法。雪ならむとするの天。豫め先づ黑色の八絲緞を氣中に晒し冷ならしめ。雪片の降るに當て之を承く。肉眼も視るべく。鏡を把て之を照せば更に燦たり。看るの際氣息を避け。手溫を防ぎ。纖鑄を以て之を拚提すと。余文化年間より雪下の時毎に。黑色の器に承て之を審視し。以てこの圖を作る。

右は天保年間の舊說なるも其の大樣決して違ふ所なし。云々」

右に引用した中で「雪華圖說」中の文は岡田博士著の「雨」の中にも全文が揭載されてゐる。然し「雨」は今日絕版となつてゐて手に入れにくい。「雪華圖說」の圖を全部そろへることの困難である由は嘗て「測候鎭談」中に記されてあつた。この等の理由で「雪華圖說」の圖と文とを此處に再轉載した。

コンナ安ダバ
生ル（十一月五日）

村島靖雄氏急逝



「小さな西洋史」「圖書分類概論」等の著書あり特に本縣文化及び史學界に殘した足跡は大きい、縣立圖書館長退任後は專ら國史編纂に心血を傾注してゐたが本年三月輕微な腦溢血症を起し爾來靜養の傍ら晩年の大事業縣史編纂に精進してゐたが二十一日から突如容態惡化し遂に二十五日朝九時長逝したもの。享年ばにして今回の突逝は各方面から惜まれ又部下の過失から振はなかつたその晩年に對し氏の溫心明朗な性格を知る程の人をして惜まれてゐる、家庭には新潟市の文化事業家として令名ある寡代夫人と長男黑さん（しがある（寫眞は急逝せる村島氏）

前縣立圖書館長として永年その職にあり史學界に令名あつた村島靖雄氏は二十三日午前九時新潟市本町通十番町の自邸で逝去した、享年五十二告別式は二十五日午前十時自宅出棺執行される

氏は明治十八年五月九日東京府に生る熊本五高を經て東大文科西洋歷史科に學び後文部省に入り留學生掛となり轉じて東京上野圖書館司書官となる大正十三年關東大震災に遭ふた直後招かれて新潟縣立圖書館長に就任し爾來昭和十年十月迄歷任その間

吉谷壯行會

北魚吉谷村尙武會では廿三日吉谷小學校に本年度入隊兵の歡送迎會を開い

長尾秋水像　雲崖寫

自越之海模寫栗原

栗原氏記參照

事八十五人、豪傑判檢事二十九人、試補二十六人、書記四百七十人、屬その他、看守長三十五人、看守四百人の增員と判檢事その他職員の待遇是正費が盛られてゐる

各省を通じて直接的の待遇改善はあまり發見されないが上級官更の大增員を行ふことは下級官更の進級の途が多くなり結局待遇の向上となるので明春は官僚に我が世の春が來るわけである

寶藏を一擲

新人劇

河原崎家・門外不出の數々

家訓に抗して寄贈

梨園の權威破りといはれてゐる新進團の盟主河原崎長十郎丈が慶安元年初代河原崎權之助が江戸木挽町に河原崎座を興して以來さつと三百年、歌舞伎の傳統に彩られつゝ同家に傳はつた門外不出の由緒ある品々を二十八日早稻田演劇博物館に寄贈した【寫眞は長十郎丈と寄贈品】

この由緒深い品々が消る傳統も個に口傳を續りとするだけで、現在長十郎丈が幼い頃に聞かされた記憶によれば

この二十數點の品々の中には代代河原崎家の祝儀の場合に用ひられた三番、翁、瑞々の三つの面、之は明治七年三月、七代目市川團十郎が當時奥行權を失つてゐた河原崎座を芝新堀に再興、そのこけら落しにこの三番の面をつけて踊り、これをかつての產家河原崎家に對する報恩の置土產として實家に歸つたといふ謂りある品を始め九代目團十郎が舞台で用ひた金唐皮、オランダ描き更紗などの煙草入れ四つ、三番と翁を金蒔繪した印籠、また九代目が手すさびの軸「天女羽衣の圖」など一世の名人九代目團十郎の面影を傳へる品々が數へられてゐる

またこの中には松花堂紹巴直筆の百人一首、抱一上人の繪手本、豐清の歌舞伎十八番の漆繪など當時の風俗を知る珍しい資料をはじめ厚重な厨子に納められた河原崎家先祖代々の位牌、家系圖などもあり、すべて日本演劇史の一ページを飾るものばかりである

「如何なること ことがあつてもこれだけは手離すな」といはれた永い間の家訓を破つた今度の長十郎の發願はかゝる演劇史的財產は一家の私すべきものではないといふ考へ方から出發したものでいはゞ新人「河原崎長十郎」の表現である

榛原製

尾去澤鑛山の堤防決潰

奔逸する泥流の怒濤

死傷一千余名を出す

凄惨・點々死體流る

【秋田電話】二十日午前三時頃秋田縣鹿角郡三菱尾去澤鑛山中ノ澤の精錬滓の硫化泥沈澱貯水池のダム高さ約四十尺が數日來の降雨の爲緩み突如決潰し泥流は怒濤の如く物凄く奔流

佛航空官 吾機で急行

加治木中佐と同乗

同機の福岡着は午後三時二十分の豫定で一行は福岡着の上縣廳と打合の上直ちに自動車で佐賀縣境を越え背振山の遭難現場に急行し悲しい空の英雄を見舞ふことになつた【寫眞は同武官の出發】

不運の災厄

けふの好天だつたら……

嘆く佐少佐

ブリュイエール少佐は羽田飛行場で出發前聞る

後分心配しましたがきつと消息が判つて落着きました、洵に不幸な稽事ですが

生命が 助かつたのは不幸中の幸ひです、ジャピー氏の負傷が若し輕ければ私は明朝でも東京に連れ歸つて大使館でなり私の家でなり又は病院なりに入れて手厚い手當をしたいと思つて居ります而し何しろ現場の標高がさつぱり分らないので何ふの春ですがしかし假令東京に着かなくともパリと日本の間を僅か七十余時間で飛んだのは空前の新記録です確か先年ポスト氏が東京からパリ迄で六日間余りかゝりましたからその半分の譯です、遭難の原因はジャピー氏について當時の模樣を十分調査しなければ分りませんが何しろ同氏はフランス一流の新進の飛行家でモスコー巴里間の長距離飛行をはじめ幾多の困難な長距離飛行を

惡天候 の場合に平氣で飛行して居る名手ですから決して

それにパリ出發以來珍しい程好天氣に惠まれて最後に惡天候に出會つたので惜まされたのでせう、結局如何なる名飛行家でも不運の災害といふことは免れませんから唯ジャピー君の不運を諦める外はありません、私は自分自身の經驗からしてもあれ程スピードの早い飛行機に乘つてゐると遠く微かに障碍物が見えても避ける間のないことが多いもので遭難當時は非常な惡天候で風雨のため視界を閉され惡運に見舞はれたものでせうまた墜落の際にガソリンに引火しなかつたのはスイッチを切つて應急措置をしたものと思ひます、どうか私が遭難現場に着くまでにジャピー氏が元氣でゐて呉れるやうに祈ります

そして少佐は初冬の青空に浮ぶ富士山の白い姿を眺めて

あゝ一日違ひですね、昨日がこれ位にお天氣であつたらジャピー氏も幸福であつたでせう

と感慨深さうに語つた

佛宣教師現場へ

【佐賀電話】ジャピー氏遭難の急報に接した長崎フランス領事館では取敢ず佐賀市在住宣教師ブランセ氏(O.)を派遣することとなり同氏は二十日午前九時半佐賀特高課員の案内で現場に急行したが不安な面持で口吻に語る

めかけ頃に眞白い繃帶をしたジャピー氏に對し手眞似で「欲しい物はないか」「フルーツはどうか」と狼狽しい一緒に國際語が滿ち溢れ傷の者の心を打つてゐた

内務省へ公電

ジャピー機の遭難について内務省警保局では二十日午前三時頃警察專用電話を以て佐賀縣警察部に對し遭難情況を問合せたところ左の如き報告があつた

十九日午後四時頃佐賀縣東松浦郡背振山裏に飛行機が墜落してゐるのを炭燒男が發見

多分 内台聯絡飛行の飛行機ではないかとの報告があつた、が調査の結果右はジャピー機なることがわかつた、そこで同山中から五六里離れた部落から醫師を派遣したがジャピー氏は頭と足に負傷してゐるが生命には別條ない樣である

又同日午前三時すぎ佐賀縣知事から内務省警保局へ左の公電があつた

訪日ジャピー機は十九日午後四時過ぎ管下神埼郡背振山中に墜落、搭乘者は生命に別條なきものの如し

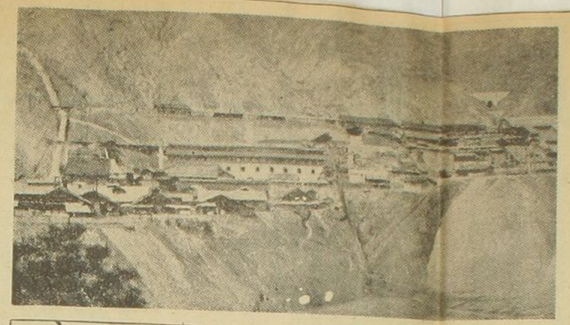
内台航空と 勅使

尾去澤鑛山の堤防決潰

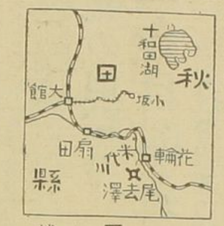
奔逸する泥流の怒濤

死傷一千余名を出す

凄慘・點々死體流る



【秋田電話】二十日午前三時頃秋田縣鹿角郡三菱尾去澤鑛山中ノ澤の精錬滓の硫化泥沈澱貯水池のダム高さ約四十尺が數日來の降雨の爲緩み突如決潰し泥流は怒濤の如く物凄く奔流して下流の中ノ澤、笹小屋、瓜畑、新堀等の各部落坑夫長屋に押寄せて長屋及び住宅四百五十戸を決潰せしめ死傷者一千余名に達する見込み泥流は深さ四十尺に及び米代川に流れ出し一部を堰止め死體は點々流れ慘澹たる有樣を呈してゐる、泥流に押流されたのは何れも坑夫長屋住宅等であるが劇場協和館尾去澤町駐在所は泥流に押流された【寫眞は中ノ澤全景、尾去澤附近略圖】



應援隊急行す

【秋田電話】尾去澤鑛山の泥流奔出事件のため縣衛生課から中山、千田兩醫師、保安課より三木警部、伊藤警部補等が救護應援のため現場に急行した

死體五十個を收容す

附近一帶泥海と化す

【秋田電話】尾去澤鑛山の硫化泥の奔流は鑛山と花輪町を繫ぐ澤に殺到しその下流は全部長屋といはず住宅といはず農家といはず泥流に押流され或は埋沒し上流附近の硫化泥數百尺下に埋沒した家屋あり花輪町鑛山間の交通は全く杜絶し泥流は尾去澤町字西道口より更に米代川の上流に達し米代川を堰止めて川水を逆流させ花輪驛附近の田圃まで一面に泥流の海となつて居り午前十時頃に花輪消防組が米代川から引上げた死體三十、錦木村消防組の收容したもの二十余に及んでをる

言語に絶する慘狀

【秋田電話】泥流の大體の埋沒家屋數は詳細不明だが尾去澤町役場員の調るところでは坑夫長屋住宅等合せて四百五十戸に上り一長屋に數世帯住まつてゐるので死傷者の總數は一千名は下らないであらうと、飯生愛つてゐる者數十名は花輪町公會堂に收容してゐるが現場は言語に絶する慘狀である

部落百戸も埋沒

【秋田電話】二十日午前六時二十五分秋田縣警察部に達した情報左の如し

二十日午前四時二十五分尾去澤鑛山中ノ澤鑛毒用貯水池決潰し下流の中ノ澤、瓜畑兩部落に浸水し住家多數流出の見込みなるも同時までに發見された死者三名、なほ收容者十名に及んだ同部落の住宅約百戸でいづれも泥流に埋められ詳細不明である

救護班組織

【二十日午前九時五十分秋田縣知事發内務省警保局電】今朝尾去澤沈澱池決潰す被害甚大の見込み救護班を編成派遣す

昔から著名な銅山

尾去澤鑛山は花輪町から西方約四キロにあり、同地方廻所の鑛山で明治二十二年から三菱で經營してゐる、和銅年間から採鑛されてゐた古い鑛山で銅が主産である、所在地の尾去澤は最近町になり人口は約七千である

昭和十二年十一月廿日
都新聞

一茶を偲びて

けふ百十回の忌日に

血縁の人々が挨拶と俚謡

信州柏原一茶終焉の土蔵内より中継

【〇〇・八後】

本日は俳人小林一茶が、文政十年十一月十九日その郷里柏原の煙雨つた土蔵の中で、悪まれること勿なかつた六十五年の生涯を終つてから恰度百十年になります、そこでこの忌日に當り、近世俳壇の奇匠の面影を偲ぶべく「一茶を偲ひて」と題し、一茶終焉の右土蔵内と東京の二ケ所から一茶に關する特別放送を行なことゝなりました、信州からの放送は、一茶の生活と縁の深かつた同地明專寺の晩鐘を先づ聞かせ、次いで信濃郷土研究家小林彌太郎氏の挨拶があり、引つゞき一茶の弟仙六の孫小林せつ嬢(七〇)の音頭とりで俚謡が行はれ、こゝからスキッチは東京に切かへられて田中旭樓さんの琵琶、ある日の一茶」が放送されます

挨拶

小林彌太郎

一茶四世の小林彌太郎翁は、今柏原で父祖の田畑を耕し農事に従つて居ります、翁は三男四女を持ちその長男は本年四十歳で五人の孫があり、なか〳〵賑やかな家庭を營んで居ります

一茶がなくなりましたのは文政十年の十一月十九日で、もう雪も二三度まゐりまして、其日は隨分お寒く眞夜中であつたさうで御座いますが、葬式も全つて質素で善提寺は村の明專寺で墓は寺の裏の小丸山に御座います、一茶は七年以前中風にかゝりましたが、一時は大層良くなりましたので、自分から名を飯生坊と改めて餘生を悠悠して生活して居りましたが、其後次第に身體不圓となり、晩年は山蔦に付近を行脚して居りまして、十一月八日までの行脚の記録が御座いますから、床につきましたのはほんに十日許りで御座いました、一生多く憑まれなかつた一茶には不幸が重なりまして其年の六月一日の大火で母屋がすつかり焼け、漸く焼けのこつたこの土蔵を假の庵として三度目の妻やた女と暮して居りましたが、たうとうこの日に其一生をこゝで終つたのであります、勿論土間へ穴を掘つて炬燵をつくり假床を設けて只一つの小さい窓明のうす暗い中で不自由な暮しでありました、この土蔵の中での句を一つ二つ申上げますと

蝿よ土や ほくりほくりと 蚤喰ぐ

木枯しや戸前の蔦が戸を叩く

などといふのが御座います、本年は百十年になりますので、何か供養をと思ひ立ちました、私共一家の念願もかなひまして菩提寺の御同情を得ましてさゝやかながら位牌堂の建立が土蔵の例らに出來、本秋其入佛の式をあげ、全國の郷人方から御句をいたゞきまして、記念の懸額も出來ましたことを嬉しく感じて居ります

一茶の後裔 小林彌太郎さん(上)と小林せつさん

俚謡

小林 せつ

今晩一茶弟仙六孫小林せつ嬢の音頭取りによつて行はれる俚謡は一茶の郷里柏原地方に昔から傳つて居る田植唄とお盆踊で、たこの土地の夏の毎夜のなぐさみで、旅の人も村の人達も一緒になつて廣い街道の松並木をめぐつて大きな輪を作り、夜明けまで踊り唄つたもので、歌は簡かなゆつたりした調子で、身體一杯にしなをつくつてあでやかに踊ります、田植唄は赤いたすきに白い手拭の鼠かむり、菅の笠をかむつてまだうす寒い山國の水の冷い田の中で一列に並んでぽつりぽつりと投げ配りしてある苗束をほぐしほぐし唄ひ、黒姫山のかげに日の沈みきる迄植えるのです

(イ)柏原田植唄

音頭 小林 せつ
小林 くに
中村 きの
風間 れん
小林 とき

〈白隠山で木を切れば 霧ぼ我謡
〈十七、八はねむいもの櫛の木のさがりし枝を洗に
〈五月が來れば思ひ出すおらが殿は水かけ論に討たれた
〈飯山の城は見上げてみれが高やしろ見下せば飯山の御殿かやぶき

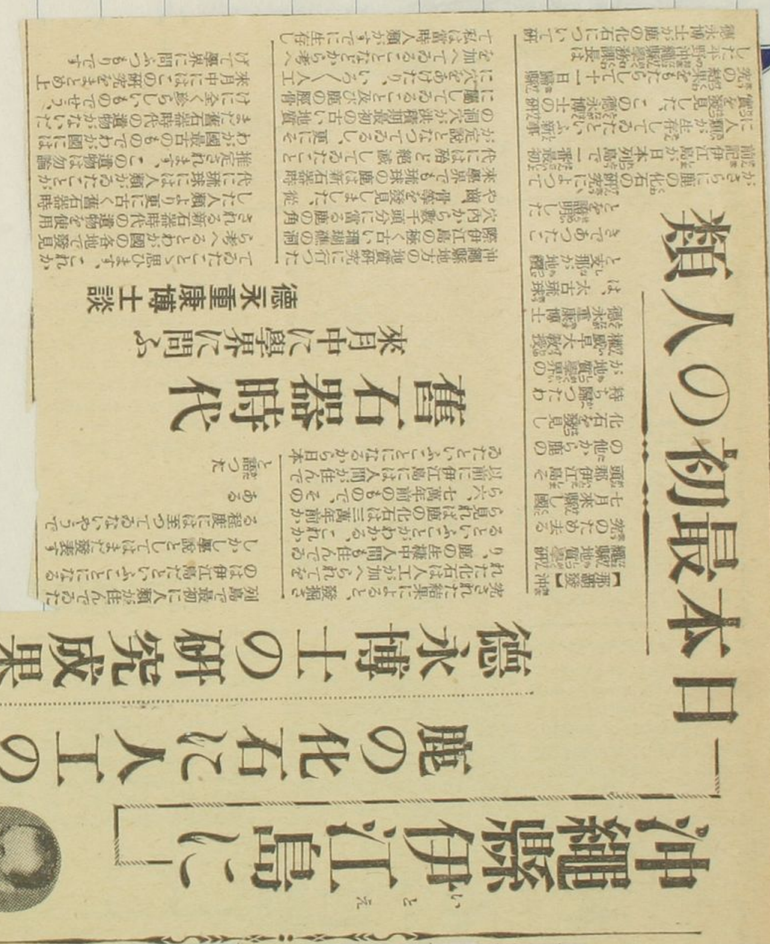
(ロ)柏原盆踊唄

音頭 小林 せつ
唄 柏原青年會有志
笛 岡部 二郎
太鼓 小林壽太郎

〈おけさ踊るなら暖で目をついた兎角おけさは目の霞だ
〈高田屋の柳風も吹かねにそよそよと
〈早く飯にして間屋の踊で殿さ音頭で踊りたい
〈どんどとんどとなる鐘は何處だ

寫眞 春甫畫の小林一茶翁と、本日放送の行はれる一茶終焉の土蔵

あれはお伊勢の風の音



自著國憲汎論ヲ上ル表（原漢文）

小野梓

明治十六年一月七日、某位臣小野梓誠惶誠恐頓首頓首謹ミテ白ス。臣聞ク太平ノ洋ハ涓滴ヲ擇バズ、其ノ深キヲ致ス所以ナリ。富士ノ岳ハ、埜壤ヲ嫌ハズ、其ノ高キヲ致ス所以ナリト。有道ノ主、仁愛ノ君、德三才ヲ統ベ、克ク覆載ノ恩ヲ成シ、明達四聰、尚ホ芻蕘ノ言ヲ容ル。是ヲ以テ野人ノ芹ハ、自ラ美トスル所ヲ獻ゼント欲シ、誠、中心ヨリ出ヅ。遼東ノ豕ハ、慙ヲ皆白ニ忘レ、路、千里ヲ遠シトセズ。臣梓區〻戀闕ノ情、自ラ息ムコト能ハズ。翼〻報國ノ志、由テ來ル所アリ。乃チ聞見ノ寡陋ヲ忘レ、試ニ邦國ノ憲法ヲ論ジ、名ケテ國憲汎論ト曰フ。印刷裝釘以テ獻ジ、安ニ九重ノ天聽ニ達センコトヲ望ミ、竊ニ乙夜ノ御覽ニ供センコトヲ擬ス。茲ニ述作ノ原ヅク所ヲ陳ベ、

聊カ左右ノ執奏ニ代フ。

臣ノ家世〻土左ノ國ニ住シ、臣ノ族系ハ、新田氏ヨリ出ヅ。臣ノ族祖臣義貞、忠ヲ元弘建武ノ際ニ盡シ、臣ノ家父臣節吉、義ヲ元治慶應ノ間ニ唱フ。特ニ臣節吉ノ如キハ、夙ニ先帝愛民ノ勅ヲ奉ジ、竊ニ勤王忠節ノ志ヲ抱キ、頗ル報效ヲ謀ル。不幸中道ニシテ病ミ、終リニ臨ミ臣梓ニ遺囑シテ曰ク、吾レ未ダ王政ノ維新ヲ見ズ、多年ノ志ヲ齎ラシ將ニ死セントス、吾レ死スルノ後、汝宜シク王家ト國土トノ爲ニ、克ク汝ノ身ヲ致シ、以テ乃父ノ志ヲ全ウスベシト。臣梓年甫メテ十五、泣テ命ヲ聽ケリ。爾來十有餘年、未ダ曾テ一日モ之ヲ忘レズ。以爲ラク遺志ヲ全ウシ孝道ヲ致スハ、王家ニ勤メ國土ニ竭スニ在リト。常ニ意ヲ是ノ事ニ用ヒ、力ヲ此ノ際ニ盡サント欲ス。不肖臣梓才少ニ識短ニ、嚮ニ謬ツテ推選ヲ蒙リ、乏ヲ某官ニ承クルコト、茲ニ三四歲、未ダ其ノ任ヲ盡スニ遑アラズ、遂ニ明治十四年ノ年ニ及ビ、國會開期ノ詔降ル。臣密ニ封事ヲ大臣ニ上ル。是ニ於テカ閣命忽チ官職ヲ解カル。臣梓惶恐自ラ其ノ罪ヲ知ル。然レドモ臣ノ家世〻王家ニ勤メ國土ニ竭シ、不肖臣梓ノ身ニ及ビ、俄然其ノ名聲ヲ墮セバ、則チ不孝コレヨリ大ナルハナシ。臣ノ至愚ト雖モ、亦其ノ悲シムベキヲ知ル。是ヲ以テ職ヲ罷ムルモ尙ホ且ツ敢テ自ラ逸セズ、心ヲ國事ニ注ギ、私ニ其ノ報效ヲ謀レリ。臣梓惶恐伏シテ惟ミルニ陛下聰明仁德、允文允武、登極ノ初、首トシテ五事ノ誓約ヲ立テ、八年重ネテ立憲ノ詔ヲ頒チ、十四年遂ニ國會開設ノ期ヲ定メ、將ニ時ニ及ンデ憲法ヲ立テタマハントス。臣梓負責ノ身ヲ以テ、生レテ此ノ盛事ニ遇フ。安ゾ天地無窮ノ聖恩ヲ荷ヒ、力ヲ此ノ際ニ致シ、以テ能ク亡臣節吉ノ遺命ニ答ヘ、勉メテ家聲ヲ揚ゲザランヤ。

商人の初最本日一沖

臣梓側ニ聞ク、陛下嚮ニ内閣大臣ヲ海外ニ遣ハシ、以テ各土ノ憲法ヲ周察セシメタマフト。臣深ク陛下ノ意ヲ憲法ノ制定ニ用ヒ、大ニ萬世ノ根基ヲ立テタマハント欲スルニ感ズ。臣モ亦嘗テ海外ニ游ビ、畧〻憲法ノ理論ヲ講ジ、旁ラ各土ノ國體ヲ觀ル。歸朝以來、竊ニ之ヲ述作シ、挿ムニ本朝古今ノ典故ヲ以テシ、以テ一部三篇ノ冊子ヲ著ハシ、明治九年、始メテ其ノ稿ヲ起シ、前後七年、乃チ其ノ筆ヲ閣ク。言〻淺薄鄙近、固ヨリ大方ノ笑ヲ免レズト雖モ、思ヲ構ヘ辛苦渉獵セシハ、全ク至尊ノ覽ニ供セント欲スルニ在リ。區〻ノ著作、孱〻ノ微言、敢テ義貞ノ功ヲ繼ギ、節吉ノ志ニ報ズト言フニ非ズ、亦聊カ勤竭ノ誠意ヲ表スルノミ。

臣年方ニ壯、前途猶ホ遠シ。其ノ王家ニ勤メ國土ニ竭ス所以ノモノハ、應ニ是ニ止マラザルベシ。然レドモ卑キヨリスルニ非ザレバ、則チ高キニ登ルベカラズ。邇キヨリスルニ非ザレバ、則チ遠キニ到ルベカラズ。臣ノ自ラ王家ト國土トニ期スル所ハ、甚ダ大且ツ遠シト雖モ、小邇ヲ積ミテ致スニ非ザレバ、則チ其ノ能ク爲スナキヲ知ルナリ。臣梓惶恐伏シテ惟ミルニ陛下聖德廣大ナル海ノ如ク、容レザル所ナシ。臣ノ著作ノ如キト雖モ、亦必ズシモ之ヲ棄テラレザルヲ知ル。陛下若シ萬機ノ暇ニ當リ、幸ニ一閲ノ榮ヲ賜ヒ、臣梓ノ微衷ヲ垂憐シ、七年ノ辛苦ヲ察セラルヽアラバ、則チ臣ノ光榮、實ニ是ヨリ大ナルハナシ。天威ヲ冒瀆シ、屏營ノ至ニ勝ユルナシ。某位臣小野梓誠惶誠恐頓首頓首上表ス。

此ノ表ハ原ト宮内卿ニ依リテ叡覽ニ入レンコトヲ期セリ。然レドモ故アリテ果サズ。今之ヲ玆ニ錄シテ、以テ余ガ勤竭ノ微衷ヲ明カニスト云フ。

明治癸未（十六年）二月　東洋學人　小野梓謹誌

（右小野梓全集所載、佐伯仲藏譯）

醤油の初最本日一

○

待　花（國憲汎論上卷題詩）

欲暖猶寒節序遲。　朝〻屈指數花期。
花期未到意先到。　爲賦墨江春色詩。

壬午之歳（明治十五年）小梓題幷書

○

著書言其志　隨莊（國憲汎論中卷題字及文）

右係先大人之遺墨。先人嘗告梓。曰。大丈夫不能當路行其志。則宜著書言其志。梓也。未能當路行其志。則宜著書言其志也。此書之作。其意全在于茲。故今集此七字。明所以原於先人戒飭之語云。先人諱義與。字比卿。號金水。通稱節吉。隨莊其別號也。好文善書。土佐宿毛之人。嘗唱義於元治慶應之間。不幸中途而終。嗚呼悲哉。明治十六年四月三日。東洋學人小野梓謹識幷書。

○

あい見むと契ることはのなかりせは
かはかり深くものは思はし　あつさ

（右國憲汎論下卷題歌、明治十八年九月）

昭和十一年十月　　佐伯仲藏（印刷代謄寫）

稀人の初最本日一

新議事堂

帝國議會

◇…工成れる新議事堂の偉觀

◇…江戸城の櫻花期にあたつて落成した本堂、議事堂新築の計畫は、茫々歲月廿年、漸くその工の成るや議會政治は實質的に見て今やアゲ潮オリ。虎は死んで皮をのこすというが、議會政治の氣息奄々として、平民的、民主的な議院のみ、徒らに地上にその勢威を誇示することは、魂のない傀儡、後人これを仰ぎ見て憲政の廢墟といはずんば、誠に幸ひなことである。

◆◇◆

が、理屈を抜きにして、單に建築物としてみた新議事堂は、お世辞ではないが、天ッ晴れなものである。用材の全部が國產であり、月廿日星霜、工費約三千萬圓、素晴らしい豪壯な大殿堂である。

◆◇◆

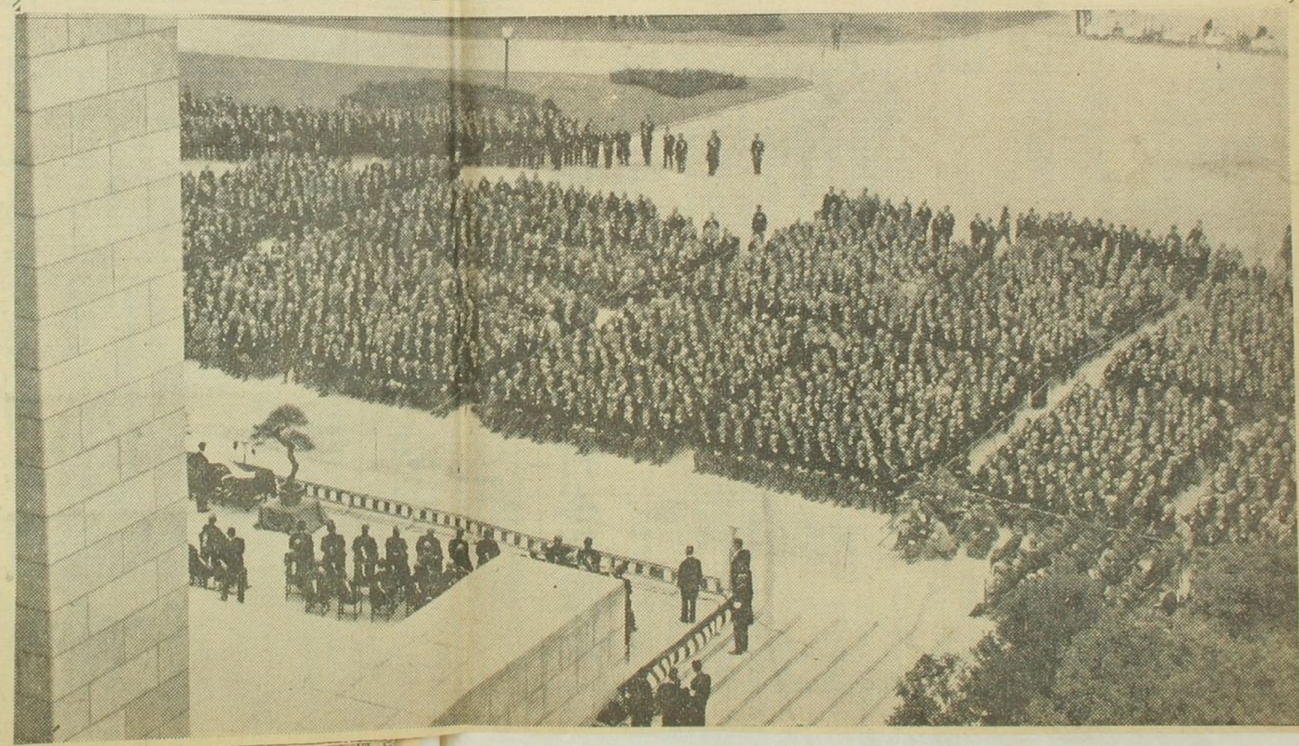
愛媛の産、大阪を築城した豐公の樂の築や大阪を築城した豐公の樂の築や大阪を築城した豐公の樂の築や

堂殿大の
式成落の式典ぶり

憲政功労者三千名集ふ

憲政に功勞をつくした人々、白髮、日焦の老軀に無限の感慨をこめては、我國に初めて成つた議事堂の威容を見上げる老政客の姿がとりわけて多く眼につく、正面、四本の大圓柱前階段上には首相、藏相始め各國務大臣、親任官以上約五十名の中にさきに第六十八議會において憲政功勞者として表彰された尾崎行雄、大竹貫一、濱田國松、菅原傳、望月圭介、安達謙藏氏等の顔も見える、午前十一時式開始、川越警視廳警視局長官の挨拶に始まり、全員總起立して「君が代」を奉唱、大熊工務部長が、全生涯を捧げて出來上つたこの大建築の工事報告をする、近衛、富田貴衆兩院議長の式辭に次いで廣田首相が起つて

祝辭を述べた後、江口電氣局總務部長閉會の挨拶を述べて式を閉ぢた、式終つて後、議事堂裏の廣場に張られた大テント内で記念の大祝宴が張られた、國產料理に盃をあげて聖壽萬歲を奉唱し、兩院萬歲を叫んで閉宴、つづいて參列の人々はこの議事堂を參觀、意義深いこの落成祝日を終へた【寫眞は正面廣場における落成式】



第二万一千六百五十二號

しやとなつた議會政治が、世界に誇る白堊の一大摩天樓――新議事堂へ納さうといふのである。猶は貰つた小判をどう處理せんとするのであらうか。屋ちあらはに、赤い褌一ッの箱根山の馬方八五郎は月廿星霜、工費約三千萬圓、素綺羅錦繡の美衣を纏うて、いざ、どこへ行かうとするのであらうか。

◆◇◆

原敬が天下を掌握してその華々しかなスタートを切らうとする大正七年、議事堂新築計畫費がちれ、紅毛碧眼の徒、遂に一指をもよッぴりとあたまを出したまゝ殆と立ち消えとなつてゐたも一切が日本人の手において成さなければならない。しかも、その設計建築の本筆一主義のシンボルであり、國奉ひなことである。

◆◇◆

が、理屈を抜きにして、單に建築物としてみた新議事堂は、お世辭ではないが、天ッ晴れなものである。用材の全部が國產であり、樂快を以てするも、遠く脚下にも及の築や大阪を築城した豐公の豪樂の築城に比べ、その設計建築のかなスタートを切らうとする大一切が日本人の手において成さ正七年、議事堂新築計畫費がちれ、紅毛碧眼の徒、遂に一指をもよッぴりとあたまを出したまゝこれに染めなかつたのである。日殆と立ち消えとなつてゐたも本筆一主義のシンボルであり、國

ナルミ
東京 丁の目A本
【專屬】【客】【洗濯】佐藤、山本、廣戸
松澤、小川、田、淵、表木井
中村、高橋

◇…が、うちの子供は、一緒に遊ぶ、惡いことをいはれるとすぐ泣きべそをかくのだから、一緒に遊ぶと惡いことをいはれるのが、これ

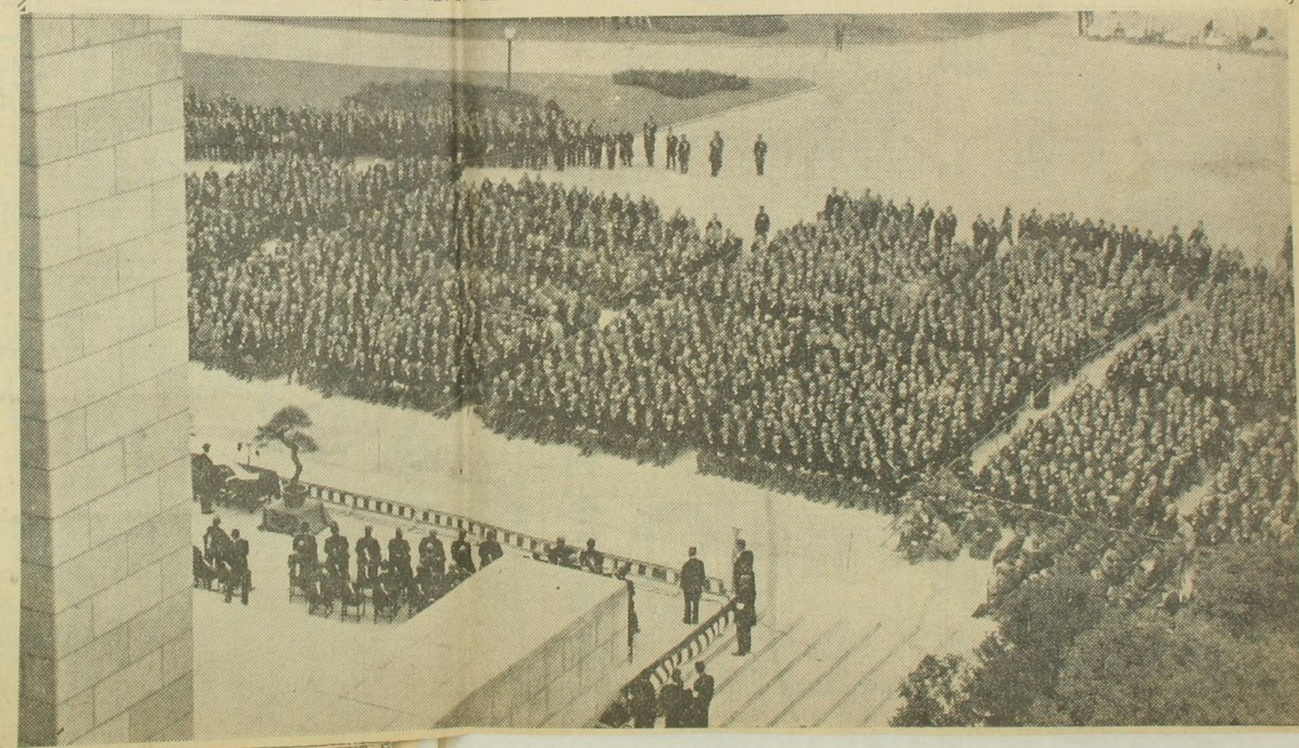
◇…が、出れた原因は、もうのだよ、もうのなので、分つたときに、ものなので、泣くのだから、泣くのは、泣くのは、泣くのは

民意暢達の大殿堂
晴れふけ落成式
憲政功労者三千名集ふ

帝國議會新議事堂落成式、我國の憲政四十八年を綴る半世紀の歴史において、明治二十二年欽定憲法發布以來の最も豪華なる國民的式典は、七日午前十一時から、帝都の大空を戴つてそそり立つ正面高塔前廣場において盛大に、嚴肅に擧行された、この日全國から參じた現前元貴衆兩院議員、朝野の名士三千名、式に續く華やかな祝宴に、聖壽萬歳を唱和し、憲政を謳歌してこの大殿堂の前途を祝福した――午前十時半、續々と參入する列席者はその何れもがどれかの部分に我國の

憲政に功勞をつくした人々、白髮、白髯の老軀に無限の感慨をこめては、我國に初めて成つた議事堂の威容を見上げる老政客の姿がとりわけて多く眼につく、正面、四本の大圓柱前階段上には首相、蔵相始め各國務大臣、親任官以上約五十名の中にさきに第六十八議會において憲政功勞者として表彰された尾崎行雄、大竹貫一、濱田國松、菅原傳、望月圭介、安達謙藏氏等の顔も見えた、午前十一時式開始、川越議會事務局長官の挨拶に始まり、全員總起立して「君が代」を奉唱、大角工務部長官が、全生涯を捧げて出來上つたこの大建築の工事報告をする、近衛、富田貴衆兩院議長の式辭に次いで廣田首相が起つて

祝辭を述べた後、江口管財局總務部長閉會の挨拶を述べて式を閉ぢた、式終つて後、議事堂裏の廣場に張られた大テント内で記念の大祝宴が張られた、國產議事堂を祝ふ國產料理に盃をあげて聖壽萬歳を奉唱し、兩院萬歳を叫んで閉宴、つづいて參列の人々はこの議事堂を參觀、意義深いこの落成祝日を終へた【寫眞は正面廣場における落成式】



しやとなつた議會政治が、世界に誇る自慢の一大殿堂へ納まろうといふのである。猫は貰つた小判をどう處理せんとするのであらうか。解るものからは、赤い褌一ッの箱根山の馬方八五郎は綿織綿織の美衣を纏うて、いざ、どこへ行かうとするのであらうか。

◆◇◆

原敬が天下を掌握してその華ばなしかな、スタートを切らうとする大正七年、議事堂新築計畫費をちよッぴりとあたまを出したまゝ、これに染めなかつたのである。日務と立ち消えとなつてゐたも本章一主義のシンボルであり、國

幸ひなことである。

◆◇◆

が、理窟を抜きにして、單に建築物としてみた新議事堂は、お世辭ではないが、天ッ晴れなものである。用材の全部が國產であり、月廿五萬、工費約三千萬圓、棄樂の策や大阪を築城した豐公の豪快を以てするも、遠く脚下にも及ばない。しかも、その設計建築の一切が日本人の手において成され、紅毛碧眼の徒、遂に一指をもこれに染めなかつたのである。日本單一主義のシンボルであり、國

◆◇◆

◇…が、うらいさ仕は、鏡賀に遜い、遙憲議は臨議法が、ようにくいといきをいれよ

も物の素材の一部にすぎない。ものなので、なかなかこれに觀賞を惜しまない。しかし、生れた當時は、ようにくいといきをいれよ

の時には必ず眼に入るものの、さてそれの母の眼鏡を眼鏡を眼鏡にかけて、これ

鏡をして置かれる事に、これ

ばかりを生れる事に、同じ

うな目を見せたいものに、

要ですが、全生涯を捧げて

出來上つたこの大建築の工事報告をする、近衛、富田貴衆兩院議長の式辭に次いで廣田首相が起つて

祝辭を述べた後、江口管財局總務部長閉會の挨拶を述べて式を閉ぢた、式終つて後、議事堂裏の廣場に張られた大テント内で記念の大祝宴が張られた、國產議事堂を祝ふ國產料理に盃をあげて聖壽萬歳を奉唱し、兩院萬歳を叫んで閉宴、つづいて參列の人々はこの議事堂を參觀、意義深いこの落成祝日を終へた【寫眞は正面廣場における落成式】

東京　丁の人口
【番電】【夜】【速報】山本、國戸
松澤、佐藤、岡部、
中村、高橋　瀬沼、淵田、淀永井

ナルヂ

今朝の都

古所物小賣（製値段）

輝く威容新議事堂を描く

落成記念

世界一の新設備

科學の粹鏤めた"國產"殿堂

工程十九年・二百五十萬人動員

◇…江成れる新議事堂の偉觀 國會開設の大詔を戴き、人は眼を小手を貫つたといふ。馬子が衣裳を著たといふのだ。あげ潮の古下駄のたとへに、もみくしゃとなつた議會政治が、世界に誇る自慢の一大殿堂(議事堂)——新議事堂へ納まらうといふのである。眼は貫つた小手をどう處理せんとするのであらうか。屋もあらはに、浜離宮御殿の美衣を著て、いざ、どこへ行かうとするのであらうか。

◆◇◆

國會が天下を擔ひてその華かなスタートを切らうとする大一切が日本人の手において成す正七年、議事堂新設計畫費がちゃんと立ち消えとなつてゐたも本章一主義のシンボルであり、國民主權の結晶でもある。所ら、この議會、國會、政府委員室、正事進行室、古風の老翁の廊下イルは、おとを、「非常時」ではなく各委員室等々となつてゐる。だが、これは大綱のとりきめあつて、この本議會を開いて見て、便、不便の經驗によつかつたと、徐々に、多少の更改を施す。といふのは、今は單に組上の設計で、よく出來てはゐるけれど、あまりにだらり廣くなつたため、部屋から部屋への移動をいやがる。貴族院の議場は、首相官邸の横に當つてゐるのだが、金筋の脱歩にしても、日暮れて遠道しの感が深い。

これを事務當局から見れば、今、どの大臣が、どの委員室にゐるかを、これを速記に知る必要がある。そこで、必要な情報へそれぞれ電氣裝置を施し、その在否をパッと電燈で明滅する仕掛けとなつてゐる。したがつて、「丸でおのれの所在を明かなるしめるもの」で、まるで、各大臣は、夕闇を行く蝙かたいなことになつてしまつたが、永田拳相はなど、いつまでも食堂で長談義に耽つてゐるとか、「食堂の拳れるまで、ともされてゐる」といふことになる。

◆◇◆

ところで、事務當局は、今、人員增加の要求を議會に提出してゐる。書記官、事務官、速記士、宗務官等々——何しろ、五千國の家賃、どの一人で足りた大臣も二人にせねばならんと、同様、馬を飼へば馬もいるし、馬丁もおかねばならんと同様、新議事堂は今のところ、子供が大人の着物を著ようとしてゐるのと、議會政治の新思想を示すことは、魂のない佛、眼のない鼠、後入これを仰ぎ見て、議會政治の新思想をしはすんば、鼠に牽ひなことである。

◆◇◆

が、理想を別にして、單に建築物としてみた新議事堂は、お世辞ではないが、天ッ晴れなものである。用材の全部が國產であり、明月出星菊、工費約三千萬圓、業績の第や大阪を凌駕した豪公の新設備は、そのエの成るや議會政治は實質的に見て今やアゲ潮の古下駄だ。魂は死んで皮をのこすといふが、議會政治の新思想を示すことは、魂のない佛、眼のない鼠、後入これを仰ぎ見て、議會政治の新思想をしはすんば、鼠に牽ひなことである。

◆◇◆

議會政治が、世界に誇る帝國議會の偉觀を引いて「議會の女神」の初ッ端れ、と勇壮に映えた。——だが、人は眼が

丙子毫錄（十）

反譯雜話

反譯は叛逆だと西洋で言ふてゐる、偶然羅甸語の反譯と叛逆の二語が音が近かいから、斯る諺が生じたのだが、事實多くの反譯は原作をブチ毀はしてゐるから叛逆と云へ得る。それほど反譯は難澁のもので、日本語は西洋語と根柢が異つてゐるから、反譯は別して困難である。日本では原作の一語一句をそつくり譯するのを直譯と云ひ、意を採つて譯するのを意譯と云ふてゐるが、直譯は讀者に頗る受けがよくない。必竟語も語法も彼我に大なる逕庭があるからで、多くは意譯であるが、意譯と云ふ中に創作の加味されてゐるものが甚だ多く、そしてそれが成功してゐる。併し嚴正に云へば、これは反譯でないかも知れないが、日本ばかりでなく、どこの國でも純正の反譯は幾んと有り得ないやうに思はれる。

所謂意譯者の內には原文に由りながら、思ひ切つて、自分の心持で書く人もある。それは明かに創作が加味されてゐるが、其方がよいと主張するものもある。坪內逍遙の沙翁譯なども實は此方に屬するかも知れない。日本の通用語に日本の舞臺語をも加へて、自家の感情や思惑を書いてゐるから、設令原作に據つてゐても、逍遙の創作としか思ひない、實際に於て創作が加味されねば反譯は不可能のものであるかも知れない。

明治の初頭に種々の反譯が出たが、實は嚴正の反譯と見るべきものは幾んと無く、西洋小說を讀んで勝手に筆者の思惑で書いたものが多い。それが今日になつて却つて讀者に一種の興味をそゝると云はれるのも原作に拘泥せず、自家の感興をそれに托してゐる所に妙があるからだ。必竟創作家が餘業にやつたから、どことなく餘裕があり又字や語句にも豐富なウチケブラリーがあつたからでもあらう、中村正直の西國立志篇などは、原文に比すると隨分誤譯もあるけれども、文章が立派で筆者に人を導くの意があり、それが隨所に閃いてゐるから、今讀んで見ても此節の駄反譯よりも遙かに優つてゐる。

どこの國の言葉でも他國の言葉で描し難いものがある。名詞などは移し易いとしても、言ひ回はしの味や、匂ひがどうしても移らない。アクセントだけでも言葉に死活がおこる、俗語となると別して移し難い。滑稽、詼諧、地口などいふものになると、何んとしても移すことが出來ない、花柳界などの通語や駄洒落などは、其國に於てこそ味があるが、譯しては全然味を失ふ。日本の和歌の枕詞、さてはカケ言葉、これ等によつて味つけられてゐるものをどうしてもそれを他國語に描することが出來ない、去れば西洋の詩を譯して見ても興味が索然であると同じやうに、日本の俳句や和歌を外國語に譯して見ては、まるつきり趣味がない。西洋の詩には言葉が顚倒したりしておのづから綾をなすが、それすら他國の語に移し兼ねる。譯文には往々言葉の間に說明が混する。之は意義を理解せしめる方便で

はあるがそれだけ譯が拙だと云ふことになる。どこの國の言葉にも特有の匂ひと味とがあつてそれが神髓となつてゐる場合が多い。同じ言ひ方でも其匂ひと味とによつて愛情が閃めいたり、憤悲がほのめいたりする。此の微妙さをどうして移し得ようか。グード・モーニング・サーと云ふ言葉をおはやうと云へば輕くつて多少の愛嬌もあるがこれを森田思軒の譯したやうに好朝君よと譯すると、何んの味もないではないか、日本のやうな敬語の多い國言葉では、西洋のYouと云ふのに對し、十位異なつた稱があつて、それ〳〵に趣をなすのだが、洋譯すると一概にYouと云ふより外に言葉がないのだ。

自分が經營した文明協會では毎月一二冊の譯本を出版することが十數年續き、自分も隨分苦勞したが、常に反譯が粗笨だ、誤譯が多いと云ふ訴へを聞へた。浮田博士其他が監督をして直すこともあつたが、なか〳〵直し切れない。概して外國文を讀み得るほどの人は譯本を嫌うが、それは主として善譯の無いのに歸因する。善譯の無い譯は、第一原書が讀めると誰れでも反譯をなし得ると考へることが甚しい間違である。多くの譯者は原書を一旦精讀してから筆をつけ始めるでなく、ブツつけ筆を執り始め矢鱈に譯するから、好譯の出來やう筈はない。原書がよく讀めても外國語に通ずる人必らずしも譯筆に長じない。創作などやるやうな文學的の人は、面倒くさいので他人の作を刻苦して譯することを好まない。これも好譯の出ない一原因である。忠實の反譯家は原文の研究に時間が潰ぶれて、一日一枚も譯し得ず、一卷を譯了するに數年も費す人がある、衣食足るの人が譯者であれば、それも出來ないことでないが、生活の爲めにする反譯はそんな氣長なことは出來ない。尙其上に日本の反譯料は極めて低いから、これも一原因だ、反譯に對する批評家の少ないことも亦一因であらう。

私などは面倒なことが出來ない性分で、自から反譯した經驗は幾んと無い。青年時代外字新聞の雜報を學校から課されて反譯を試みたことゝ、西洋のアチクドートを譯して「蟹の泡」の書を版にしたことゝ、記者時代にコールド・バックと云ふ露西亞小說の英譯を口譯して人に書かせたことのある外、反譯を企たてたこともないが、回顧的に反譯に關する思ひ出を語れば左の如きものがある。

富山房の前身東洋館書店で小野梓氏が良書の刊行を企てた時、高田半峰氏がゼボンの貨幣論を譯した。小野氏は之れを校閲したが、あの堪能の人だから、全部自家流に直した。其の用語も語調も小野流で、好譯とはなつたが、半峰氏の味はどこを搜しても片影を留めず、出版されたのを贈られて一讀すると、小野梓譯とする方が妥當だと思ふたこともある。譯者に依つて同じ原書でも全く其の面目を異にする。

沙翁のマクベスを森鷗外が前に譯し坪內逍遙は後に譯した　試みにマクベス夫人の獨語の處を讀みくらべて見ると、味が全く違ふので、譯者により斯うも違ふものかと一驚を喫したことがある。譯の優劣は別として劇に通じ舞臺を解する逍遙と否らざる鷗外の譯筆に斯る相違のあるのは偶然でないとも感じた。

自分が稿した時文を兩三度人をして英文に譯させたことがある。其譯文を讀んで見ると、自分と同じやうな考を他人から聞くやうな感じがして、何となくクスグツタイ氣がして堪らなかつた。畢竟言葉の相異が斯くするので不思議はないが、原作と譯本

との間に感情其他の隔りがあるのはこれに由つても分かる。

歐洲大戰中或る必要があつて外事新聞の切拔を和譯させたことがある。聯合軍の進退に關する記事であるのに、譯文の內に聯合軍の文字が一つもないのでおかしいと思つたが譯者はブライスの語を解し得無かつたことが分つて一笑したことがある。某雜誌に誤譯の一例として、インノセント十世をInnocent Xと書いてあつたのを、羅馬法皇とは知らず、Xをクリストマスの略字とする所から、これをクライストと譯した笑話もあるが、無邪氣なクリストと譯した笑話もあるが、斯る滑稽な誤譯は決して珍らしくない。

德川期の或る頃しきりに支那小說や叢話などを和譯することが行はれ、岡嶋冠山が其巨擘と云はれた。上田秋成の雨月物語なども支那の小話の和譯であるが、原文に較べて見ると、秋成の文が遙かに優つてゐる。これなどは反譯とは云へ、矢張り譯者の創作が加つて成功したものと見ねばならない。

上田敏は上乘の譯者と云はれたが、其の門人が辯護してゐるのに反して、批評家はどの譯を見ても上田流だと云ふてゐる。上田の譯がうまいと云ふて門人の賞揚して擧げた例を見ると、仰ぎ見ると云ふやうな原語を「ふりさけ見れば」と譯し「聲高らかに鳴けよ郭公」と普通譯すべきを「名乘りを上げよほとゝぎす」とあるなどであるが、よく日本の言葉を應用してゐる處に才は認めるが、しかしこれも矢張り原語を日本化してゐるので、創作が加つてゐると評することが本當であらう。

原書にもいろ〳〵の種類があつて、外人が日本の事を書いたもので耶蘇教徒の紀行などになると、いろ〳〵の書き違ひがあり人名や地名に聞き違ひがあり、觀察の誤りなども多くあるが、それを他國で譯するのなどが、敢て訂正を加へずとも濟むであらうが、日本で之れを譯するとなると、誤謬に相當の註脚を加へねばならん。これが譯者の義務である。しかるに其の訂正が隨分面倒で、探り當らないことがあると、其の取調べの爲め筆を停めて、多くの日子を費すことがある。これも亦反譯の一難である。

堀口大學氏は多くの反譯をやつただけに其の所感が要を得て居る。氏は曰く「原書は反譯者にとつては、たゞ一面の陷穽以外の何物でもない、彼はその中を拔き足、さし足、然も隅から隅まで歩き廻らなければならないのだ」と。

反譯は譬喩的に云ふと、口眞似である。他人の言ふことをそつくり其通り似せればならんが、實は原作者に種々の筆癖があつて、中にはダラ〳〵と留め度もない文をなすものもあり、極めて解り兼ねる艱澁の文をなすものもある。それを反譯者の務として其筆癖まで描さねばならんとあつては反譯者の務も亦難いかなである。斯の如きは反譯者を鸚鵡石となしラジオ器とするもので無理の沙汰である。原書にどこまでも據つた譯書は讀みにくひのが多く、譯書を迂遠として讀むことを欲しない者があるのも此故である。そこで譯者は原書の正髓を掴んで意譯する人がある。これは讀者の理解を博する方便であるが、しかし其の選擇がなか〳〵六つかしく、動もすると反逆となる。

何故面例至極の反譯を敢てするかと云ふと譯者にはさま〳〵の心理がある、譯料を得ん爲めの反譯などは論外だが、著者に對する崇敬や私淑からやるものもあり、著書の內容が己れの境遇に似て居るとか、描か

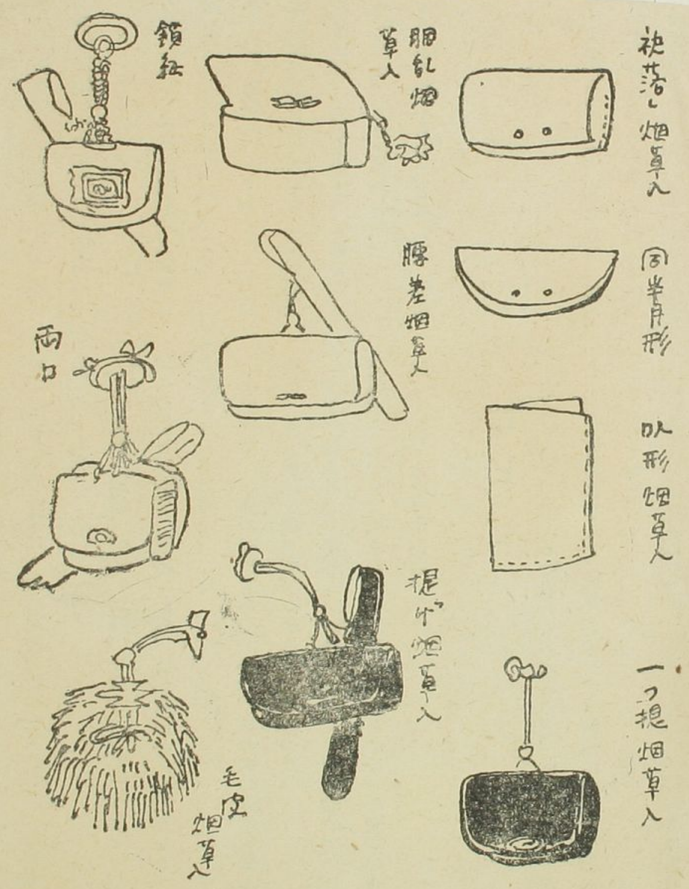
れてゐる村落が己れの居村に似て居るとか小說中の主人公に同感があるとか、種々の心理に由るものであるが、中には何人も譯し得ないことをやつて見る功名心からやるものもあり、文章や思構や脚色などの研究の爲めに、苦痛を惜んで刻苦するものもあるが、樂んでやるものが敢て無いわけではない。斯の如きは衣食足つて譯料を眼中に措くものでないから、往々一冊の反譯に數年を費すものもあるが、精譯好譯は往々此の範圍から生ずる。

吾々が東京大學に學んだ頃漢文の先生として中村敬宇翁が詩經を受持つた。翁の云はれるには詩經などは講釋すべきものでなく、誦讀すべきものだとあつて、英譯本の詩經を吾々に誦讀させ、翁は支那音で原文を朗讀された。これも一種の譯讀だが、當時は何んの感じも起らなかつた。

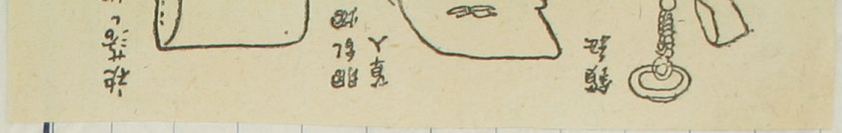
日本の和歌や俳句を英譯した例はいくらかあるが、洋人のも概して成功しない。想ひ出すのは角田竹冷が華甲の年賀に「點滴」と題する小冊子を知人に頒つたことがある。竹冷の女兒に相當英語を修めたものがあつて、父翁の俳句の英譯を試みそれを印刷したもので、妙齡の女子の譯としては相當出來てゐたが、父翁が若し英語を解したら、必らずヨセ〳〵と不滿を云ふたであらう。實は俳句の反譯は難中の難である。

自分共の東京大學にゐた頃、大學から「學藝志林」と云ふ雜誌を發行してゐたが、これには重もに西洋の理科法文科の論文を反譯して收めたが、譯者は皆大學生であつた。其文章は皆立派なものであつた譯は能文の人が譯稿を直す爲め備はれてゐて、それの手にかゝつたからである。こゝに吾等の懺悔話がある。

其頃の大學に給費の制度があつて吾等も給費生であつた。時の總理加藤弘之氏はある時學生に自立の精神をもたせたいと云ふので、十圓にも滿たない月額から二圓を減じ、其代り學藝志林に收める反譯をすれば十行二十字につき一頁五十錢の譯料を支給することとされた。尤も一ヶ月四頁即ち二圓が限度であつた。學生の中には眞面目に長文の譯をしたものもあつたが、理工科方面の學徒は筆無性で抵ねそれをやるものが無かつた。そこで吾等の金融策として、彼等の反譯權を貰らひ受け、本來ならば其の譯しかけの文を繼續して譯すべきであるのに、匆卒勝手なことを書きなぐつて、立どころに十枚位の原稿を作り、稿料を學校の會計から受取つてそれを酒資とした。こんなことを今追憶すると眞に慙汗至極である。



烟草入―「守貞漫稿」より



玉林晴朗著

文身百姿

五百部限定出版
木版手摺豪華裝
寫眞圖版七十餘
四六版三七三頁
定價金參圓
送料十二錢

發賣所
東京市神田區
通神保町二番地
文川堂書房
電話神田(25)二三六七番
振替東京四六七〇九番

內容目次

一、刺青風俗の起原
いれずみとほりもの　刺青の起原　日本の文身

二、起請彫と戀愛彫
入ぼくろの起原　遊女の常套手段　衆道の入ぼくろ　江戸の入ぼくろ　彫つたり消したり　浮氣者の標本　酒落本の世界　お閻命六三命　川柳と入ぼくろ　入ぼくろの型　德と命を共にする　駒の字のかくし彫

三、刑罰の入墨
刑罰入墨の起原　耳そぎ鼻そぎ　寛文天和の入墨　入墨は小盜　江戸の入墨　小供の腕に入墨　女の腕にも入墨　入墨で恐喝　入墨の千態萬樣　入墨を消した鼠小僧

四、伊達彫と威嚇彫
光閑の文身不可說　人威しのかひた　團七の腕に堪忍　寓意的と繪畫的　寛政享和の文身　水滸傳の影響　水滸傳の展開　馬琴北齋の水滸畫傳　水滸傳氣取り　史迹の龍と魯智深の花　武松虎退治の浪切張順　國芳の通俗水滸傳　芳年の美勇水滸傳

五、文身と江戸生活
江戸の町火消　文身と喧嘩　ガエンの文身　駕籠舁と雲助　力もちの文身　俠客と博徒　盜賊と文身　川並と船頭と馬丁

六、文身競艶今昔
江戸の變り種　明治後の變り種　お角お玉お竹お由　お糸お新お傳お源　芝兼彫兼お夏お千代　お國お君お若お妙　文身師の女房　芝居の文身

七、文身師と其の作品
江戸の文身師　明治後の文身競艶會　名人彫岩時代　久太、猫吉、彫あつ　櫓の次郎とその作品　名人彫兼時代　名人彫宇之時代　彫宇之の光榮　彫宇之の晩年　彫宇之の苦心　彫金と二代目彫宇之　彫國彫五郎其他

八、文身の圖柄と型
文身師の收入　千兩の文身　道具の秘密　筋彫とボカシ　化粧彫とみきり　ひかへ、胸割、えぐり　銘は大切　痛い、痛い　寒いが蚊が喰はぬ　圖柄の選擇　寓意的の文身　文身と取締

九、世界刺青風俗展望
琉球の刺青　アイヌの刺青　臺灣蕃族の刺青　臺灣刺青の傳說　夢占と鳥占　支那の刺青　南洋の刺青　ポリネシヤの刺青　マオリ、パプア、ラオス　歐米の刺青風俗　英國の刺青　米國の刺青　歐米刺青の型

住吉屋の煙管

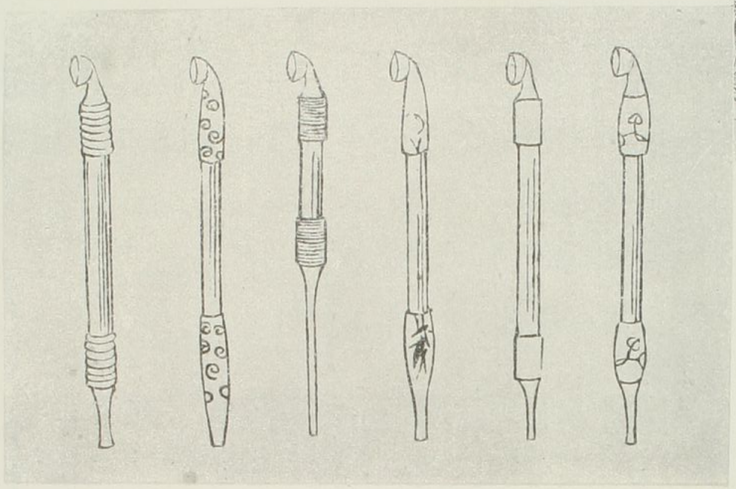
古城　榮

江戸時代の煙管の種類は、下谷池之端、住吉屋の煙管である。この煙管は、文政年間に住吉屋の「江戸師子」や、寶暦頃の「神田名物」や、「江戸師子」に、寶暦頃の「万物」や、「神田名物」や、「住吉屋」や、「村田」や、「陸奥大掌」や、「村田」は、住吉屋の出であること、しんちゃの名は、出であるが、住吉屋の名は、見えない。

に鳴らした。（「大日本煙草史料」第一巻、第二巻、第三巻）

なお時は、安永、寶暦の頃、寶暦の頃、寶暦の頃

イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ



江戸名物詩

住吉屋店頭

全八巻！豫約募集

學藝叢書

第一回配本

吉江喬松

自然の煉獄

大悟の年輪に見るやうな

第一回十月廿五日配本濟

體裁＝各卷四〇〇頁内外・題字＝尾上柴舟先生・装幀＝佐々木孔伯氏・製本＝特殊高雅・装丁＝用紙別誂・挿絵＝石版刷・紙質＝厚口本文用紙・ボール函入

定價＝毎月一回一冊（第一回配本十月一日配本）一ケ月一冊〇二錢

會費＝一ケ月一冊〇二錢・送料＝内地十二錢・海外二〇錢・郵税＝全額込金拾二圓

申込金＝無し・一時拂＝共一市内六〇錢

直接本社へ＝最寄の書店又は振替利用にて申込方法＝

閣議席上、有田外相から說明

同總領事歸任の上は

富るべく日支交渉も

上、特に南京會談は

ある、なほ須磨總領事が携

すから外務省で開かれ、須磨總

吉けふ 大聲明

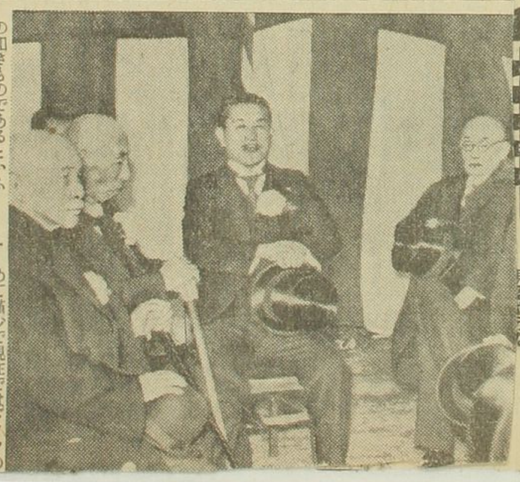
興論の背景と支持によつて國民

長、須磨南京總領事がこれが具

ること（二）須磨總領事の歸

表すること

交渉に臨むことが肝要で交渉の成否は一に支那側の態度如何によつて決することを重ねて注意したが双方の具體的意見にはなほ大きな



の如きものであるといふ

三、支那は從來米國に對しては主として銀問題を中心とする財政的援助を仰いで來たが工業及び一般經濟問題については米國の恩惠を蒙ること比較的薄く、

めて僅少で現在ではドイツのれにも劣り列强中最下位にあ現狀である、よつて王大使の米後は米國の對支投資熱を刺するため米國政府とも十分の渉を遂げ米國側官民一致の對

煙管

古堀　榮

んちうや市郎右衛門である。このことは貞享四年板の代記」等に見えてゐる。元祿十五年板の「增補江戸惣出てゐるが、住吉屋や村田の名は見えぬ。されば住吉此住吉屋は上野輪王寺宮樣御用の煙管屋として特に世料圖錄」第一輯一七頁二六六圖參照）一と頃盛んされ、帶刀御免で廣く諸侯邸に出入し、諸大名登城の程の勢であつたが、世運の推移は如何ともすべからず、屋も不幸、明治末に其跡絕えた。物詩」に、住吉屋を詠じた狂詩がある。

端仲町
得壽更長
張出世張
物であつたのである。
煙管を圖解しやう。
品、肩付で坂輪の肉太が特徵、諸大名大抵此形を使用好みである吾妻形も此形から出た。
出たもので、武家登城の際携帶したもの。
の好み。
し（幕末には講武所形）などと呼んだ。武術を練る旗下たまゝ中休みの一服を試みるに、一々お面をはづさず
ら、吸口を特に細長く拵へたもので、云はゞ不精煙管
樫校等の愛玩。吸口の寸度なのが特徵。
品。吸殼の拔け工合が良く、實行も良いので出世の名を
れるが、又一說には、伊勢松坂壺屋の安紙煙草入に添へかあつたのを、藏前の札差連の持物として上等向に作り
特に此名が付けられたともいはれる。併し出世は駄六、と同じく、可なり古い形であるから、此等の憶說はど
る。尙藏前出世は横蕊筋八本を特徵とする。普通の出世筋入。圖は脂返付の如く見えるが、普通品には脂返は無
首になつてゐる。これが所謂「住吉首」と云はれた手法

全八巻！豫約募集

隨學藝筆

澄明！學者の人生・社會・自然觀察！永遠に高く至醇な金字塔！

第一回配本
吉江喬松
自然の煉獄

大樹の年輪に見るやうな
吉川英治

第一回十月廿五日配本濟

第一巻・第一回配本　文學博士　吉江喬松　自然の煉獄
第八巻・第二回配本　文學博士　五十嵐力　我執轉々記
第二巻・第四回配本　文學博士　市島春城　鯨肝錄
第五巻・第三回配本　文學博士　山岸光宣　學窓夜話
第七巻・第五回配本　文學博士　本間久雄　わが鑑賞の世界
第六巻・第六回配本　政治學博士　五來素川　動亂の靜觀
第四巻・第七回配本　工學博士　中村吉藏　演劇獨語
第三巻・第八回配本　佐藤功一　匠房雜話

人格的な底光りの文學　安部磯雄

體裁　各巻四〇〇頁内外・美麗な木箱入・裝丁上製・特別高雅・佐々木孔伯・柴田柴山・裝幀・表紙・板倉・石井・版畫・上製・函入・口絵・別刷・本文・用紙・特製・ポ・ル・函入

配本　毎月一回一冊（第一回配本十月五日配本）
賣價　一冊一二圓
送料　一ケ月一冊（内地十二錢）
會員　五〇錢
送料　全海外一冊二〇錢
郵拂　二錢
申込方法　申込金拾二圓
郵拂料共無し
振替貯金利用にて直接本社へ寄書の書店又は

第一回配本
吉江喬松
自然の煉獄

第一巻・第一回配本　文學博士　吉江喬松　自然の煉獄
第八巻・第二回配本　文學博士　五十嵐力　我執轉々記
第二巻・第四回配本　文學博士　市島春城　鯨肝錄
第五巻・第三回配本　文學博士　山岸光宣　學窓夜話
第七巻・第五回配本　文學博士　本間久雄　わが鑑賞の世界
第六巻・第六回配本　政治學博士　五來素川　動亂の靜觀
第四巻・第七回配本　工學博士　中村吉藏　演劇獨語
第三巻・第八回配本　佐藤功一　匠房雜話

先づ内容見本

十一月三十日締切

發行所　東京市麴町區下六番地　東宛書房
東京・振替　二五六二四番
電話・九段　四七三九番

此の人と文とを敬慕する

辰野　隆

私は隨筆の自らなる姿を愛する。學者の持つ詩味、觀察を愛する。

五來素川博士については、遠く明治三十五年頃、時代の匿名で、博士は、東京上野の大學教授連を槍玉にあげて、「小說と隨筆」の小說の時代は、日露戰爭の頃、「博士と氣ちがひ」の題名で、東京帝國大學の文學者を攻擊した。

私は吉江博士の人と文とを敬慕すると共に、博士が佛蘭西に留學中の早稻田大學の講師を擔當したといふ因緣もある。

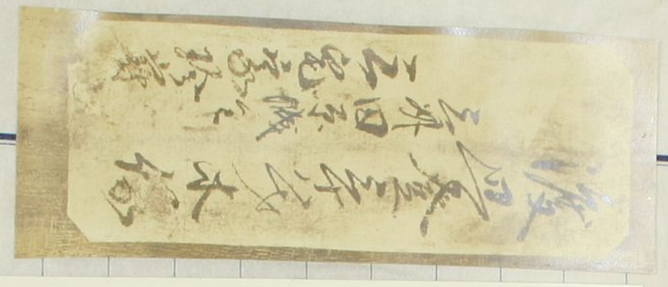
墓前執筆の懷古の思ひ出は、此の大隨筆集の出版に集中して、一卷一卷を私は正しく認識し、正しく價値づけ、廣く世に紹介したいと希望する。

圓熟の絕頂の良書

加藤　武雄

と、小說と隨筆との關係を考へる。小說は時代の反映であり、隨筆は人生の反映である。小說は、時代の氣持の受入れ方の違ひ、人生の愛惜し難い時代の心さへ抱く。

私は、書齋の正面に相模の沿岸の教育の俳句に、「今日は、圓熟の境地に達した人々の、自然の美しさを、正直に、素直に、自然の美しさを、自然の美しさを、自然の美しさを



家義治之尊像 木像
昭和十一年十月吉日
田原家傳来
榛原製

佐渡ケ島へ

紅葉の句碑

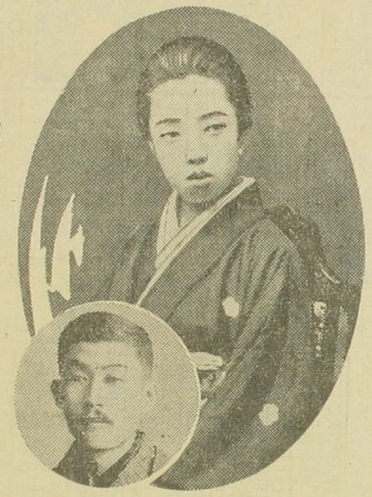
舞妓お糸も心づくし

【新潟發】「金色夜叉」で明治の文壇を風靡した文豪尾崎紅葉が、「續金色夜叉」の文想を練るため卅二歳の時明治卅二年の夏、ヒョッコリ佐渡ケ島に現れ小木町に滯在中、舞妓お糸と情熱を傾け盡した卅余日は、紀行文「煙霞療養」でありにも有名だ、紅葉山人が小木の夜景を口吟んだ一句

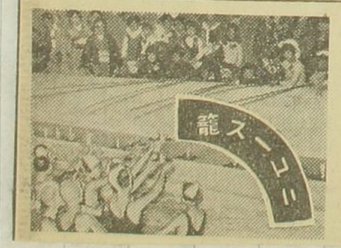
「月涼し橋かけたやと唄ひつゝ」

は佐渡の夏を代表する名句なりとして、前町長現小木教育會長篠原徹氏がその句碑を城山公園に建立する計畫を發表、同會が主體となりいまらで佐渡を訪れた名士三百余名から自筆の色紙、畫畫や寄付金を募集中だつたが、漸く畫畫五百余點にのぼつたので句碑建立基金を得るため近く即賣展覽會を新潟市で開催することになつた、寄付者中にはありし日の舞妓小糸さんが匿名で卅圓を醵金してゐる、奥床しい心情に篠原會長も非常に感激してゐる

今回の紅葉山人の句碑は七百余圓で小木町の名勝天然紀念物である枕石浦の玄武岩、枕狀熔岩に句を刻むもので、この計畫に賛同したものは廣田首相、永田拓相、津田青楓、白鳥省吾、河東碧梧桐、中山晋平氏などをはじめ各方面にわたつてゐる



人山葉紅と［糸お］思ひ出の［養療霞煙］



郵便物認可
納本發行
（毎月一回十七日發行）

九大臣
内閣
不動産
分割之
圖

に叙せらる。これより後、愈々畫をもつて中心の業務と爲すに至る、同年、東海道より東北を經て北海道に至る大旅行を果す。

□明治十五年（一八八二）四十七歳――室町中立賣の屋敷を購入。その後歿年まで其所に住す。

□明治二十八年（一八九五）六十歳――京都に勸業大博覽會開催され、選ばれて、書並に篆刻の審査員となる。

□明治三十三年（一九〇〇）六十五歳――京都市立繪畫專門學校設立、招かれて修身科の教師となる。

□大正六年（一九一七）八十二歳――帝室技藝委員に任命さる。

□大正七年（一九一八）八十三歳――息謙藏氏歿、享年四十六才。

□大正八年（一九一九）八十四歳――帝國美術院會員に推さる。

□大正十三年（一九二四）八十九歳――十二月三十一日、京都の自宅に於て歿。

習畫評

小室翠雲述

三國清光・新潟港燈臺　此作は燈臺や防波堤らしいものがあるので、それとなく狀景や物象を想像できるが、筆が單に騷がしく躍つてゐる丈けで、まだハツキリ物を捉へてゐないから、かういふ意味のない散漫の弊に陷つたものである。防波堤に激して奔騰する飛沫でも、岬でも遠島でも、一團の波動となつて北國らしい港の一場景――幻象として、作者の表現慾をそゝつたゞらうことは想像出來るがさういふ幻象を直觀的に表現し得るまでの技巧の點にくると、未だしの感がある。併畫などにも、わけの解らぬものを獨斷的に描いて獨りよがりに陷る弊はよく見かけることである。かういふ直觀的表現の試みは、試み自身として大變面白いことではあるが、それをする前に今少しシツカリした腦が出來てからでないと獨斷に陷つて了ふ危險が伴ふ。

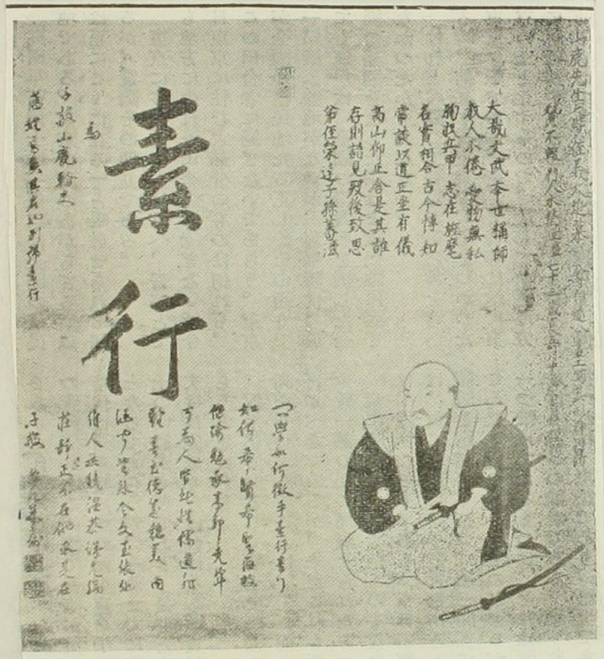
三松正夫・雪景山水　北海道の雪景を寫した絹本額面で、高い處から洞爺湖を隔てて蝦夷富士の稱ある羊蹄山（マツカリスプリ）のあたりを描き出してゐる。骨描きの筆は馴れてゐるが、湖面を帶の縞の如く直線で現した感じは、ワザとらしくつて實感に乏しい。それに、手前の岡に凭つた樹木の描方も一律に鹿角描法できれいに描かれてあるが、これなども湖面の縞の如くワザとらしい舊套的な遣り方で、實感に乏しい憾みがある。遠山の皴や草木の點苔の描方などはよいから、手前の樹木にもさういふ手法が加つたら、今少しく實感のあるものに成つたかも知れない。

川瀬光夫・百合　落着いた描方で、線の運びなぞも仲々シツカリしてゐる。色彩の感じも清雅で白百合の氣品を保つてゐる。

秋山宗夫・菊　淡墨の感じが今少し落着いて締りができてくると佳い作となると思ふ。

永田武治・牡丹　筆の運びが輕快で色彩も艶妍であるが、これも今少しく落着いてくると上達するだらうと思ふ。

萩原青陵・梅　清人の墨法に倣つて畫いたとあるが、渴筆と淡墨の配置がよく利いて梅の



山鹿素行先生肖像賛　朱舜水素行號記
（松浦伯爵家所藏）

鐵齋年譜

本年譜は主として、本田博士著『富岡鐵齋』により、二三の點に就き他書より補充せるものなり。

姓　富岡

名　初めの名は猷輔、後に道節と云ひ、最後に百練と改む。

號　鐵齋、その他、鐵人、鐵史、鐵崖、鐵鎗齋、鐵研齋、學古書院、蘿摩園、無倦、等の別號あり。

□天保七年（西歴一八三六）——十二月十九日、京都三條通衣棚、法衣商十一屋富岡傳兵衛の末子として生る。やがて十一屋沒落、一家夷川の佗住居に移る。鐵齋生れながらにして胎毒あり、內訌して耳を冒し、幼にして聾となる。

□天保十四年（一八四三）八歲——西八條の六孫王神社の稚子となる。その頃より女丈夫大田垣蓮月尼に愛せらる。

□弘化四年（一八四七）十二歲——蓮月尼の下に引き取られ養育さる。漢學を山本茉園、岩垣月洲、林鶴梁に、國學を野口正隆に、佛學を叡山の阿闍梨・羅惠慈本に學ぶ。又、尊王の志士春日潛庵の門に參し陽明學の講義を聽く。

□安政六年（一八五九）二十四歲——長崎に遊學、小曾根乾堂の許に身を寄す。更らに支那に渡らん欲して果さず、約半年にして歸洛。同年、聖護院村に私塾を開く。當時、藤本鐵石、梅田雲濱、賴三樹、並に土佐派の大家、浮田一蕙、冷泉爲紫、等と交遊あり。鐵齋の大和繪に對する造詣はこの交遊によつて得たるところ多きものの如し。

□元治二年（一八六五）三十歲——「稱呼私辨」の著あり。

□明治元年（一八六八）三十三歲——岩倉公に隨從して東上、間もなく歸洛、その後、中島氏を娶り、一女子を得て後死別、更らに後妻を娶られしが、母堂と折合惡しき爲離別。

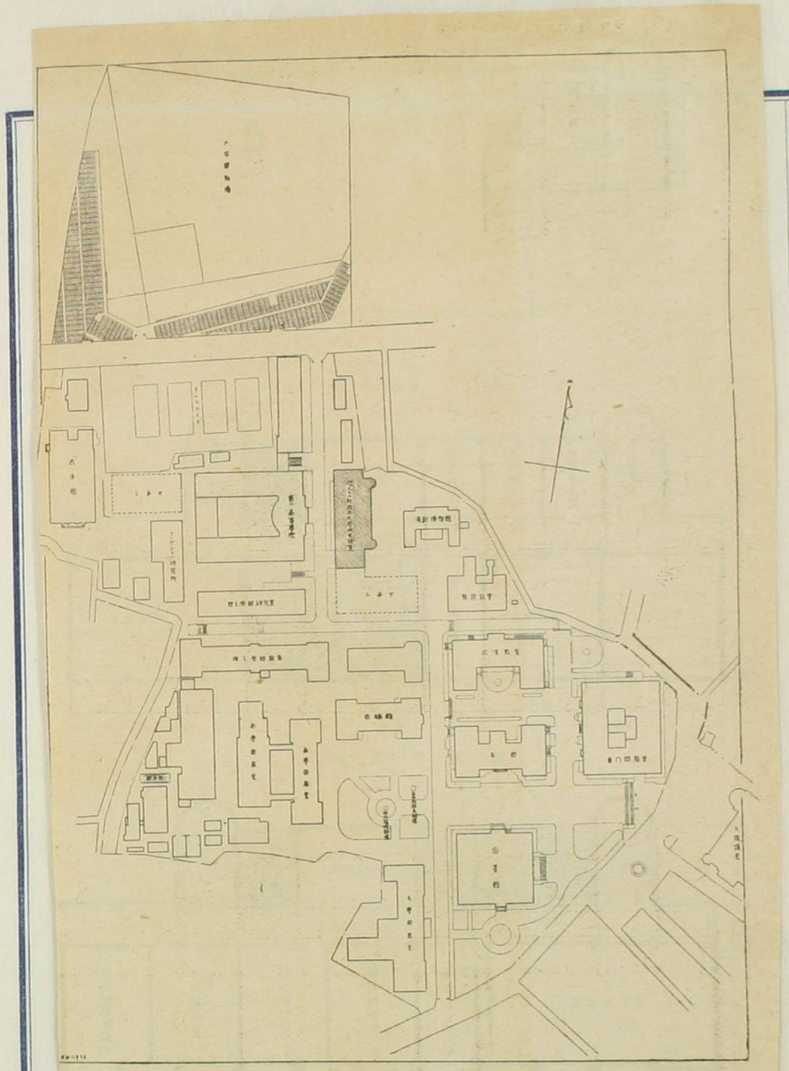
□明治五年（一八七二）三十七歲——佐々木春子氏を娶る。當時、御幸町に住居、私塾の收入によつて生計をささへたれど、貧甚しく、山中信天翁、畫によつて衣食することを勸め、ついにその方針を採るに至る。——但し畫は十年代より嗜めるものの如し——當時、先生の畫、聯落一枚二十五錢とか。その後、賴山陽の舊居、三木木の水西莊（山紫水明處）を借り受けて寓居す。息讓藏氏此處に生る。

□明治八年（一八七五）四十歲——蓮月尼歿す。淡川神社の權宮司となる。宮司とあはず、卽日辭任して歸洛、間もなく大和の石上神宮の權宮司となる。

□明治九年（一八七六）四十一歲——和泉の官幣大社大鳥神宮の大宮司に任ぜらる。當時、同社は全く荒廢、先生その復興を企て、自畫を氏子に配布し、その畫料によつて、數年の後、ついに意を果す。

□明治二十八年（一八八八）六十歲——大鳥神社宮司の職を辭し、京都に歸る。老母奉養のためなり。功により正七位

ここに耳掛け眼鏡の一種には相違ないが、奇態な形狀をしたものがある。其れは「錘眼鏡」(Gewichtbrille) と呼ばれて居るもので、レンズ框の兩側から出た二本の紐の末端へを錘を附け、紐を耳に掛け、錘を垂して、其重さと眼鏡の重さとを平均させて置くことに依つて、眼鏡を鼻の上に安全に、苦痛なく保持しやうと工風したものである。グーヴヰスは、錘眼鏡の一八三六年頃支那で出來たものの圖(第十二圖參照)を示して居るが、十九世紀に入つて、獨逸で再びこの型の眼鏡が製作されたらしくグレーフ教授は獨逸眼鏡製造の中心地であるラテノーで其時代製作されたものを所有し、掛け工合もそう惡くないと謂ふて居る。



——最近學園校舍配置圖——

昭和十一年十月 學報所載

標原製

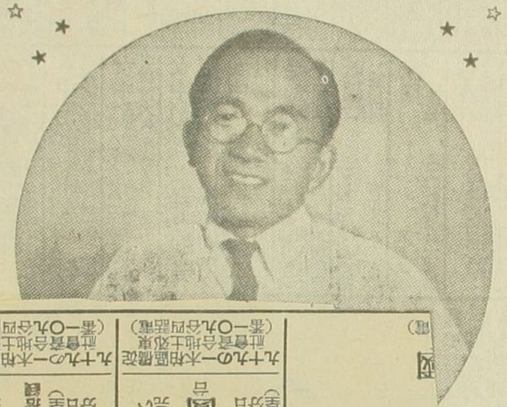
（第三種郵便物認可）　昭和十一年十月八日　（木曜日）

新星二つに〝君が代〟

天文日本最初の栄冠

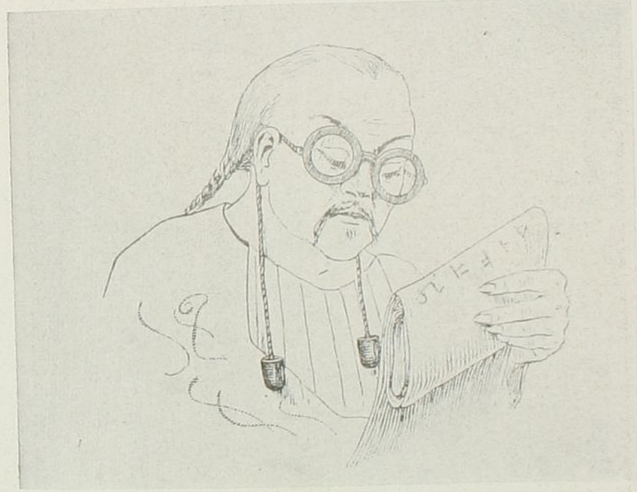
〝物干台の床屋さん〟第一位を確認さる

天文台　下保君にも折紙



今年の夏、北海道へ星の數ほど集まつた世界的長野麻衣子嬢の五味一明君（こゝ）が、理學者、衛の理學師

第十二圖



鍾　馗　鏡

東京堂出版　三三二一

花柳病予防法　東京府令第一七号

新星二つに"君が代"

天文日本最初の榮冠

今年の夏、北海道へ星の數ほど集まつた世界各國の天文學者の群にまじつて、日食見物に出かけて行つた長野縣上諏訪町のアマチュア天文學者、街の理髪師の五味一明君(二七)が、群がる碩學連を後に見事トカゲ座新星を發見した事は當時既報の通り、その後五味君のこの發見は、アメリカのハーバード大學レオン・キャムベル教授から表彰金メダルを贈られて先づ祝福されたが、各國天文學界の國際機關であるコペンハーゲンの天文中央局へ到着した發見報告によれば、イの一番はやはりわが五味君で、一九三六年六月十八日、十一時四十分五味一明（日本）第二位十六時十三分グルーウエル（露）第三位十九時三十分ゾーン（ギリシヤ）――以上グリニッチ標準時――となつてゐる、從來我國でもしば〳〵新星は發見されたが功名は常に外國學者に奪はれたり、或は屆出が遲れたりして、名實共に發見者となつた者は皆無であつたが、五味君のこの功名で始めて自他共に許す新星發見者が日本から生れたわけだ、日本天文學會ではこの五味君の榮譽を齎く學界の喜びとしようとの議をすゝめ、今月末の天文學會總會にかけて五味君を表彰する事となつた、尙この際やはり今夏七月十七日夜八時半三鷹村の東京天文台で同台員下保茂氏(二七)が口徑二十センチの望遠鏡で發見した小獅子座中の新星（光度約六等）も我學界の誇るべき新發見であるといふので五味君と同じく表彰されるはずである【寫眞五味君】

物干台の床屋さん"第一位を確認さる

天文台 下保君にも折紙

◇東京天文台長關口鯉吉博士は語る

五味君と下保君の發見が世界の誰よりも早かつたといふ事實が確認された事は全く日本天文學界最初の事で大いに慶賀すべきだと思ひます、天文學會の今度の總會で兩君表彰の決議をする筈で、その時表彰方法その他を協議するのでせう、新星の發見はその星が丁度生れた時から生成の輝きの瞬間を捕まねば意味がないので、全く努力と好運の賜です

夜の恐怖から

天晴れ天文學者に

【上諏訪電話】殊勳のアマチュア天文家――長野縣上諏訪町の床屋さん五味一明君(二七)は獨學で十三歳のときから天文に精進した努力が今日實を結んだものだが天文に興味を有つに至つた同君にこんなエピソードがある

生れながら病弱で少年時代は極く臆病者で夜が恐ろしくてたまらずいつも夜がこのまゝ明けなかつたらとの恐怖に襲はれたことも屢々であつた、しかし夜のあることは地球が廻るからだと云ふことを聽かされそれ以來星見たさの一心から齧りたてられたといふ

なほ同君は今でも晝はバリカンと剃刀を持ち全くの床屋さんだが夜は店の物干台に望遠鏡を持ち出し觀測を續けて居る、五味君は語る少年時代から東京天文台の神田茂先生が親切に指導して下され計算など間違つた幼稚な觀測を送つたときも先生の奥さん迄が赤いインキで訂正したり說明したりそれから十年余も自分の子の樣によく指導して頂きました神田先生夫妻があつたからこそ今日になつたものと感謝して居ります

（第四巻第四号）

前代未聞の蚊の大群！

世にも怪奇な事件が突發

オランダの一部を占領

▽……日本内地では、秋風とともに蚊軍は一齊に退却したといふのに、所が變れば、これまた意外、今や蚊軍の逆々ならぬ猛襲に「どうしたらいゝだらう？」と大騒ぎをやつてゐる地方があります――それはどこ？オランダのジイデルゼエ地方です

この地の蚊軍猛襲はよほど前から初まつたことゞすが、近頃殊にすさまじく、そのために人間の生活が蚊軍のために占領されたといふ位の大騒動――その物凄さはまるで〝バッタ〟が黒雲に化けて現れたとでも形容しなければ我々には想像がつかないほどださうです

▽……處で問題はその原因です、十年前に、海の一部を湖水にするために、海を二つにわる土堤を造つたことがありました、この湖水の水は海と離れてから段々とその化學的成分が變化しはじめ、今日では、すつかり鹽分が消え失せて蚊の發生にはもつて來いの狀態になつたといふのが、この騒動の發端です畫間のうちから兩々押し寄せる蚊の大軍、人々は全くその襲撃に疲れ切つてゐるさうです

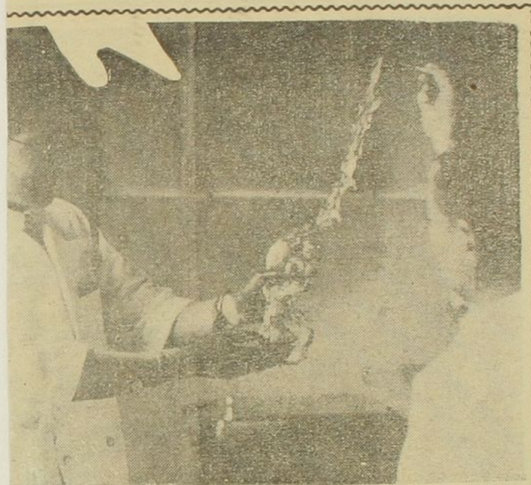
▽……さて、その被害狀況をしらべて見ると、ジイデルゼエの騒村の住民達は一歩も外へ出られず、安息をつきながら家の中に閉ぢ籠つてゐなければならない、窓には蚊軍がうなつてゐるといつた有樣です、この寫眞は家の内部から外部の蚊軍を撮つたものですが、樹木まで蚊のために真黒にかすんで見えるといふのですから、その有樣が想像されるではありませんか、それから騒に面したあたりでは自動車の進行が困難となり、ほんの二三分でもすると蚊がモーターの中へ入つて故障を起す、そのためにラヂエーターの上に蚊捕網をかぶせなければならないといふ厄介まです、それがためオイル・ステーションではどこでも〝蚊掃除〟といふ新しい仕事がはじまりました、人間界では、これほど大騒ぎをやつてゐるのに、家畜の聖といふ聖には一面にとまつた蚊が知らぬ顔で、のんきさうに日なたぼつこをやつてゐるとは皮肉ではありませんか

寫眞說明 オランダを騒がせてゐる蚊の大襲來▲蚊の集した窓▲自動車はモーターに飛び込む蚊群のために運轉不能に陥つてゐる

十三の男の子が赤ん坊を産む

昨日知命堂病院で

齒は四本頭髮一尺



十三歳の男の子が赤ん坊を産んだといふ空前のニュースが高田市知命堂病院から全世界の學界に提供された、東頸城郡大島村大字仁上角藏氏二男泛田信ノ(も)君は九月十八日腰から腹痛を感じ三十日高田市知命堂病院を訪れ診察を依頼した、中澤博士以下によつてレントゲン檢査を行つた結果、假然醫學界空前の奇蹟が生れた。といふのは少年の左方上腹部の中に嬰兒(畸形腫)の骨格像が認められたのである中澤博士は此の嬰兒を摘出すべく一日午後三時すぎ切開に術々施した、見事摘出されたのは重量約三百五十匁眉毛、目、鼻、口(齒四本あり)手足(爪あり)頭髮(一尺以上)半身を備へた性別判然しない畸形兒だつた、そして生れて直ぐ死んで了つたが『男が子供を産んだ』といふので醫師看護婦はもとより、白いベットの中でうこめいてゐた他の患者までが『男が産んだ赤ん坊を見せて貰いたい』といふわけで參觀人が引ッ切りなしの有樣である　寫眞は摘出された畸形兒、ピンセットでトげてゐるのは約一尺に伸びてゐた毛髮、ピンセットを持つのが中澤博士

こんな成育兒は

學界に前代未聞

少年の腹中に十三年

中澤博士語る

少年が産んだ嬰兒、半ば疑ひを抱いて知命堂病院に中澤博士を訪ふ

『少年の腹にどうしてそんな嬰兒が宿つたのですか』

『左後腹腔に發生した畸形兒です、少年信之君が生れる時、その体内へ人間としての細胞が迷ひ込んでそれが次第に發育したもの、謂はば先天性のものです、十三年間かゝつてこれまでになつたものですよ』

と語り、更に記者の質問に答へた中澤博士の談は次の如くである

双生兒が一方の体内に入り込んだ爲め嬰兒期の体の一部分が手術によつて摘出されるといふ事は稀にはありますが今回常屆殆で摘出したやうな『成育兒の外見を具へてゐる』のは學界に未だその例はありません

尚ほ同博士は醫學的に興味ある該問題について研究を進めて論文を提出する事になつた

みさご

第四號

鍛錬

春城

冶金界に鍛錬が大切となつてゐる。一片の鐵も金に化すと云ふも鍛錬の然らしむる所で、決して寓言ではない。マサカ金と化さないけれども、金より遙かに價高いものを作り出すのは鍛錬の作用に據るのである。或る專門家に聞くに、原價五圓の銑鐵を或る程度の鍛錬を經れば十五圓の釘となり、更らに鍛錬を經れば三千圓の針となり、尙更らに高度の鍛錬を經れば、鋼となる。これが萬金以上のものだから、金よりも更らに貴い。これに見ても鍛錬が冶金に如何に大切であるか、容易に理解がつくであらう。日本刀は日本特有のもので、如何に科學が進んでも分析作用で之を作ることは不可能とされてゐる。實は鍛錬は力＋Xで超科學であるからの事だ。此のXは何んと云ふべきか一種神祕のものである。全體刀に大切なものは刄金であつて、斷れ味の利鈍も繫つてこれにあるが、原料は何うと云へば玉鋼で、これを幾十回も鍛へた結果が刄金となるのである。斯く云へば簡單な工程らしくも聞へるが、實は頗る複雜のもので、原料を幾度も碎いたり、折つたり、重ねたり、割いたりして、十回二十回或はそれ以上鍛錬を經て初めて刄金となるので、其の勞苦は涙ぐましいものである。此の工藝には古來峻嚴なる作法があつて、工場には一切の不淨を避け、工人は齋戒沐浴して精神の統一を圖り、一身不亂で無ればならぬとされてゐる。此工場は神聖なる靈場で、宛から精神の修養場と一般、工人の精神が徹底せねば其の鍛錬は成らぬとされてゐる。云へ換へれば、工人の精神が鐵に乘り移ねば鐵を靈化し得ないとされ、種々の祕傳はあるにしても最も大切な條件はこれであつて、精神の無い刀は死刀である。此意味に於て刀は確かに活物である。云ふまで終始敬虔の禮を拂ふのも此故で、佛師が佛像に禮を拂ふのと同樣である。工人がもなく本邦は刀を以つて神器の一とし、之を以つて神體ともしてゐる。國體と一致する所も亦實には日本の魂が籠つてゐる、此點他國の追隨を許さぬ。

化物たばこ

古堵　豪

眞の化物は煙草に切り出せ」化物たばこ

若分けて賣出した時、夢らし情好きの人々が

此の化物たばこ」と

はれ出で、國國の人々を驚かし、呆然たらしめ、

勝鬨等に

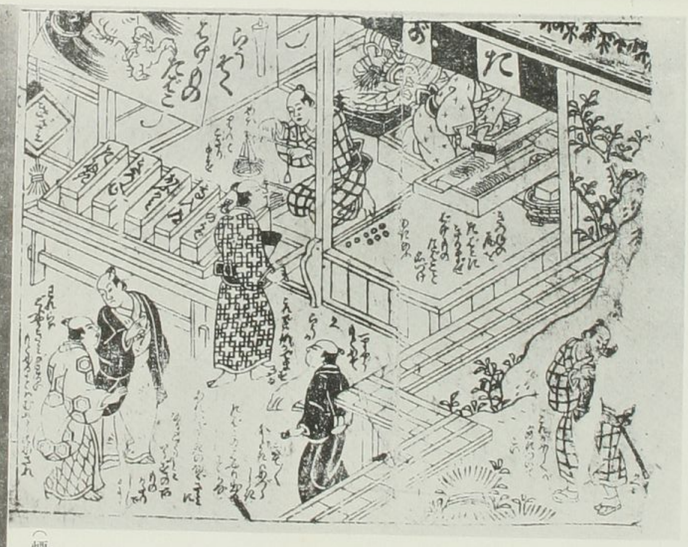
煙草、刻み、

は、

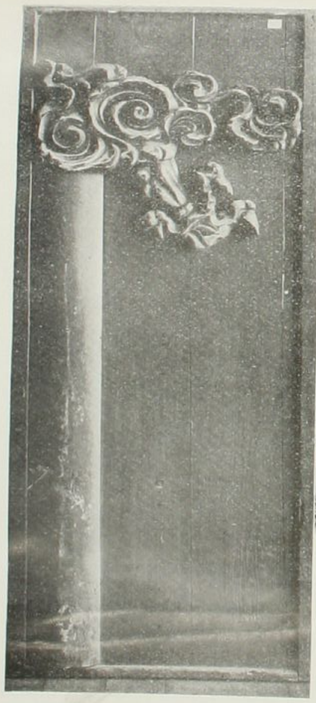
煙草は、

は、

は、

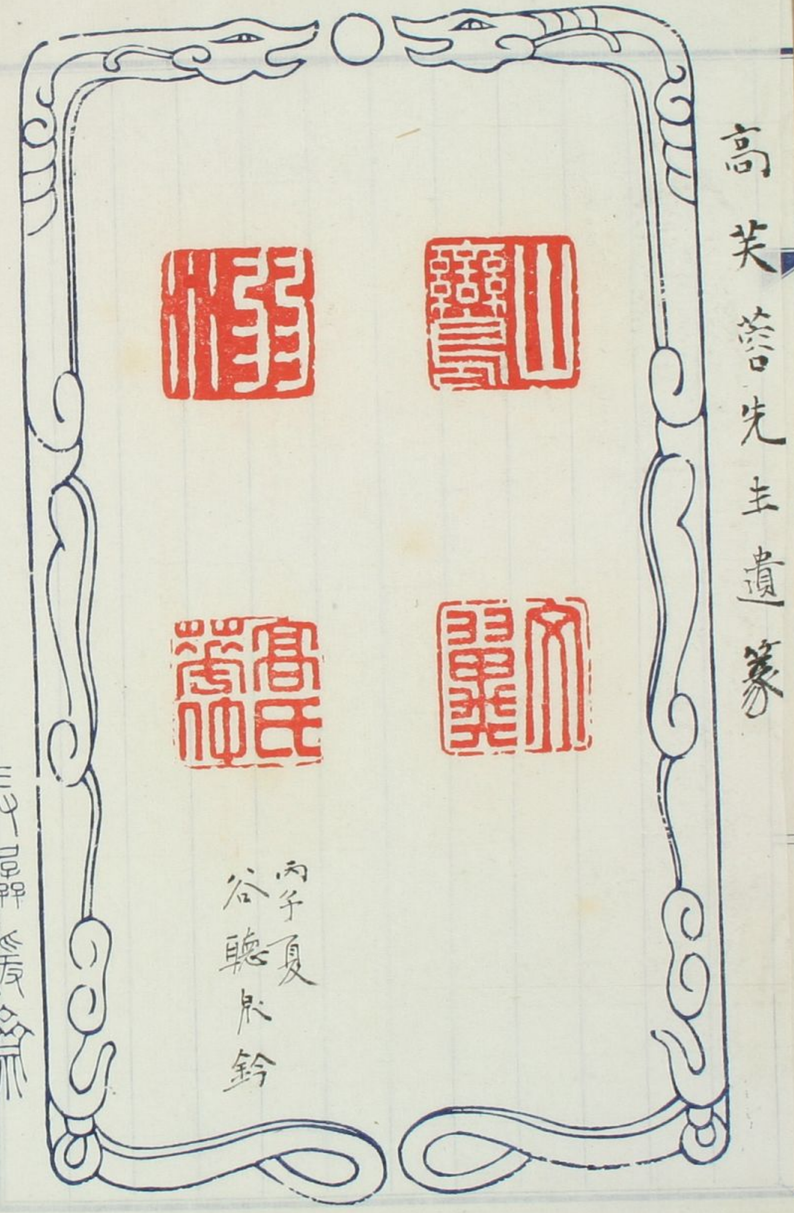


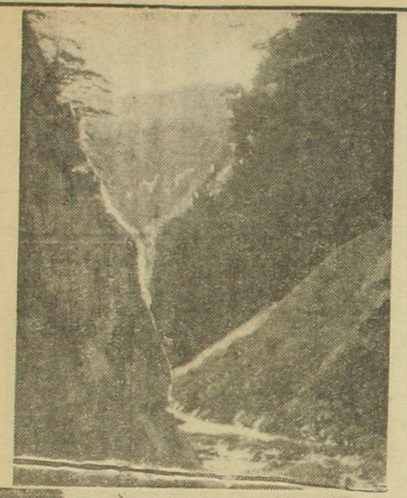
化物たばこ屋

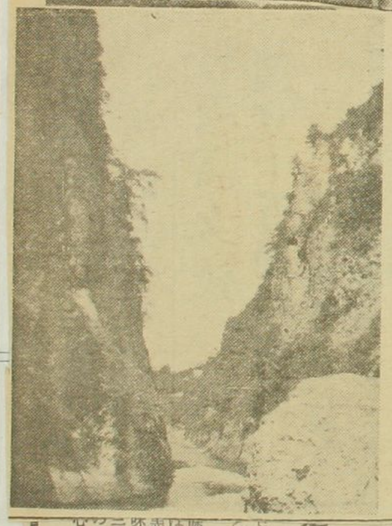


鬼片腕看板

（煙草展覽會圖錄所載）







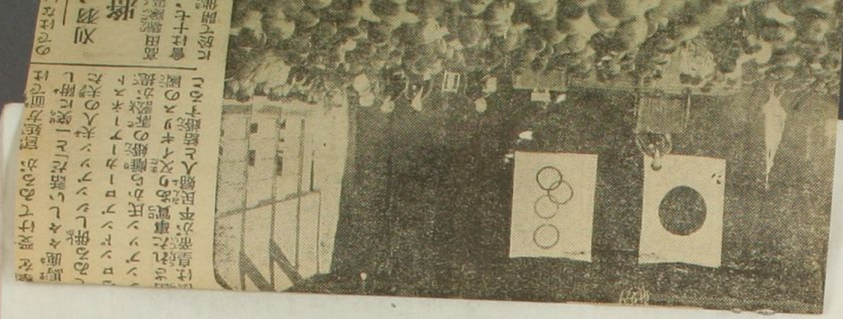
映畫に美術に

天然記念物指定決る

今夏文部省調査員脇水博士の入峡により我國峡谷美の王座に迫るものとして紹介されて來た中魚沼郡倉俣村から南魚沼郡三俣村への清津峡、七ツ釜は數日前内務省内名勝地天然記念物調査部員に於て兩所を指定することに決定月末總會で正式決定する運びとなつたが最近帝國日本畫兒玉畫伯他一名の審査員が入峡しその美觀に感ぜられスケッチブックを使ひ果し小出温泉から有り合せの半紙を貰つて遂その感激にブラッシを走らせて行き明年は十餘名の審査員を帰同すると謂りP、C、L映畫社でも近く撮影にこの仙境を背景で行ふことになり山岳寫眞家塚本閑治氏も入山の用意がある等その他ハイカーの注目は一齊に清津峡へ集まつて來たが紅葉は月末から十一月始めが最盛である（寫眞入口瀬戸峡と第一關門の紅葉美）

ほへらわ
ン水勢に
けつた甌
昭安山岩
て特殊
峯上、風
凹の指定
柱狀節理
の山岸を
又峡谷の

際り人ら
は實に立
部に比
跡があり
二日の文
の人も世
心に私達



世に出る七ツ釜

信越境に埋れた安山岩の奇勝

愈よ天念記念物に指定

信濃川の最大支流清津峡谷に流れ込む七ツ釜瀑が文部省の委囑を受けて、去る八月十八、九の兩日に亘つて實地調査に赴いた東大地質學科脇水鐵五郎博士の報告に依つて來る十月三日、天然記念物として保護されるとなつた、又清津峡は新潟縣と長野縣の境笹山（二、一四五米）の南山麓を東西に流れる碧潭で幾多の奇勝を持ち乍ら今迄名稱一つ與へられなかつたのが同博士の苦心の命名に依つて、七ツ釜の名と同時に天然記念物として同じく來月三日の名稱決定部會に依つて採決されることゝなつてゐる、これに伴つて山麓深く人に知られず埋もれのまゝに任された清津峡の小出村と七ツ釜の田代村の兩山村が新く世に知られるとなり菊芝から次第に救はれるであらう明の喜びに打ちふるへてゐる天然記念物を待ち焦れる田代村の七ツ釜は昔から「田代の七不思議」と傳へられたもので昔の瀑壺が長年月の間の水勢に侵蝕されて連續的に七個の釜を作つた甌穴で溪流の兩壁は珍らしい典型的安山岩の柱狀節理で、その兩者が相俟つて特殊な風致と浸蝕狀況をなし、地質學上、風景上、研究の對象となる點で今回の指定となるわけである

又清津峡は小出温泉付近の大きい柱狀節理を組に第一、二關門、その右手の山岸を「万壽峰」、その山腹を「層雲壁」、又峡谷の中心は節理が殊に判然と美しいので「立雲峡」等立派な名稱が付けられることゝなつた、當の脇水博士は語る

七ツ釜、清津峡は共にまだ人が餘り入らず大分荒れてゐますが柱狀節理は實に立派ですね、花崗岩で出來てゐる箱根に比べて羚岩、凝灰岩である點細い味があります、名稱も私が凡て付け來月三日の文部省の部會で決定します、部落の人も世に出たら嬉しいせう、隨分熱心に私達を世話して呉れました

高芙蓉先生遺篆

丙子夏 谷聽泉鈐

九月廿十九日の都新聞

娘義太夫と正岡子規

その晩年の一情景

高濱虛子氏談

マイクの横

本日大阪の阪東壽三郎さんが高濱虛子作の「正岡子規」を物語として放送するので、これに因み、作者虛子氏に晩年の子規の病床生活のお話をお聞きしました、虛子氏は、子規の最期まで枕頭に侍して看護につぐされた方、この短い思ひ出話の中にも、何か涙なしには聞けぬ實感があふれて居ります

◇

正岡子規は晩年根岸にある加賀前田家別邸内にある貸家で病を養つて居ました、その病といふのは彼が日本新聞記者として日清戰役に從軍した際受けた傷がもとで、結核性の脊髓カリエスでした、腰の創口から時々膿が出てその苦痛は非常なもので

の痛みを忘れ、その間に當時の俳理、歌壇に對して痛烈な罵倒の筆を揮つてゐました、瀕死の病床にあつてもなほ得ぬ仕事を成し遂げた彼の精神力の一生かゝつてもなほ得ぬ仕事を成し遂げた彼の精神力の強さには今考へても頭の下る思ひです、又彼は病の無聊を忘れる爲に持つた事もない繪筆を採つて枕頭の草花を寫生してゐましたが、泡に悲愴なものでありました

私達弟子どもが集まつて、何んとかして彼を慰めたいものと相談した結果十七、八になる少女義太夫を連れて行つて「三勝半七」を語らせたことがあります、その時分は彼の視力も弱くなつてランプでは暗いといふので行燈を灯してゐましたが、その薄暗い光りの下で袴をつけ見臺の前に臺を張る娘の姿と、眼を閉ちて耳をすます子規の姿が今でも私の頭にはつきり殘つてゐます、この事は今度BKから依頼された物語の中に書きました

とにかく死をはつきり意識して「死がその隣子の所まで來てゐるよ」とまで云ひながら、持ち前の強い精神力で俳道の革新の爲に精進した彼の晩年は、涙なくして語れない所であります（寫眞は虛濱虛子氏）

〔重美〕木米筆

山水 紙本淡彩

表裝桐箱付 金八十圓

木米は青木氏、中年耳聾して自ら聾米と稱し、製陶を以て一世に鳴る。畫技に於ては堂々大家に伍し、筆法の酒脫奔逸にして而かも畫品の高雅なるを以て重ぜらる。山陽竹田等の推服する所、此圖殊に傑作。

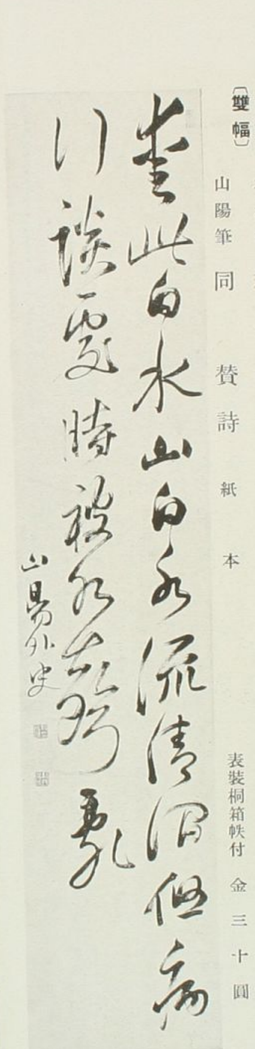
〔雙幅〕

木米筆 秋景瀑布 紙本淡彩

山陽筆 同 賛詩 紙本

表裝桐箱帙付 金七十五圓

表裝桐箱帙付 金三十圓



榛原制

昭和四年一月三日第三種郵便物認可

東京日日新聞

蘆花十年の命日に〝思ひ出の家〟寄付

愛子未亡人の美擧

富蘆花逝いてから今年は十りけふ九月十八日はその命るので蘆花逝いて以來、一く庶下千歳村粕谷の「思ひ」にある愛子未亡人はこの熟し千歳村の家を永遠にのいとの願から今度、その蘆花翁生前に愛用した什器書籍を全部東京市に寄付すを決意、正式に市に申出て市ではやがて千歳、砧兩村が世田谷區に編入される矢先にこの思ひがけぬ話に大喜び、早速同日朝、牛塚市長は前田監査、宮川保健兩局長、井下公園課長等を

伴

って、わざ〳〵千歳村の富家へ出かけ愛子未亡人に心からの感謝の言葉を述べ、邸内を見せてもらつたが

邸

屋敷の面積三千七百坪、家屋は四棟あつて、その邸内には多くの門下生が全國の珍らしい石、ゆかりの樹木を贈つてくれたのを植ゑたのが今は美しく繁茂し

かつて約三十年前、蘆花翁が武蔵野の自然をめでて、こゝに居を卜した當時の自然美そのまゝをうつして『文豪臨終の地』としても記念すべくこよなき靜かな住境をなしてゐる、この

邸

と共に贈られる藏書は三千余冊といはれその生前愛讀されたものばかり、市では愛子未亡人の意に出來るだけ副ふやうにと兩村が市内に編入に際し、そのまゝに公園とし文藏書等はこの邸内に記念文庫を新築して一般市民に開放、同時に愛子未亡人の好意に酬いるため、近くの空地を選んで新たに家を新築して贈ることになる模様である【富蘆はその家と愛子未亡人】

記念公園を

牛塚市長談

牛塚市長は語る

かねて井上敬次郎さんから一寸お話があつたがそのまゝとなつてゐたところその十周年の命日に當り正式にお話があつたので

喜

んで拜見に出かけた、市としては新たにその藏書の文庫を建て、記念公園として文豪の名と共に永久に保存したい

一十和昭

刊之東京日日新聞

規子岡正の閑病（昭和三十三年一月廿日撮影）

昭和三年一月廿日

正岡子規の晩年

阪東壽三郎さんが物語化

高濱虛子氏が寫せる

【〇二・八後】

極楽鳥
【後七・五〇】
コロナ・オーケストラ

樣原製

萬八千百十六號　（第三種郵便物認可）

武藏野に床し秋き！

蘆花十年の命日に〝思ひ出の家〟寄付

愛子未亡人の美擧

文豪德富蘆花逝いてから今年は十年となりけふ九月十八日はその命日に當るので蘆花逝いて以來、一人淋しく府下千歳村粕谷の「思ひ出の家」にある愛子未亡人はこの命日に際し千歳村の家を永遠にのこしたいとの念願から今度、その家屋と蘆花翁生前に愛用した什器類と、書籍を全部東京市に寄付することを決意、正式に市に申出て來た、市ではやがて千歳、砧兩村が世田谷區に編入される矢先にこの思ひがけぬ話に大喜び、早速同日朝、牛塚市長は前田監査、宮川保健兩局長、井下公園課長等を伴つてわざ〳〵千歳村の德富家へ出かけ愛子未亡人に心からの感謝の言葉を述べ、邸内を見せてもらつたが

邸

屋敷の面積三千七百坪、家屋は四棟あつて、その邸内には多くの門下生が全國の珍らしい石、ゆかりの樹木を贈つてくれたのを植ゑたのが今は美しく繁茂しかつて約三十年前、蘆花翁が武藏野の自然をめでて、こゝに居を卜した當時の自然美そのまゝをうつして「文豪臨終の地」としても記念すべくこよなき靜かな佳境をなしてゐる、この

邸

と共に贈られる藏書は三千余册といはれその生前愛讀されたものばかり、市では愛子未亡人の意に出來るだけ副ふやうにと兩村が市内に編入に際し、そのまゝに公園とし文藏書等はこの邸内に記念文庫を新築して一般市民に開放、同時に愛子未亡人の好意に酬いるため、近くの空地を選んで新たに家を新築して贈ることになる模様である【富眞はその家と愛子未亡人】

記念公園を

牛塚市長談

牛塚市長は語る

かねて井上敬次郎さんから一寸お話があつたがそのまゝとなつてゐたところその十周年の命日に當り正式にお話があつたので

喜

んで拜見に出かけた、市としては新たにその藏書の文庫を建て、記念公園として文豪の名と共に永久に保存したい

一、寫眞　二枚
一、大坂番附　一枚
一、團扇繪　一組
一、俳優三十六句撰、外　三冊
一、影芝居第十一號　一冊
一、十役者教訓抄奇談　一冊

山崎裕康殿

一、寫眞帖　三冊
一、寫眞　十三枚
一、寫眞（大形）　三枚

松本さだ殿

一、踊り手拭　先代左團次使用のもの　一本

藤浪與兵衛殿

一、「丸橋忠彌」の大刀　一振
一、まんぢゆう笠　一個
一、赤合羽　一着
一、叺莫入キセル付　一個
一、吉原下駄　一個
一、鴨居　一本
一、「いかけ松」の荷天秤付　一荷
一、「大盃」の大小刀　二振
一、大盃　三個
一、木剣　二振
一、「谷風」の大刀　一振
一、「碁盤忠信」の太刀　一振

て大阪へ乘込み角座へ出勤し兩優の競爭となり道頓堀を騷がした時の兩座番附

一、先代左團次の考案せる佐野次郎左衛門のかつら二個

城戸一郎殿

一、明治座筋書　四冊

桐生織物同業組合殿

一、錦繪　一枚
一、錦繪織姫繻子　三枚
明治二十七年五月桐生の織物會社が始めて織姫繻子を製造した當時宣傳のため先代左團次を煩はし織姫神社を祀る白瀧姫の演劇興行の時のもの
一、寫眞左團次一座奉納の天水桶
前記の興行大當りで左團次等が明治二十八年六月桐生の織姫神社に奉獻したもの

桐生富士瓦斯紡績株式會社殿

一、先代左團次初演織姫繻子の圖額　一面

木村良恭殿

一、寫眞　七枚

水谷幻花殿

一、瓦煎餅の型　先代左團次文字入り　一枚

清水さだ殿

一、明治座芝居茶屋權利株券（明治廿六年のもの）一枚

（火曜日）　東京日日新聞

曉の街に道路奉仕
何と！本多博士
異樣な姿で塵とり片手に
辻々に淨めの小箒

謎の翁老は

東天の白みわたるころ毎朝のやうに澁谷區櫻ヶ丘、鶯谷、大和田、南平台邊の辻々を頭には異樣な笠を冠り白い、だぶだぶのシャツを著込んで庭掃き用の小箒と小さい塵取を手に次から次へせつせと路上のごみをはき取りながら廻つて歩いてゐる

老人　がある、いつしか付近の人々の話題にのぼり、このごろではこの奇特な老人に刺戟されてこれを眞似る者が續出する有樣に、明け放れたこの邊一帶の路上には塵一つなく掃き淸められてゐるといふ、この街路淨化の先鞭をつけた老翁が昨今になつて誰いふとなく帝大名譽教授林學博士本多靜六翁（ことわり町民はひどく）

恐縮　してゐる、記者はこの朗かな聲を聞いて十四日午前四時澁谷櫻ヶ丘の博士邸付近に待つてゐると果せるかな曉闇の中から天鵝絨下りの檜笠のやうな笠をかぶり粗末なシャツを著込んだ老博士が小箒と塵取をブラ下げて！コ〳〵現れた「先生お早う、御精が出ますね」と聲をかけるや、老博士けげんさうにしてゐたが

◇…お掃除姿の老博士本多さん…◇

「やア新聞社か、見つけられて困つたね、實は人のためでなくて自分の樂しみなのぢや、運動になるからのう、若い頃はこんな事をして

運動　にするのは遠慮もあつたがこのごろではもう遠慮氣兼ねもないからやるのぢやよ、昔とつた杵づかだから腕はたしかだよ、これをやつた動機かね、これはね、初め國立公園協會の事務所を誰も出勤しない時に行つてサツサと掃除したもんだが、それでは若い給仕や小使の仕事を奪ふ事になるので六月から競爭相手のない町内掃除に轉向したものさ、はじめは暑いのと夜中だから素ッ裸でやつたら怨ちお巡りさんに「コラコラ」とやられた、それからこんな簡單な服裝でやつてるよ、ハッハッハッ」

箱根塔之澤溫泉　元湯　環翠樓　電話塔ノ澤三番

會期　自昭和十一年九月一日
　　至昭和十一年九月九日

先代左團次追善展覽會出品目錄

日本橋三越本店ニ於テ

主催　都新聞社

大パノラマ場面

一、花菖蒲慶安實記
一、千歳曾我源氏礎
一、蔦模様血染御書

舞臺模型

先代左團次當り狂言十場面

後藤又兵衛（春日社頭）
大　盃（試　合）
川中島（信玄陣屋）
鑄掛松（兩　國）
惡源太（紫晨殿）
碇知盛（大物浦）
籠釣瓶（大屋根）
村井長庵（赤羽橋）
島　衛（招魂社）
水滸傳（瓦罐寺）

先代左團次追善展覽會記念
現代人氣俳優揮毫色紙　數十枚

各家御秘藏品

市川左團次殿

一、火鉢　先代左團次樂屋にて使用のもの　一個
一、鏡臺　右同　一個
一、化粧道具　右同
　刷毛、つけひげ、皿、まゆげ、兎足　五個
一、きせる　丸橋忠彌に使用のもの　一個
一、財布　同　一個
一、煙草入　先代遺愛品　一個
一、つゞら形手箱　樂屋にて使用のもの　一個
一、大入帛紗　舞臺で使用のもの　一枚
一、帛紗　五枚
一、先代遺愛の小箱　一個
一、脚絆、足袋　先代左團次富士登山の節使用のもの　各一揃
一、先代遺愛の蒔繪火鉢　一個
一、「細川血達磨」軸　一幅
一、「高野長英の圖」　一幅
一、卷煙草入　先代左團次樂屋にて使用のもの　三個
一、象牙パイプ　先代遺愛品　一個
一、紙入　同　一個
一、朱塗の手箱　書拔入れに使用のもの　一個
一、寫眞　四十三枚
一、寫眞入額面　二面
一、黑塗うがひ椀　定紋入　一個
一、書類　十二枚
一、是眞の屏風　默阿彌より贈られしもの　半双
一、辭表　一枚

河原崎權十郎殿

一、書類　八枚

石井國之殿

一、常磐津稽古本「戻橋」左團次初演のもの　一冊
一、見立番附　五枚
一、三府役者改名末榮　一枚
一、諸藝東京自漫見立番附　一枚
一、三府俳優力競　一組
一、新富座當細見　一枚
一、各座俳優給金位附　一枚
一、新富座番附　清元延勝の女形として出演　一枚
一、錦繪　八組
一、新富座辻番附　三枚

市川宗家殿

一、市川宗家總代　先代左團次印形　一個
一、團菊、左勸進帳額面　一面
一、技藝師範狀　一枚

堀內鶴雄殿

一、先代左團次寫眞　一枚
一、番附　伊勢古市長盛座　二枚

鳥居言人殿

一、川邊御楯筆　獅子の圖　一幅
　明治廿七年一月明治座に於て先代左團次石橋を演ぜし折本圖により獅子の「縫ぐるみ」を製作使用せり

川尻清潭殿

一、小箱　先代左團次遺愛品　一個
一、大入ビラ軸　一幅
一、丸橋忠彌書下し六十年記念番附　一枚
一、久松座土間定價表　一枚
一、千歳座明細圖　一枚
一、番附　十枚
一、筋書　四枚
一、双六　一枚
一、後藤又兵衛衣裳　一揃

河竹繁俊殿

一、横書本　二種　九冊
一、臺本　十種　卅五冊

金山甚太郎殿

一、寫眞　十枚

鎌倉建長寺半僧坊殿

一、先代左團次奉納の額　明治卅五年一月　一面

香川ふく殿

一、新富座筋書　二冊
一、明治座筋書　一冊
一、壽語六　一枚
一、錦繪　二組

◇…お掃除姿の老博士本多さん…◇

小使の仕事を奪ふ事になるので六月から熱心相手のない町内掃除に轉向したものさ、はじめは暑いのと夜中だから素ッ裸でやつたら忽ちお巡りさんに「コラコラ」とやられた、それからこんな簡單な服裝でやつてるよ、「ハッハッハッ」

か付近の人々の話題にのぼり、このごろではこの奇特な老人に刺戟されてこれを眞似る者が續出する有樣に、明け放れたこの邊一帶の路上には塵一つなく掃き清められてゐるといふ、この街路淨化の先

一、蔦模様血染御書

舞臺模型

先代左團次當り狂言十場面

後藤又兵衛（春日社頭）
大盃（試合）
川中島（信玄陣屋）
鑄掛松（雨國）
惡源太（紫晨殿）
碇知盛（大物浦）
籠釣瓶（大屋根）
村井長庵（赤羽橋）
島衛（招魂社）
水滸傳（瓦罐寺）

先代左團次追善展覽會記念
現代人氣俳優揮毫色紙　數十枚

各家御秘藏品

市川左團次殿

一、火鉢　先代左團次樂屋にて使用のもの　一個
一、鏡臺　右同　一個
一、化粧道具　右同　五個
刷毛、つけひげ、皿、まゆげ、兎足
一、きせる　丸橋忠彌に使用のもの　一個
一、財布　同　一個
一、煙草入　先代遺愛品　一個
一、つゞら形手箱　樂屋にて使用のもの　一個
一、大入帛紗　舞臺で使用のもの　一枚
一、帛紗　五枚
一、先代遺愛の小箱　一個
一、脚絆、足袋　先代左團次富士登山の節使用のもの　各一揃
一、先代遺愛の蒔繪火鉢　一個
一、「細川血達磨」軸　一幅
一、「高野長英の圖」　一幅
一、卷煙草入　先代左團次樂屋にて使用のもの　三個
一、象牙パイプ　先代遺愛品　一個
一、紙入　同　一個
一、朱塗の手箱　書抜入れに使用のもの　一個
一、寫眞　四十三枚
一、寫眞入額面　二面
一、黑塗うがひ椀　定紋入　一個
一、書類　十二枚
一、是眞の屏風　默阿彌より贈られしもの　半双
一、辭表　一枚
一、出演の證　二枚
一、小團次給金前借證　一枚
一、矢の根のクマ　一枚
一、番附　四枚
一、高野長英小傳略　一册
一、小田原道了權現六世上人より贈られし福緣壽三　枚
一、新富座株券　一枚
一、俳優組合功勞證　先代左團次宛　一枚

市川荒次郎殿

一、寫眞　十九枚
一、寫眞帖　一册

市川左升殿

一、神軸　先代左團次祈禱せしもの　一幅
一、煙草入　先代左團次遺愛品　一個
一、メション、パイプ　右同　一個

市川宗家殿

一、市川宗家總代　先代左團次印形　一個
一、團菊、左勸進帳額面　一面
一、技藝師範狀　一枚

堀內鶴雄殿

一、先代左團次寫眞　一枚
一、番附　伊勢古市長盛座　二枚

鳥居言人殿

一、川邊御楯筆　獅子の圖　一幅
明治廿七年一月明治座に於て先代左團次石橋を演ぜし折本圖により獅子の「縫ぐるみ」を製作使用せり

川尻清潭殿

一、小箱　先代左團次遺愛品　一個
一、大入ビラ軸　一幅
一、丸橋忠彌書下し六十年記念番附　一枚
一、久松座土間定價表　一枚
一、千歲座明細圖　十枚
一、番附　四枚
一、筋書　一枚
一、双六　一揃
一、後藤又兵衛衣裳

河竹繁俊殿

一、橫書本　二種　九册
一、臺本　十種　卅五册

金山甚太郎殿

一、寫眞　十枚

鎌倉建長寺半僧坊殿

一、先代左團次奉納の額　明治卅五年一月　一面

香川ふく殿

一、新富座筋書　二册
一、明治座筋書　一册
一、壽語六　一枚
一、錦繪　二組

田畑大藏殿

一、古今俳優似顏大全　一册
一、錦繪帖　六册
一、縮緬錦繪帖　五册
一、縮緬錦繪　四枚

竹柴彦三殿

一、「梅王」のくまどりの軸　一幅

早大演劇博物館殿

一、錦繪　卅一枚
一、錦繪、番附、繪本、其他　明治座沿革史　三十點
一、桝　千歲座上棟式に使用のもの　一個

相州大雄山最乘寺殿

一、先代左團次木像　一體

（裏面へ續く）

一、見立番附　五枚
一、三府役者改名未祭　一枚
一、諸藝東京自漫見立番附　一枚
一、三府俳優力競　一組
一、新富座當細見　一枚
一、各座俳優給金位附　一枚
一、新富座番附　清元延勝の女形として出演　一枚
一、錦繪　八組
一、新富座辻番附　三枚

中村利器太郎殿

一、先代左團次出演の各座番附　三十枚
一、新富座筋書　一冊
一、明治座筋書　一冊
一、都新聞附錄歌舞伎筋書綴込　二冊
一、歌舞伎新報附錄　龍づくし　一枚
一、東京慈善演劇番附　一枚
一、先代左團次舞臺錦繪集　一冊
一、錦繪　一枚

名鹽武富殿

一、寫眞　一枚

井口政治殿

一、おもちゃ繪に見た左團次　六枚
一、都新聞附錄　一枚
一、錦繪　十枚
一、左團次當り役番附　四冊
一、繪本　一枚
一、番附　五枚
一、双六に見た左團次　一枚
一、先代左團次寫眞

野口眞造殿

一、先代左團次が樂屋にて使用せし「あんか」　一個
一、遺愛の莫入　二個
一、鎧　當代左團次初節句の時贈られしもの　一櫃
一、先代左團次七回忌の時の配り物「帛紗」　一枚
下村觀山下畫大彦染（天鼓鳴自然）

岡本金泉殿

一、左團次門人の證　一枚
團十郎、左團次、小團次連名の先代左團次の門人に與へし證（明治二十八年十月附）

久保田米所殿

一、新富座筋書　一冊
一、日本眞眞間毎の月左團次妻女影繪　一冊
一、錦繪　三組
一、都新聞附錄明治座筋書　一冊
一、寫眞　二枚
一、大坂番附　一枚
一、團扇繪　一組
一、俳優三十六句撰、外　三冊
一、影芝居第十一號　一冊
一、十役者教訓抄奇談　一冊

山崎裕康殿

一、寫眞帖　三冊
一、寫眞　十三枚
一、寫眞（大形）　三枚

松本さだ殿

一、踊り手拭　先代左團次使用のもの　一本

藤浪與兵衛殿

一、「丸橋忠彌」の大刀　一振
一、まんぢゆう笠　一個
一、赤合羽　一着
一、叺莫入キセル付　一個
一、吉原下駄　一個
一、鴨居　一本
一、「いかけ松」の荷天秤付　一荷
一、「大盃」の大小刀　二振
一、大盃　一個

渥美清太郎殿

一、繪番附　六十二枚

荒井清太郎殿

一、左團次繪番附貼込屏風　半双

安部豐殿

一、寫眞　五枚

淺田三槐殿

一、市川左團次筆短冊（句）　一枚
一、錦繪　四組
一、死繪　二組
一、銅版　一組
一、配り物　玉章筆、千歳座開場披露　一枚
一、都新聞繪附錄　一枚
一、明治座番附　五冊
一、俳優番附　二枚
一、俳優見立番附　一枚
一、先代左團次寫眞　十枚

淺田澱橋殿

一、狂詩短冊　二枚
一、文久筆　一、痴嚢筆
一、錦繪　五組

淺野源太郎殿

一、錦繪　二組
一、錦繪　一冊
一、番附綴　一冊
一、先代左團次追善興行記念繪葉書　七枚
（明治卅九月九月）

佐久間元次郎殿

一、光峨筆　大根の圖　先代左團次贊　一幅

木村錦花殿

一、番附　二枚
明治廿五年三月先代左團次廿九年振で故郷大阪へ錦を飾り浪花座へ出勤を極つた時五代目菊五郎が初めて大阪へ乘込み角座へ出勤し兩優の競爭となり道頓堀を驚がした時の兩座番附
一、先代左團次の考案せる佐野次郎左衛門のかつら二個

城戸一郎殿

一、明治座筋書　四冊

桐生織物同業組合殿

一、錦繪　一枚
一、錦繪織姫繻子　三枚
明治二十七年五月桐生の織物會社が始めて織姫繻子を製造した當時宣傳のため先代左團次を煩はし織姫神社を祀る白瀧姫の演劇興行の時のもの
一、寫眞左團次一座奉納の天水桶
前記の興行大當りで左團次等が明治二十八年六月桐生の織姫神社に奉獻したもの

桐生富士瓦斯紡績株式會社殿

一、先代左團次初演織姫繻子の圖額　一面

木村良恭殿

一、寫眞　七枚

水谷幻花殿

一、左團次當り役番附　十枚
一、繪本　四冊
一、番附　一枚
一、双六に見た左團次　五枚
一、先代左團次寫眞　一枚

野口眞造殿

一、先代左團次が樂屋にて使用せし「あんか」　一個
一、遺愛の莫入　二個
一、鎧　當代左團次初節句の時贈られしもの　一櫃
一、先代左團次七回忌の時の配り物「帛紗」　一枚
下村觀山下畫大彦染（天鼓鳴自然）

岡本金泉殿

一、左團次門人の證　一枚
團十郎、左團次、小團次連名の先代左團次の門人に與へし證（明治二十八年十月附）

久保田米所殿

一、新富座筋書　一冊
一、日本眞眞問毎の月左團次妻女影繪　一冊
一、錦繪　三組
一、都新聞附錄明治座筋書　一冊
一、寫眞　二枚
一、大坂番附　一枚
一、團扇繪　一組
一、俳優三十六句撰、外　三冊
一、影芝居第十一號　一冊
一、十役者教訓抄奇談　一冊

山崎裕康殿

一、寫眞帖　三冊
一、寫眞　十三枚
一、寫眞（大形）　三枚

松本さだ殿

一、踊り手拭　先代左團次使用のもの　一本

藤浪與兵衛殿

一、「丸橋忠彌」の大刀　一振
一、まんぢゆう笠　一個
一、赤合羽　一着
一、叺莫入キセル付　一個
一、吉原下駄　一個
一、鴨居　一本
一、「いかけ松」の荷天秤付　一荷
一、「大盃」の大小刀　二振
一、大盃　三個
一、木劍　二振
一、「谷風」の大刀　一振
一、「碁盤忠信」の太刀　一振
一、「蛇の目すしの清藏」清正公護摩札　一枚
一、佐野次郎左衛門の大刀　一振
一、菅笠　一個
一、ふりわけ荷物　一荷
一、千住提莫入　一個
一、わらじ　一足
一、先代左團次似顔切り首　一個
一、「頓兵衛」一本ざし　一振

小出英男殿

一、佛像　先代左團次所有のもの　三體
一、帛紗　同遺愛品　一枚

一、俳優番附　二枚
一、俳優見立番附　一枚
一、先代左團次寫眞　十枚

淺田澱橋殿

一、狂詩短冊　二枚
一、文久筆　一、痴叢筆
一、錦繪　五組

淺野源太郎殿

一、錦繪　二組
一、錦繪　一冊
一、番附綴　七枚
一、先代左團次追善興行記念繪葉書
（明治卅九月九月）

佐久間元次郎殿

一、光峨筆　大根の圖　先代左團次贊　一幅

木村錦花殿

一、番附　二枚
明治廿五年三月先代左團次廿九年振で故郷大阪へ錦を飾り浪花座へ出勤を極つた時五代目菊五郎が初めて大阪へ乘込み角座へ出勤し兩優の競爭となり道頓堀を驚がした時の兩座番附
一、先代左團次の考案せる佐野次郎左衛門のかつら二個

城戸一郎殿

一、明治座筋書　四冊

桐生織物同業組合殿

一、錦繪　一枚
一、錦繪織姫繻子　三枚
明治二十七年五月桐生の織物會社が始めて織姫繻子を製造した當時宣傳のため先代左團次を煩はし織姫神社を祀る白瀧姫の演劇興行の時のもの
一、寫眞左團次一座奉納の天水桶
前記の興行大當りで左團次等が明治二十八年六月桐生の織姫神社に奉獻したもの

桐生富士瓦斯紡績株式會社殿

一、先代左團次初演織姫繻子の圖額　一面

木村良恭殿

一、寫眞　七枚

水谷幻花殿

一、瓦煎餅の型　先代左團次文字入り　一枚

清水さだ殿

一、明治座芝居茶屋權利株券（明治廿六年のもの）　一枚
一、撥帛紗　一枚
先代左團次より贔負筋へ配りしもの（五十年前）

廣瀨菊雄殿

一、都新聞附錄　一枚
一、錦繪　二枚
一、明治六年の劇場狂言新報　一枚
一、引幕繪　二枚
一、左團次大阪乘込の圖　一枚

鈴木竹堂殿

一、錦繪　三枚

先代左團次記念大演藝會

九月廿八日（夜）日比谷公會堂にて

會員券一圓

主催　都新聞社

一、「蛇の目すしの清藏」清正公護摩札　一枚
一、佐野次郎左衛門の大刀　一振
一、菅笠　一個
一、ふりわけ荷物　一荷
一、千住提茛入　一個
一、わらじ　一足
一、先代左團次似顔切り首　一個
一、「頓兵衛」一本ざし　一振

小出英男殿

一、佛像　先代左團次所有のもの　三體
一、帛紗　同遺愛品　一枚

一、撥帛紗　一枚

先代左團次より最負筋へ配りしもの（五十年前）

廣瀨菊雄殿

一、都新聞附錄　一枚
一、錦繪　二枚
一、明治六年の劇場狂言新報　一枚
一、引幕繪　二枚
一、左團次大阪乘込の圖　一枚

鈴木竹堂殿

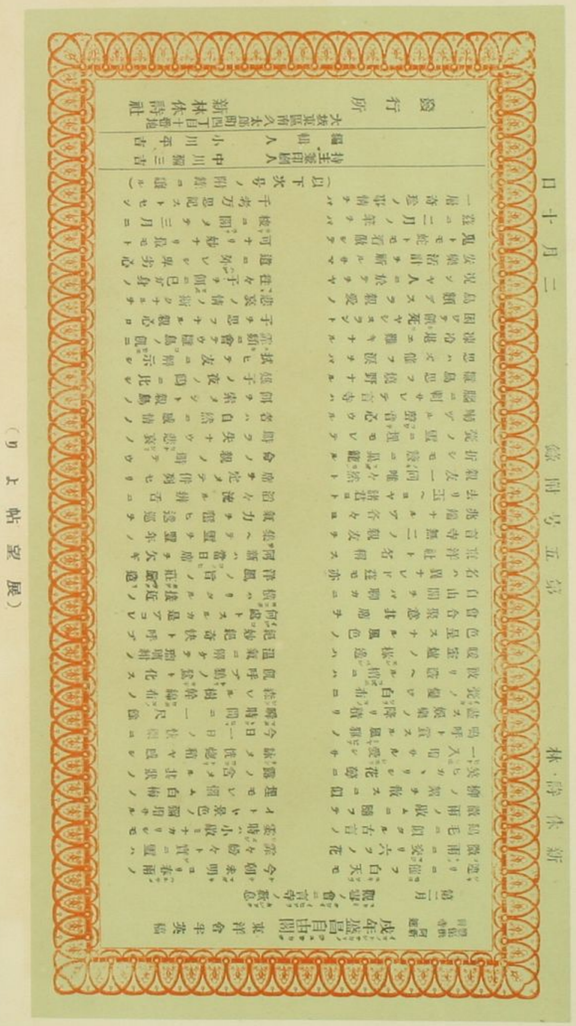
一、錦繪　三枚

先代左團次記念大演藝會

九月廿八日（夜）日比谷公會堂にて

會員券一圓

主催　都新聞社



（りよ帖定展）

明治三十六年八月（三角洲）第十四號

主筆

都の花（中根香亭）
早稲田文學（坪内逍遙）
めざまし草（森鷗外）
同志社文學（小崎弘道）
小天地（薄田泣菫）
涙花（西村天囚）

新小説（饗庭篁村）
文壇（木崎好尚）
學の友（小笠原金波）
櫻（江見水蔭）
緘（尾崎紅葉）
文學（藤田劍峰）

よしあし草（中村春雨）
詞海（武田櫻桃）
涙花千草紙（加藤眠柳）
百鳥（尾崎紅葉補）
小舟（三木天遊）
關西文學（齊藤渓舟）

反魂香

立ちのぼる烟のすゑは跡なくて
思ひをのみや世にとゞむらん

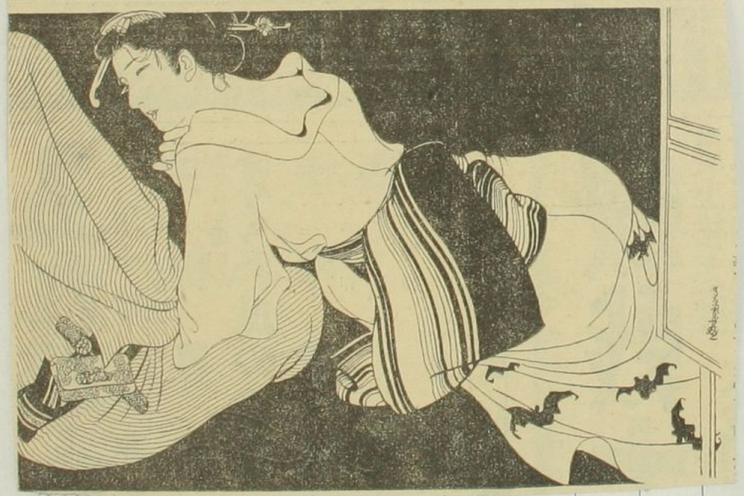
國民之友（德富蘇峰）
しがらみ草紙（森鷗外）
文學界（北村透谷）
新著月刊（後藤宙外）
世界の日本（竹越三叉）
新作文庫（岡野紫水）

この花草紙（木内愛渓）
文庫（尾崎紅葉）
涙花文學（西村天囚）
青年文（田岡嶺雲）
芦分舟（山田芝廼園）
我樂多文庫（石橋思案）

藝文（上田柳村）
仰羅文庫（伊原青々園）
むさし（半井桃水）
點紅（武富瓦全）
一藝（向井藻浦）
文藝（奥村柾分）
大阪文

春の展覽（煌土社展）　鈴木朱雀

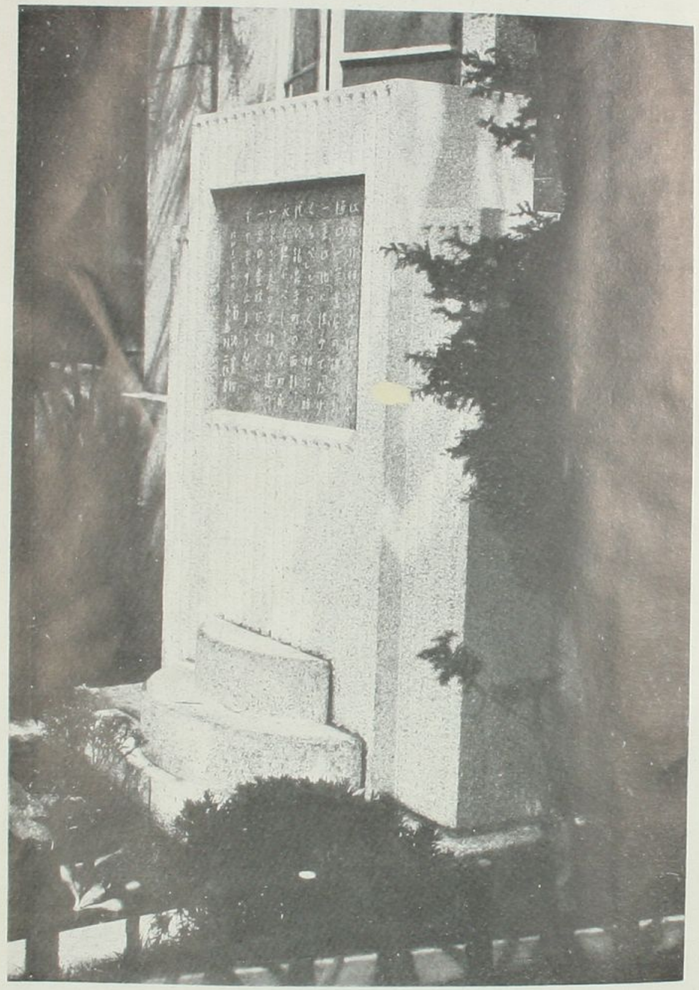
（第三種郵便物認可）　京日日新聞



【展院】作氏花耕村山　王巖寒　②秋の術美

複原制

樋口一葉女史の碑



（下谷龍泉寺町建設）

閲覧

新板浮世忘れ草つくし

古堀

これは風流三枚綴、新定の新一枚摺の双紙がある。作者は同一である。前記外に、新定の瓦版で、浜末の狂行で、